

# 張籍詩訳注(21)

——「塞上曲」「董逃行」「江村行」——

畑村 学  
橘 英範  
佐藤 大志

## The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (21)

Manabu HATAMURA  
Hidenori TACHIBANA  
Takashi SATO

**要旨** 本稿は、中唐の詩人・張籍の詩の訳注(21)である。本篇には、「塞上曲」・「董逃行」・「江村行」(ともに中華書局『張籍詩集』巻七に載録)の訳注を掲載する。なお、本稿より、徐礼節・余恕誠校注『張籍集繫年校注』(中華書局、二〇一一年)を参照することにした。訳注では、「徐余注」と略称を用いることにする。

### 訳注

417 塞上曲

#### 【題解】

国境の塞(とりで)の曲。

『楽府詩集』巻九二では「新楽府辞・楽府雜題」に分類される。ただし『楽府詩集』や『全唐詩』巻三八二は、この詩を「塞下曲」に作る。「塞下曲」も『楽府詩集』では「塞上曲」と同様、唐代以降に制作され始める新楽府辞として、「塞上曲」に引き続いて採録している。

『楽府詩集』巻二二「横吹曲辞」の「出塞」の郭茂倩「楽府解題」に、楽

府「出塞」「入塞」の来歴を記した後、「唐又有『塞上』『塞下』曲。蓋出於此」(唐に又『塞上』『塞下』曲有り。蓋し此より出づ)とあり、唐の新題楽府である「塞上曲」や「塞下曲」が、横吹曲辞である「出塞」「入塞」に基づくことを指摘する。

テキストによって詩題が異なるものもあるが、今便宜的に『楽府詩集』に掲載される詩題に従って同題楽府や同類の楽府の作者を列挙すれば、「塞上

二〇一二年十二月二十一日(受理)

畑村 学 宇部工業高等専門学校 一般科准教授

「責任著者」

橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科准教授  
佐藤 大志 広島大学大学院教育学研究科准教授

曲」には、李白・王昌齡(二首)・司空曙・耿漳・貫休(九首)・戎昱(二首)・王涯(二首)・周朴・張祜の作があり、「塞下曲」には、李白(六首)・郭震・王昌齡(二首)・馬戴(二首)・于濬・陶翰・李益(二首)・貫休(十一首)・盧綸(六首)・皎然(二首)・李賀・劉駕・王涯(二首)・令狐楚(二首)・張仲素(五首)・戎昱(六首)・丁稜・朗士元・許渾・周朴・張祜(二首)がある。この他、『樂府詩集』卷九二・九三に採録される新題樂府「塞上行」「塞下」を合わせれば、唐代に極めて多くの同題・同類の樂府が作られていることがわかる。唐朝の国土拡張政策による長征、およびそれに反発する吐蕃を中心とした周辺異民族との攻防を背景に、こうした多くの樂府が作られたものと思われる。

「塞上」は国境のとりでの辺り。「塞」は城塞、「上」はほとりの意味で、その辺り一帯を指す。

『淮南子』人間訓に「近塞上之人、有善術者。馬無故亡而入胡」(塞上に近きの人に、術を善くする者有り。馬 故無くして亡げて胡に入る)とあるのは、故事「塞翁が馬」の典故として知られる。その後、胡の侵入により十人中九人が戦死するなかで、息子の落馬による足の骨折のおかげで、父子共々たまたま無事であったという。このように、国境のとりで付近は、異民族による侵入と、それに対抗するための戦闘が繰り返される場所である。

唐以前の詩では、漢の蔡琰作として伝わる「胡笳十八拍」其十七拍『古詩紀』卷一四)に「塞上黄蒿分枝枯葉乾、沙場白骨分刀痕箭瘢」(塞上の黄蒿枝は枯れ葉は乾き、沙場の白骨 刀痕 箭瘢あり)とあり、辺塞の寂しい自然の風景と、砂漠で行われた戦争の惨たらしい跡が詠われている。また、鮑照「代陳思王白馬篇」(『集注』卷三)に「但令塞上兒、知我獨為雄」(但だ塞上の児をして、我独り雄と為すを知らしむるのみ)とあるのは、勇を誇る辺塞の若者たちが詠われている。

唐詩では初唐から多くの例が見える。詩中で用いられた例としては、陳子昂「感遇詩三十八首」其三(『全唐詩』卷八三)に「但見沙場死、誰憐塞上孤」(但だ沙場に死するを見るのみ、誰か塞上の孤を憐れまん)とあるのは、兵士が戦場で死んだからといって、誰もその孤児を憐れんたりはしないと詠う。杜甫には四例、うち「秋興八首」其一(『詳注』卷一七)に「江間波浪兼天湧、塞上風雲接地陰」(江間の波浪 天を兼ねて湧き、塞上の風雲 地に接して陰)とあるのは、白帝城(塞上)から眺めた秋景を詠っている。

張籍にこの他一例、217「送和蕃公主」(卷四)に「塞上如今無戰塵、漢家公主出和親」(塞上如今 戰塵無く、漢家公主 和親を出だす)とある。唐の皇族が和平のため蕃族(ここではウイグル)に降嫁するため、国境を接する辺塞の地では戦争が起こっていないと詠う。

『樂府詩集』や『全唐詩』卷三八二は詩題を「塞下曲」に作る。「塞下」でも「塞上」と同様、国境のとりでの付近一帯。「下」はとりでの下の辺り。『史記』高祖本紀に「盧縮与数千騎居塞下候伺」(盧縮 数千騎と与に塞下に居りて候伺す)とあるのは、とりで(長城)の下を指すようである。六朝詩には一例、隋の薛道衡「出塞二首」其一(『文苑英華』卷一九七)に「塵沙塞下暗、風月隴頭寒」(塵沙 塞下暗く、風月 隴頭寒し)とあり、同類の樂府においても秋夜の国境の城塞が詠われている。唐詩の用例も多い。一例として、陳子昂「送別出塞」(『全唐詩』卷八三)に「胡兵屯塞下、漢騎属雲中」(胡兵 塞下に屯し、漢騎 雲中に属なる)とあるのは、胡のたむるする国境のとりで付近に出征する友人を見送った詩である。

杜甫の詩には用例がない。張籍にも詩語としての用例は見当たらない。徐余注は、この詩の背景として、貞元六年(七九〇)四月の迴紇(ウイグル)の国内混乱や諸部族の吐蕃への帰順と吐蕃による北庭大都護府(現在の新疆ウイグル自治区昌吉回族自治州)の陥落、及び貞元七年(七九一)五月、事態收拾を図るために唐朝が行った迴紇の王・奉誠可汗の冊立を指摘する。

以上の推論を踏まえて徐余注は、この詩の制作時期を貞元七年五月からそれほど時間が経過していない時期、張籍が「鵲山漳水」(207「逢王建有贈」(卷四)に見える語句。鵲山・漳水は今河北省邢臺市付近)辺りに遊学していた際の作とする。この詩の背景については、9・10句の【語釈】を参照。

【本文・書き下し文】

- |            |                    |
|------------|--------------------|
| 1 邊州八月修城堡  | 邊州八月 城堡を修め         |
| 2 候騎先燒磧上草  | 候騎 先ず磧上の草を焼く       |
| 3 胡風吹沙度隴飛  | 胡風 沙を吹きて 隴を度りて飛び   |
| 4 隴頭林木無北枝  | 隴頭の林木 北枝無し         |
| 5 將軍閱兵青塞下  | 將軍 兵を閲す 青塞の下       |
| 6 鳴鼓鑿鑿促獵圍  | 鼓を鳴らすこと鑿鑿 獵の囲みを促す  |
| 7 天寒山路石斷裂  | 天寒くして 山路 石は斷裂し     |
| 8 白日不銷帳上雪  | 白日は銷かさず 帳上の雪       |
| 9 烏孫國亂多降胡  | 烏孫 國亂れて 胡に降るもの多く   |
| 10 詔使名王持漢節 | 詔して名王をして漢節を持せしむ    |
| 11 年年征戰不得閒 | 年年征戰 閑なるを得ず        |
| 12 邊人殺盡唯空山 | 邊人殺され尽くして 唯だ空山あるのみ |

## 【押韻】

堡・草—上声三二皓  
飛・園—上平声八微、枝—上平声五支（古詩通押）  
裂・雪—入声一七薛、節—入声一六屑（同用）  
閑・山—上平声二八山

## 【口語訳】

- 1 辺境の地区では 仲秋八月になると城塞の修理を行い
- 2 斥候の騎兵が まっさきに砂漠に生えた草を焼き払う
- 3 胡地から吹く風が砂を吹き上げ 隴山を越えて飛んでいくために
- 4 隴山の山頂に生える木々には 北に向けて伸びる枝がないのだ
- 5 將軍殿は 青黒いとりでのあたりで部隊の点検を行うことにし
- 6 太鼓を「ドン」と響かせて 獵場の囲いを張り巡らせる
- 7 天気は寒々として 山道の岩には裂け目が入り
- 8 太陽が テントに積もった雪を溶かすことはないのだ
- 9 烏孫国で混乱があり 匈奴に降る胡人がたくさん出たため
- 10 我が天子は 偉大な烏孫王に漢の使臣の印を持たせることにした
- 11 毎年毎年 遠征がいとまなく続けられ
- 12 辺境の人々は皆殺されて ここにはただ人気ない山があるだけだ

## 【語釈】

1・2 辺州八月修城堡、候騎先燒磧上草

「辺州」 辺境の州。詩のなかでは異民族の地と国境を接する戦地として描かれる。「州」は本来行政区画の一つを表すが、ここでは辺境の地区というほどの意味で用いられているのであろう。

『後漢書』西羌伝の論に「或以辺州難援、宜見捐弃。或懼疽食浸淫、莫知所限」（或いは以えらく辺州は援け難ければ、宜しく捐弃せらるべしと）とある。辺境の州は救援が難しいので、放棄すべきだと考える者がいると記す。

唐以前の詩に用例はない。唐詩では初唐から用例が見え、一例として、陳子昂「感遇詩三十八首」其三十四（『全唐詩』卷八三）に「避讎至海上、被役此辺州」（讎を避けて海上に至り、役を此の辺州に被る）とあるのは、辺境で異民族と戦う兵士自身が身の上を話す内容である。陳注は高適「送劉評事充朔方判官賦得征馬嘶（『全唐詩』卷二二四）」に「征馬向辺州、蕭蕭嘶不休」（征馬 辺州に向かい、蕭蕭として 嘶き休まず）とあるのを引く。突厥

や吐蕃との国境に近い靈州に、朔方軍節度判官（書記官）として赴任する劉評事の送別の詩であり、「辺州」は靈州を指す。樂府詩では、同時代の令狐楚「少年行四首」其一（『全唐詩』卷三三四）に「少小辺州慣放狂、驛騎蕃馬射黄羊」（少小より 辺州 放狂に馴れ、蕃馬に驛騎して黄羊を射る）とあり、辺境の若者が鞍を乗せない裸馬に乗り狩りをする様子が詠われている。杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

「八月」 旧暦の仲秋で、古来、北方の異民族である匈奴が長城を越えて侵入してくる季節とされた。いわゆる本来の意味での「天高く馬肥ゆる」秋であり、そのための対策として続く「修城堡」、城堡の修繕作業が行われるのである。『漢書』李広蘇建伝付李陵の伝に「方秋匈奴馬肥、未可与戰」（秋に方りて匈奴馬肥え、未だ与に戦うべからず）とある。

唐以前の詩で辺境の地の「八月」を詠じた詩は見当たらない。唐詩では、王昌齡「塞下曲四首」其一（『全唐詩』卷一四〇）に「蟬鳴空桑林、八月蕭關道」（蟬は鳴く 空桑の林、八月 蕭關の道）とあるのは、同じく辺塞の寂しい秋を詠じているが、異民族が攻めてくる時期というニュアンスはない。

杜甫には詩語として八例、いずれも時節の推移やそれに伴う自然の風景の変化とその際の感慨を詠うもので、張籍のこの詩のように、夷狄の襲来を暗示するものではない。管見では、唐以前の詩、および初盛唐から中唐に至るまでの詩には、「八月」を張籍と同じような意味で使う例はないようである。

「八月」の語は見えないが、秋に国境を越えて異民族が攻めてくることに關しては、李白「塞下曲六首」其五（王琦注本卷五）に「塞虜乘秋下、天兵出漢家」（塞虜 秋に乗じて下り、天兵 漢家を出づ）とある。張籍の用例では、7「征婦怨」（卷一）に「九月匈奴殺辺将、漢軍全没遼水上」（九月 匈奴 辺将を殺し、漢軍 遼水の上に全没す）と、九月、匈奴により將軍が殺されたことで、漢軍が全滅したことが「九月」と明記して詠われ、また、414「隴頭行」（卷七）に「驅我辺人胡中去、恣放牛羊食禾黍」（我が辺人を驅りて胡中に去らしめ、恣に牛羊を放ちて禾黍を食らわしむ）では、秋の收穫の時期に胡人が漢人の地に侵入してくることが詠われている。

「修城堡」 城塞を修理する。

「城堡」は、唐以前の詩に用例はない。唐詩には張籍のこの例を除いて二例あり、岑参「行軍詩二首」其一（『校注』卷三）に「干戈礙郷国、豺虎滿城堡」（干戈 郷国を礙げ、豺虎 城堡に満つ）とあるのは、安祿山の乱（七五五）により国中が戦火となり、獐猛な反乱兵が城塞に立てこもったことを言う。もう一つは陳注も引く杜甫の例であり、「送長孫九侍御赴武威判官」

〔詳注〕卷五に「奪我同官良、飄飄按城堡」（我が同官の良を奪い、飄飄として城堡を按ぜしむ）とあるのは、親族である河西節度使の杜鴻漸が、自分の同僚である長孫某を判官として武威に召喚したことを言う。「武威」は甘肅省涼州府に属する県。

なお、長城建設にかり出された人々の苦しみを詠じた張籍の詩に、12「築城詞」（巻一）がある。本訳注（6）を参照。長城や城塞の増築や修繕作業は、異民族との対立があった時代には必ず行われていたであろう。「築城詞」が、張籍と同時代の長城や城塞の増築・修繕を詠じた諷諭詩であるとすれば、この「塞上曲」の1句にわずか三文字でさりげなく表現されている城塞の修繕にも、「築城詞」で描かれる修繕作業に携わる人々の苦しみがそこに込められていることになる。また、王建「涼州行」（『王建詩集』巻一）に「辺頭州界尽胡兵、將軍別築防秋城」（辺頭の州界 尽く胡兵、將軍 別に防秋城を築く）とあり、辺境の州や県が胡兵によってすべて陥落したため、辺塞を守る將軍が本来の城塞とは別に城塞を建設させたことが詠われている。

〔候騎〕斥候の騎兵。「候」は偵察兵を言う。

陳注や李冬生注も引く『史記』匈奴列伝に「（单于）使奇兵入燒回中宮、候騎至雍甘泉」（单于）奇兵をして入りて回中宮を焼き、候騎 雍の甘泉に至る）とある。单于の放った斥候が、雍（陝西省）の甘泉宮にまで至ったことを記す。

唐以前の詩にも用例が見え、鮑照「建除詩」（『集注』巻六）に「定舍後未休、候騎勅前装」（舍を定めて 後未だ休まず、候騎 前装を勅う）とあるのは、斥候の騎兵が先鋒として軍備を整えることを言う。李冬生注引く何遜「見征人分別詩」（『文苑英華』巻一九五、本集巻一。隋の何妥「入塞」としても伝わる）に「候騎出蕭関、追兵赴馬邑」（候騎 蕭関を出で、追兵 馬邑に赴く）とあり、陳注引く隋・虞世基「出塞二首」其一（『文苑英華』巻一九七）に「徵兵広武至、候騎陰山帰」（徵兵 広武に至り、候騎 陰山に帰る）とあるのも、斥候の騎兵がいち早く目的地向かうことを詠う。

唐詩では盛唐から用例が見えるようになる。王維「使至塞上」（趙注本巻九）に「蕭関逢候騎、都護在燕然」（蕭関 候騎に逢い、都護 燕然に在りと）とあるのは、先の何遜の詩を踏まえた表現である。また、皎然「從軍校五首」其一（『全唐詩』巻八二〇）に「候騎出紛紛、元戎霍冠軍」（候騎 出づること紛紛とし、元戎に 霍冠軍）とあるのは、多くの斥候の騎兵が出発し、彼らを率いるは名将霍去病にも准えらるる人物と詠う。

〔磧上草〕砂漠に生えている雑草。「磧」は砂漠。

「磧上」の二字の並びでは、唐以前の詩文に用例が見当たらない。唐詩では、張籍以前では岑參「偃師東与韓樽同詣景雲暉上人即事」（『校注』巻一）に「尚書磧上黄昏鐘、別駕渡頭一帰鳥」（尚書 磧上 黄昏の鐘、別駕 渡頭 一帰鳥）とあるのみ。ただし、岑參の詩の「磧」は、尚書磧という偃師（唐代の県名で、今の河南省洛陽市の東）の東の洛水付近の地名であり、この場合「磧」は川の中州のような場所を言う。

四庫全書・『全唐詩』巻三八二・『樂府詩集』巻九二は「磧中」に作る。「磧中」は、唐以前の用例は見当たらない。唐詩の用例も張籍以前に岑參に二例あるだけである。そのうちの一例は、有名な「磧中作」（『校注』巻二）に詩題として用いられている。詩語としての例は、「使院中新栽柏樹子呈李十五栖筠」（『校注』巻二）に「不曾臺上種、留向磧中栽」（皆て臺上に種えず、留めて磧中に栽えたり）とあり、柏樹を北庭都護府の役所に植えたことをこのように表現する。

張籍にはこの他に一例、27「関山月」（巻一）に「沙磧連天霜草平、野駝尋水磧中鳴」（沙磧 天に連なりて 霜草平かに、野駝 水を尋ねて 磧中に鳴く）とあった。この詩と同じく戦場となる砂漠に広がる枯れ草が詠われている。

辺境地帯に生える草を詠じた詩としては、隋・虞世基「出塞二首」其一（『樂府詩集』巻二一）に「窮秋塞草腓、塞外胡塵飛」（窮秋 塞草腓み、塞外 胡塵飛ぶ）とあり、晩秋になって枯れた城塞付近の草を詠じている。また、張籍と同時代の張仲素「塞下曲五首」其五（『全唐詩』巻三六七）に「陰磧茫茫塞草肥、枯樺烽上暮雲飛」（陰磧茫茫として 塞草肥え、枯樺烽上 暮雲飛ぶ）とあるのは、砂漠一面に広がる雑草を詠じている（ただし、「肥」は「腓」に作るテキストがあり、その場合、虞世基の詩と同じく「枯れる」の意）。張籍27「関山月」（巻一）にも「沙磧連天霜草平、野駝尋水磧中鳴」（沙磧 天に連なりて 霜草平かに、野駝 水を尋ねて 磧中に鳴く）とあるように、砂漠に広がる霜枯れた草が詠われている。

砂漠地帯に生える草を火で焼くことについては、王維「出塞作」（趙注本巻一〇。『樂府詩集』巻二一）では「出塞」に作る）に「居延城外獵天驕、白草連天野火燒」（居延城外 天驕獵し、白草天に連なりて 野火燒く）とある。匈奴が居延城の外で狩りをするために、一面の枯れ草に火を放つことを詠う。狩りは、この詩と同じく兵卒の訓練として行われたものであろう。

なお、草を焼く目的について、諸注では二つの解釈があり、李冬生注は、敵の行動を監視しやすくするためであると指摘する。草原の草がそこにいる動物を隠すことについては、北齊の歌謡「勅勒歌」（『樂府詩集』巻八六。北齊の將軍・斛律金の作とも伝えられる）に「天蒼蒼、野茫茫。風吹草低見牛



羊」(天は蒼蒼、野は茫茫。風吹けば草低れて 牛羊を見る)とあるのがよく知られている。

徐注・徐余注では、敵の戦馬の食料を無くし、その侵入を防ぐためであると指摘する。その根拠として徐余注は、『通鑑』唐紀・昭宗天復三年の以下の記事を引く。「每霜降、(劉)仁恭輒遣人焚塞下野草。契丹馬多飢死」(霜の降る毎に、(劉)仁恭輒ち人を遣りて塞下の野草を焚かしむ。契丹の馬多く飢死す)。その胡三省注に「北荒寒早、至秋、草先枯死。近塞差暖、霜降草猶未尽衰。故契丹南並塞放牧。焚其野草、則馬無所食而飢死」(北荒は寒早く、秋に至りて、草先ず枯死す。近塞は差や暖かく、霜降るも草猶お未だ尽き衰えず。故に契丹南して塞に並いて放牧す。其の野草を焚くときは、則ち馬食らう所無くして飢死す)と記すのも引いている。

以上、この二句は辺境の地で旧暦八月になると行う防秋の作業について詠っている。作業の対象は、1句では兵士たちが宿営する城塞であり、2句はその下に広がっている砂漠に生える秋草である。徐余注に拠れば、安史の乱以後、隴西の地が吐蕃によって陥落したため、代宗・徳宗朝では吐蕃の東進と南下に備えて江淮の諸鎮から兵を調達して辺境の防衛に当たさせたこと、また、吐蕃が多く秋に侵攻するために、これらの守備兵を「防秋兵」と称したことを、張籍71「送防秋將」(巻二)の注で指摘する。

### 3・4 胡風吹沙度隴飛、隴頭林木無北枝

〔胡風〕胡地に吹く冷たく激しい北風。

徐余注も引く漢・蔡琰「悲憤詩」(『後漢書』蔡琰伝所引)に「処所多霜雪、胡風春夏起」(処る所 霜雪多く、胡風 春夏に起こる)とあり、匈奴に連行された作者が、中原とは異なる匈奴の自然環境を詠ずる中に見える。その他、鮑照「学劉公幹体」(『文選』巻三二)に「胡風吹朔雪、千里度龍山」(胡風 朔雪を吹き、千里 龍山を度る)とあるのは、「吹」も同時に使われた例である。李善注には「胡風」の典故として前掲蔡琰「悲憤詩」を引く。六朝詩で「胡風」の語が使われる場合、蔡琰と同じく匈奴の地での生活を余儀なくされた王昭君に関わる内容がほとんどである。

唐詩でも初唐から多くの用例が見える。駱賓王「辺夜有懐」(『全唐詩』巻七九)に「夜関明隴月、秋塞急胡風」(夜関 隴月明るく、秋塞 胡風急なり)とあるのは、詩題に示すように、辺境の地の夜を詠じたもの。

「胡風吹」の三字の並びでは、李白「白紵辞三首」其一(王琦注本巻四)に「寒雲夜捲霜海空、胡風吹天飄塞鴻」(寒雲は夜に捲いて 霜海空し、胡

風は天を吹きて 塞鴻を飄す)とあり、白紵の曲の激しい様子を自然の景によって表現していると考えられる。

杜甫には「胡風」の用例はない。張籍にもこの一例のみ。

〔吹沙〕砂漠の砂を吹き上げる。

この詩と同じように、風が砂を吹く例としては、唐以前では三国魏の劉楨「贈五官中郎將四首」其四(『文選』巻二三)に「涼風吹沙礫、霜氣何皚皚」(涼風 沙礫を吹き、霜氣 何ぞ皚皚たる)とある。この詩と同じく冷たい風が砂(砂礫)を吹き上げる例である。

唐詩では、岑參「過燕支寄杜位」(『校注』巻二)に「燕支山西酒泉道、北風吹沙卷白草」(燕支山西 酒泉の道、北風 沙を吹きて 白草を巻く)とあるのは、辺境の地に吹く冷たい北風が砂漠の砂を吹き上げる例である。

杜甫の一例、「觀打魚歌」(『詳注』巻一一)に「潜龍無声老蛟怒、迴風颯颯吹沙塵」(潜龍声無く 老蛟怒り、迴風颯颯として 沙塵を吹く)とあるのは、漁の様子を詠う中に見える。張籍はこの一例のみ。

〔度隴〕隴山を飛び越える。胡風の吹いた砂が隴山を越えて東の中原の方へと飛んでいくことを言う。

「隴」は隴山(隴頭山)を言う。次の「隴頭」とともに、414「隴頭行」(巻二)の【題解】を参照。

〔隴頭林木〕隴山の山頂の木々。「隴頭」は隴山(隴頭山)または隴山の頂上を指し、ここでは後者の意味であろう。

「林木」は詩文に古くから常見の語。一例として、魏の文帝曹丕「善哉行」(『文選』巻二七)に「高山有崖、林木有枝」(高山に崖有り、林木に枝有り)とあるのは、誰もが知っている事実として林の木々に枝があることが詠われる。にも関わらず、張籍のこの詩では、隴山の林木に北向きの枝がないと詠う。陳注に引く庾信「和裴儀同秋日詩」(『集注』巻四)に「霜天林木燥、秋氣風雲高」(霜天 林木燥き、秋氣 風雲高し)とあるのは、秋の日の自然の景を詠ずる。

唐詩でも初唐から用例が見え、儲光羲「登秦嶺作時陷賊歸國」(『全唐詩』巻一三七)に「林木被繁霜、合沓連山紅」(林木 繁霜を被り、合沓として 連山紅なり)とあるのは、霜で紅葉した秦嶺山脈の木々の様子を詠うなかに見える。

杜甫にも二例、うち「題衡山泉文宣王廟新学堂呈陸宰」(『詳注』巻二三)に「林木在庭戸、密幹暈蒼翠」(林木 庭戸に在り、密幹 蒼翠を暈む)と

あるのは、新築の学堂の庭のところに樹木が茂っている様子を詠っている。張籍にはこの一例のみ。

「北枝」北に向いた枝。北から吹く寒風のために、北に伸びる枝が無いのである。

唐以前の詩に用例がない。唐詩では初唐から用例が見え、王績「古意六首」其四（『全唐詩』卷三七）に「風驚西北枝、電隕東南節」（風は西北の枝を驚かし、電は東南の節を隕とす）とあるのは、松樹を痛めつける自然現象を言う。また李嶠「鷓鴣」（『全唐詩』卷五七。一に韋応物の作）に「南枝日照暖、北枝霜露滋」（南枝 日照暖かく、北枝 霜露滋し）とあり、鷓鴣にとつて北に向いた枝よりも南に向いた枝の方が生活しやすいことを詠う。

李冬生は「北枝」が多く梅を指すとし、晩唐の詩僧貫休「閑居擬齊梁四首」其四（『全唐詩』卷八二七）に「南枝復北枝、玉露霑毛衣」（南枝 復た北枝、玉露 毛衣を霑す）とあるのを引いている。

以上、この二句では、秋八月の辺境隴頭山周辺の厳しい自然環境について詠っている。なお、隴山に吹く激しい風については、27「関山月」（卷一）にも「隴頭風急雁不下、沙場苦戰多流星」（隴頭 風急にして 雁下らず、沙場の苦戦 流星多し）とあり、渡り鳥の雁が着地できないほど風が強いと詠われている。

#### 5・6 將軍閔兵青塞下、鳴鼓鑿鑿促獵圍

〔將軍閔兵〕將軍が部隊を点検し整える。

「將軍」は郡の指揮官である將軍。張籍30「將軍行」（卷一）に「彈箏峽東有胡塵、天子折日拜將軍」（彈箏 峽東 胡塵有り、天子 日を折びて將軍に拜す）とあった。その【語釈】を参照。

樂府で用いられた例を挙げれば、王昌齡の同題樂府二首其二（『樂府詩集』卷九二。『全唐詩』卷一四〇は「塞下曲」に作る）に「辺頭何慘慘、已葬霍將軍」（辺頭 何ぞ慘慘たる、已に霍將軍を葬る）とあり、辺塞での戦いで霍去病に準える將軍が死んだことを詠ずる。李白「塞下曲六首」其五（同卷九二）に「將軍分虎竹、戰士臥龍沙」（將軍 虎竹を分かち、戰士 龍沙に臥す）とあり、將軍が兵権を委任された証拠である割り符を持って辺塞に向かうことを詠う。また、戎昱「塞上曲二首」其二（同卷九二）に「山頭烽火声声叫、知是將軍夜獵還」（山頭の烽火 声声として叫ぶ、知る 是れ將軍の夜獵より還るを）とあるのは、戦闘の準備としての狩獵から戻る將軍を詠

じており、この詩と同じような場面が詠われている。

「閔兵」は部隊を点検し戦闘に備えること。古く『春秋』桓公六年の経文「秋、八月壬午、大閔」（秋、八月壬午、大いに閔す）の「穀梁伝」に「大閔者何。閔兵車也」（大いに閔すとは何ぞ。兵車を閔するなり）とあり、兵車を点検する。これ以降の、特に文学的な詩文に用例がなく、唐詩にも張籍以前に用例がない。

〔青塞〕本来は今の甘肃省東北の環県（慶陽市に属する）の青山一帯を指すが、ここでは広く辺境の城塞を言うのであろう。

この語の解釈は諸注によって異なる。徐注は辺境の地の地名であり、今の新疆ウイグル自治区青吉里河の右岸に「青塞特啓函」という地名があり、そこではないかと推測している。李樹政注は徐注をそのまま踏まえている。

李建崑注は、甘肃・青海両省の一帯の辺塞を指すとするが、根拠は示していない。

李冬生注は、甘肃省東北環県一帯を指し、青山が環県の西にあり、ここが長城（つまり城塞）に近いとする。その根拠として、後漢の建武六年（三〇）、馮異が軍を義渠（甘肃省寧県の西北）に進めたところ、青山（甘肃省環県の西）の胡一万余りが異に帰順したこと（『後漢書』馮異伝）、また建武二十一年（四五）夏四月には、安定属国の胡が反乱し青山に集結したが、將兵長史陳訢を派遣して平定したこと（『後漢書』光武本紀下）を挙げる。後者と同じ記事は『後漢書』盧芳伝にも見え、ここでは胡の駁馬少伯なる者が部隊を率いて反乱し、匈奴と結託して青山に集結したとある。徐余注も『後漢書』馮異伝の同じ箇所を引き、李冬生注と同様、「青塞」がこの青山を踏まえたものであり、後には「青塞」が一般的に辺塞を指すようになったと説明する。

『漢語大辞典』の「青塞」の解釈も李冬生注に基づいているようである。

今、李冬生注及びそれを継承した徐余注の解釈に従う。

唐以前の詩に用例がなく、唐詩にも用例がほとんどない。張籍以前では、王維「送嚴秀才還蜀」（趙注本卷八）に「山臨青塞斷、江向白雲平」（山は青塞に臨んで断え、江は白雲に向かいて平らかなり）とある。嚴某が故郷の蜀の地に帰るのを見送った詩であることから、蜀の西、吐蕃の侵入を防ぐ要塞を指して「青塞」と詠っているようだ。「青」とあるのは、蜀の自然が美しいためにこのように言っているのであろうか。陳注は晩唐の曹鄴「送友人入塞」（『全唐詩』卷五九三）に「乱蓬無根日、送子入青塞」（乱蓬 根を無くせし日、子を送りて青塞に入る）とあるのを引く。友人が辺塞の地に出征することを、辺境の風物詩である転蓬に見送られると表現する。曹鄴の用例は、張籍のこの詩と同じく広く辺塞の意味で解釈できそうだ。

〔鳴鼓〕太鼓を鳴らす。太鼓は戦鬪の開始や部隊の前進の際に鳴らす。ここでは兵卒の訓練として行う狩猟で鳴らす太鼓。

陳注は、この箇所が『論語』先進に基づいたものであることを指摘する。弟子の冉求が、税収により私腹を肥やす魯国の権力者・季氏に重臣として荷担していることに對し、「非吾徒也。小子鳴鼓而攻之、可也」(吾が徒に非ず。小子 鼓を鳴らして之を攻むるも、可なり)と述べたなかに見える。

唐以前の詩文のなかで、この詩と同じく狩猟の様子を描いたものとしては、曹植「七啓」(『文選』卷三四)に「於是賦鍾鳴鼓、收旌弛旆」(是に於いて鍾を賦らし鼓を鳴らし、旌を収め旆を弛む)とあるのは、狩猟を終えて部隊が引き上げる時の様子を記している。詩の用例は少なく、戦争や狩猟と関わる例としては、庾信「同盧記室從軍詩」(『集注』卷三)「從軍行」とするテキラスト有り)に「地中鳴鼓角、天上下將軍」(地中 鼓角を鳴らし、天上 將軍を下す)とあるのは、戦鬪の開始を表現する。

唐詩の用例も少なく、類似した例では、張籍以前は盛唐の王丘「奉和聖製送張尚書巡辺」(『全唐詩』卷一一)に「建牙之塞表、鳴鼓接雲中」(牙を建てて塞表に之き、鼓を鳴らして雲中に接す)とあるのを数えるだけである。張尚書が辺境の地に巡行するのを見送る詩に見える。

進軍に際して太鼓を鳴らすことについては、張籍69「征西將」(卷二)に「深山旗未展、陰磧鼓無声」(深山 旗 未だ展はず、陰磧 鼓 声無し)とある。この場合、斥候が敵情を探るために隠密行動をする様子を「鼓声無し」と表現している。

〔鑿鑿〕太鼓の音を表す擬声語。ドンドン。

唐以前の詩文に用例未見。唐詩では中唐前期から使われるようになる語である。

韋応物「曉坐西齋」(『校注』卷八)に「鑿鑿城鼓動、稍稍林鴉去」(鑿鑿として城鼓動き、稍稍として林鴉去く)とあるのは、夜明けを告げる太鼓の音を詠じている。唐詩の用例は、この韋応物の例と同じく夜明けや夜の到来といった時を告げる太鼓の音がほとんどである。

張籍にこの他もう一例、440「洛陽行」(卷七)に「六街朝暮鼓鑿鑿、禁兵持戟守空宮」(六街 朝暮 鼓鑿鑿とし、禁兵 戟を持して 空宮を守る)とあるのも、朝晩の時間を告げる太鼓の音の用例である。

なお、四庫全書・『全唐詩』卷三八二・『樂府詩集』卷九二は「逢逢」に作る。同じく太鼓の音を表す言葉として、古く『毛詩』大雅「靈臺」に「鼉鼓逢逢、矇矇奏公」(鼉鼓逢逢たり、矇矇 公を奏す)とある。太鼓が和らぎ

鳴るさまを言う。ただし、これ以降の用例はほとんど無く、唐詩も中唐以降にわずかに数例見えるのみである。一例として李賀「上之回」(『全唐詩』卷三九三)に「蚩尤死、鼓逢逢」(蚩尤死し、鼓逢逢たり)とあるのは、凱旋の時に鳴らす太鼓の音を詠う。

〔獵圍〕狩猟をするための囲い。狩猟は兵卒の訓練、すなわち戦争のための演習として行われる。

六朝詩に一例、庾信「和宇文内史春日遊山」(『集注』卷三)に「戍樓侵嶺路、山村落獵圍」(戍樓は 嶺の路を侵し、山村は 獵圍に落つ)とあり、獵場の囲いのなかに村がある様子を詠っている。

唐詩の用例も張籍のここ以外に一例、盧綸「臘日觀咸寧王部曲娑勒擒豹歌」(『全唐詩』卷二七七)に「山頭曠曠日將出、山下獵圍照初日」(山頭曠曠として 日將に出でんとし、山下の獵圍 初日照る)とある。臘日に行われる豹狩りの開始を詠っている。

戦争の訓練としての狩猟については、張籍より少し後の時代であるが、馬戴「塞下曲二首」其二(『樂府詩集』卷九二)に「燒山搜猛獸、伏道擊迴兵」(山を燒きて猛獸を搜し、道に伏して迴兵を撃つ)とある。

以上この二句は、国境防衛の守備兵たちが、来たるべき匈奴との戦鬪に備えて、將軍の指示に従って城塞近くで狩猟を行う様子を詠っている。「青塞」は、『語釈』に挙げた王維の詩の例のように、青々と美しい色ではなく、限りなく黒に使い、濃い青(群青色)であろう。というのも、この詩に詠われる景物は砂漠、枯れた草、風で枝が落ちた木々、寒風の吹きつける秋の空、裂けた岩、取り残されたテント、そこに積もる雪、「白日」の白、「烏孫」の黒のイメージのように、どこにも鮮やかな色彩が用いられていないからである。この詩の殺伐とした印象には、そうした無彩色の風景が大きく影響している。

#### 7・8 天寒山路石断裂、白日不銷帳上雪

〔天寒山路石断裂〕辺塞の地の厳しい自然環境を詠じている。

「天寒」は詩文に常見の語。古く『莊子』讓王に「天寒既至、霜雪既降。吾是以知松柏之茂也」(天寒既に至り、霜雪既に降る。吾 是を以て松柏の茂るを知るなり)とあるのは、有名な『論語』の章句を踏まえた表現である。

唐以前の詩の用例としては、樂府古辭「飲馬長城窟行」(『文選』卷二七)に「枯桑知天風、海水知天寒」(枯桑 天風を知り、海水 天寒を知る)とあ



る。この二句は様々な解釈があるが、李善注には「君子行役、豈不離風寒之患乎」（君子行役し、豈に風寒の患いを離れざらんや）と言ひ、遠征する夫の過酷な旅を詠ったものとする。唐詩でも初唐から用例が見えるが、辺塞の地、あるいは戦地の天候を詠じたものとしては、杜甫「悲青阪」（『詳注』卷四）に「我軍青阪在東門、天寒飲馬太白窟」（我 青阪に軍して東門に在り、天寒く馬に飲う 太白の窟）とあり、賊軍鎮圧のために、官軍が冬に寒空のもとで馬に水を飲ませていた様子を詠う。一見して明らかのように、「飲馬長城窟行」を踏まえた表現である。この詩も含めて杜甫には二十七例見え、杜甫が好んで用いた言葉であると言える。

張籍にはこの他二例、うち<sup>454</sup>「南婦」（卷七）に「天寒苦夜長、窮者不念明」（天寒くして 夜の長きに苦しみ、窮する者 明かなるを念わず）とある。故郷を離れた旅人（張籍自身）が、志を遂げられぬことに苦しむ様子を詠うなかに見える。

「山路」は山道。古い用例は見当たらず、六朝詩では、陸機「招隱詩」（『類聚』卷三六）に「駕言尋飛遁、山路鬱盤桓」（駕して言に飛遁を尋ね、山路鬱として盤桓たり）とあり、隠者のいる鬱蒼とした山道が詠われている。唐詩では初唐から多くの用例がある。一例として、張九齡「答陸澧」（『全唐詩』卷四九）に「不辭山路遠、踏雪也相過」（山路の遠きを辞せず、雪を踏みて也相過ぐ）とあるのは、旅路の困難を雪と一緒に用いた例である。また、岑参「白雪歌送武判官歸京」（『校注』卷二）に「輪臺東門送君去、去時雪滿天山路」（輪臺の東門に 君が去るを送る、去る時 雪は満つ 天山の路）とある。西域の地から帰京する同僚を送る詩であり、辺境の風景が詠われている。陳注は駱賓王「夕次蒲類津」（『全唐詩』卷七九）に「山路猶南屬、河源自北流」（山路 猶お南に属し、河源 北より流る）とあるのを用例として挙げる。旅の途中の山川の風景を詠じている。

杜甫には「○山の路」の用例も含めて六例ある。一例として、「送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記」（『詳注』卷三）に「咫尺雪山路、帰飛青海隅」（咫尺 雪山の路、帰り飛ぶ 青海の隅に）とあるのは、隴右節度使の部下蔡希魯が任地に帰るのを見送る詩であり、任地の自然として「雪山の路」が詠われている。

張籍にはこの詩以外に熟語としての用例はない。

「石断裂」は、寒さと乾燥のために山道の側にある岩が裂けている状態を言う。「断裂」は、詩文に用例が見当たらない言葉で、古小説の『捜神記』（卷二〇）に、断腸の故事に類似した話が掲載されており、子猿を追ってきて死んだ母猿の腸を裂いたところ、ちりぢりに切れていたことを「寸寸断裂」（寸寸に断裂す）と表現する例を見るのみである。六朝詩・唐詩にも他に用例が

ない。唐代の散文にも用例は少なく、同時代の韓愈「黃陵廟碑」（『全集校注』文・長慶元年）に「庭有石碑。断裂分散在地。其文剥缺」（庭に石碑有り。断裂分散して地に在り。其の文は剥缺す）とあるのが、この詩と同じく石（岩）が割れている状態を言う。

「白日不銷帳上雪」寒さのために、日が出ていてもテントの上に積もる雪は溶けることはない。

「白日」は詩文に常見の語。これまでも1「野居」・17「求仙行」・25「吳宮怨」・32「羈旅行」（いずれも卷一）に見えた。それらの【語釈】を参照。なかでも1「野居」に「寒天白日短、簷下煖我軀」（寒天 白日短く、簷下に我が軀を煖む）とあるのは、異郷での貧困・多病の生活を詠じたなかに見え、この詩と類似する。「寒天」も7句「天寒」と類似する。

「帳上雪」は、テントの上に積もった雪。「帳」は戦地に残された漢軍のテントを言うのであろう。同時代の白居易「夜招晦叔」2708に、「碧氈帳上正飄雪、紅火爐前初炷灯」（碧氈の帳上 正に雪を飄し、紅火の爐前 初めて灯を炷す）とあるのは、友人を招くために準備した、防寒用の毛氈の帳の上に雪が舞う様子を詠じている。張籍77「出塞」（卷二）『文苑英華』卷一九七は「塞下曲」に作る）に「月冷辺帷湿、沙昏夜探遲」（月冷くして 辺帷湿り、沙昏くして 夜探遅し）とあるのは、この詩と同じく辺境防衛兵の過酷な環境を詠じたなかに、冷たい湿気を含んだ宿営のテントが詠われている。また、戦場に残された宿営のためのテントについては、張籍161「没蕃故人」（卷二）に「無人收廢帳、帰馬識殘旗」（人の廢帳を収むる無く、帰馬 殘旗を識る）とあり、吐蕃との戦闘で全軍が敗れた後、テントだけが取り残されている状態を言い、この詩と類似する。

以上この二句は、胡軍（吐蕃）との激しい戦闘が行われた隴山の荒涼とした様子について、山道に散在する割れた岩石や、取り残されたままになっている兵士が寝泊まりしていたテントを詠ずることで表現している。

9・10 烏孫国乱多降胡、詔使名王持漢節

（烏孫）紀元前二世紀から五世紀にかけて西域に存在した遊牧国家。今の新疆ウイグル自治区イリ河流域にあつたとされる。

『漢書』西域伝下に「烏孫国、大昆弥治赤谷城。去長安八千九百里」（烏孫国は、大昆弥 赤谷城を治む。長安を去ること八千九百里）とある。顔師古の注に「烏孫於西域諸戎其形最異。今之胡人青眼、赤須、状類弥猴者、其



種也」(烏孫 西域の諸戎に於いて其の形最も異なれり。今の胡人の青眼、赤須にして、状は弥猴びこうに類する者、其の種なり)と云う。  
 烏孫国は匈奴に征服されていたが、紀元前二世紀、昆莫こんび(獵驕靡りょうきょうひ)の時に再度烏孫国を建国した。漢の武帝は西域を視察した張騫の上奏を受け、烏孫との関係強化こそが匈奴対策の要と判断し、烏孫と匈奴の切り離しのため使者を烏孫国に派遣した。漢はその後皇族の娘を烏孫公主として昆莫に嫁がせ、友好関係をさらに強固にしようとした。匈奴もそのことを把握し、幾度となく烏孫を襲撃している。烏孫との関係強化が匈奴対策に極めて重要であったことは、『漢書』息夫躬伝に「烏孫并、則匈奴盛、而西域危矣」(烏孫并さるれば、則ち匈奴盛んにして、西域危うし)という息夫躬の上奏文にも表れている。

「烏孫」が詩で用いられた例としては、唐以前では、烏孫との関係強化のために烏孫王に降嫁した江都王建の娘の細君、すなわち烏孫後主の歌(『漢書』西域伝下)に「吾家嫁我兮天一方、遠託異国兮烏孫王」(吾が家 我を天の一方に嫁せしむ、遠く託す 異国の烏孫王に)とある。六朝唐代の詩文で「烏孫」と出てくる場合、その多くは、言葉も文化も違う胡地に嫁がされた烏孫公主の悲劇やそれに関連した内容を詠うものである。それとは異なり、敵対する胡人の国として烏孫国を詠じた例としては、劉宋の劉義恭「擬古詩」(『御覽』卷三二八)に「束甲辞京洛、負戈事烏孫」(甲を束ねて 京洛を辞し、戈を負いて 烏孫を事とす)とあり、梁簡文帝「隴西行三首」其一(『類聚』卷四一)に「烏孫塗更阻、康居路猶涉」(烏孫 塗更に阻まれ、康居路猶お渋る)とある。前者は烏孫征伐に出掛ける前の様子を詠っており、後者は烏孫国や康居国までの旅程の厳しさを詠う。康居国も西域(中央アジア)にあった遊牧国家。

唐詩では初唐から用例が見える。常建「塞下曲四首」其一(『全唐詩』卷一四四)に「玉帛朝回望帝郷、烏孫帰不称王」(玉帛 朝に回りにて帝郷を望み、烏孫 帰りにて王を称さず)とあるのは、烏孫国との友好の盟約が結ばれ、烏孫王が漢に帰順したことを詠い、沈佺期「送金城公主適西蕃应制」(『全唐詩』卷九六)に「那堪将鳳女、還以嫁烏孫」(那ぞ堪えん 鳳女を將て、還つて以て烏孫に嫁せんことを)とあるのは、金城公主が和平戦略のために吐蕃(チベット)に降嫁させられたことを詠じ、詩中の烏孫は吐蕃の喩えとして用いられている。また耿漳「送楊將軍」(『全唐詩』卷二六八)に「一身良將後、万里討烏孫」(一身 良將の後、万里 烏孫を討たん)とあるのは、名将に従って烏孫を征伐しようという意気込みを詠う。同時代の白居易「河陽石尚書、破迴鶻迎貴主、過上党射鷲鷲。絵画為図、猥蒙見示。称嘆不足、以詩美之」(河陽の石尚書、迴鶻を破り貴主を迎え、上党を過ぐるとき鷲鷲

を射る。絵画して図を為り、猥りに示さるるを蒙る。称嘆して足らず、詩を以て之を美す) 3653に「烏孫公主帰秦地、白馬將軍入潞州」(烏孫公主 秦地に帰り、白馬將軍 潞州に入る)とあるのは、会昌三年(八四三)、石尚書雄が迴紇(迴鶻)の賊軍を破ったことで、迴紇に降嫁していた太和公主(憲宗の娘)が長安に連れ戻されたことを詠う。ここでは「烏孫」は迴紇(ウイグル)の喩えとして用いられている。  
 杜甫には用例がない。張籍にもこの一例のみ。

「降胡」投降した胡。または、胡(匈奴)に降った人々。ここでは後者の意味で解釈した。国内の混乱により匈奴に帰順した烏孫の人々を指す。李樹政注は、漢朝に投降してきた烏孫国の人々と解釈(「指投降過來的人」)しているのに対し、徐注は「胡」は匈奴を指し、烏孫国の大臣が匈奴に投降すると言う。徐余注は徐注を踏まえた上で、烏孫国に迴紇が、匈奴に吐蕃が重ねられていると解釈している。詳しくは後述。

「胡に降る」の意味では、『漢書』元帝紀初元元年の記事に「秋八月、上郡属国降胡万余人、亡入匈奴」(秋八月、上郡の属国 胡に降るもの万余人、亡げて匈奴に入る)とある。熟語としては、『漢書』鼂錯伝に「今降胡・義渠蛮夷之属来帰誼者、其衆数千」(今 降胡・義渠の蛮夷の属の来たりて誼に帰する者、其の衆きこと数千)とある。投降した胡や義渠(西戎の一種)で義(誼)に帰順した者が数千にも及ぶと言う。唐以前の詩に用例はない。唐詩の用例もわずかであり、張籍以前では高適に二例を数えるのみである。「薊門行五首」其二(『全唐詩』卷二二一)に「戍卒厭糠覈、降胡飽衣食」(戍卒 糠覈に厭き、降胡 衣食に飽く)とあるのは、唐朝の兵士が冷遇され、胡の投降兵が優遇される政策を批判的に詠っている。

「降胡」ではないが、投降した異民族の兵士を詠じた例として、類似した詩題の王建「塞上二首」其二(『王建詩集』卷五)に「一夜山下哭、応是送降奚」(一夜 山下に哭く、応に是れ降奚を送るべし)とある。「奚」は北方の少数民族の名であり、投降した異民族を連行する様子が詠われている。

「名王」も匈奴の諸王のなかで名声の高い王を指す。ここでは烏孫国の王を指している。張籍28「少年行」(卷一)に「斬得名王獻桂宮、封侯起第一日中」(名王を斬り得て 桂宮に献じ、侯に封ぜられ 第を起こす 一日の中)とあった。その【語釈】を参照。

「漢節」漢の天子が授けた、漢の使臣であることを証明するもの。旗指物や割り符が用いられた。

『史記』大宛伝に「留（張）騫十餘歳、与妻、有子。然騫持漢節不失」（張）騫を留むること十餘歳、妻を与え、子有り。然れども騫 漢節を持して失わず）とある。匈奴に捕らえられた張騫が、十年もの間漢の使臣としての割り符を失わなかった、匈奴に帰順しなかったことを言う。陳注は同じ文章を『漢書』張騫伝から引用する。

六朝詩の用例は少なく、しかも梁代以降になって初めて見られるようになる。一例として、梁簡文帝「隴西行三首」（『文苑英華』卷一九八）に「護羌擁漢節、校尉立功勳」（護羌 漢節を擁し、校尉 功勳を立つ）とあるのは、護羌校尉が漢の割り符を持って隴西の地に出掛けていくことを言う。

唐詩では、盛唐から用例が見える。李白「蘇武」（王琦注本卷二二）に「蘇武在匈奴、十年持漢節」（蘇武 匈奴に在りて、十年 漢節を持す）とあるのは、「持漢節」の三字の並びが同じであり、匈奴に捕らえられた蘇武が、その間匈奴に帰順せずに漢の使臣を貫いたことを詠う。杜甫にも五例あり、うち「九日奉寄嚴大夫」（『詳注』卷一一）に「不眠持漢節、何路出巴山」（眠らずして漢節を持す、何れの路か 巴山を出づ）とあるのも三字の並びが同じであり、詩を寄せる嚴武が朝廷より軍事に関する権限を委任されていることを詠う。樂府では、李益「塞下曲二首」其一（『樂府詩集』卷九二）に「蔡琰没去造胡笳、蘇武归来持漢節」（蔡琰没し去りて胡笳を造り、蘇武帰り来たりて漢節を持す）とあり、これは前述の蘇武の故事を踏まえたもの。張籍にはこの一例のみ。

この二句について、徐余注は、『漢書』西域伝下の烏孫国の王位継承争いに関する記事を引く。

概要を説明すれば、烏孫昆弥（烏孫国の王）である岑陬は漢と友好関係を結んでおり、漢は解憂公主を岑陬に降嫁した。岑陬は死ぬ前の遺言で、胡婦（匈奴の妻）との間に生まれた泥靡がまだ幼いので、王位を伯父の大祿の子・翁歸靡にいったん与え、泥靡の成長後に王位を譲るよう言った。岑陬の死後、翁歸靡が即位して肥王と号し、烏孫国の慣習に従って岑陬の妻・解憂公主を娶り、三男二女を生んだ。その長男が元貴靡である。肥王は岑陬の遺言に逆らい、漢に上書して漢の外孫となる元貴靡を王位の後継者とし、再度漢の公主の降嫁を要請した。しかし、肥王の死去後、烏孫国の貴人は先王である岑陬の遺言に従い、岑陬の子・泥靡を立てて昆弥に即位させた。それが狂王である。狂王は楚主解憂（解憂公主）を娶ったが、二人は仲が悪く、また暴悪な狂王は衆心を失った。そこで公主は漢の使者と狂王の暗殺を謀るが狂王は負傷しただけで逃亡。その時、肥王（翁歸靡）と胡婦（匈奴の妻）との間に生まれた烏就屠は、翁侯（大臣）たちと難を逃れて烏孫国の北の山中

に逃げており、その際母家である匈奴の兵が来ると声を大にして言いふらしたので、烏孫国の大衆は彼に従った。後、烏就屠は狂王を襲撃して殺し、自ら立って昆弥（烏孫国王）となったため、烏孫国は混乱することとなった。事態收拾のため漢は烏就屠に詔して赤谷城に呼び、元貴靡を大昆弥、烏就屠を小昆弥とし、それぞれに印綬を与えた。以降、烏孫国は二人の君主が並び立つこととなったのである。

以上の史実をこの二句が詠じているとすれば、9句の烏孫国の混乱とは、王位継承問題を発端とする烏孫国内の混乱であり、10句は二つに分裂した烏孫国の混乱收拾のために、漢が苦肉の策として大小二つの王（昆弥）を立て、それぞれを王として承認し、漢帝と君臣関係を結んだことを指す。

徐余注はこうした漢代における烏孫国の事件を引いた後、これが徳宗の貞元年間における迴紇（ウイグル）に関する事件と類似することを指摘する。

迴紇が安史の乱の收拾に際し、肅宗から援軍を要請され、唐軍と連合して長安を奪還したことはよく知られている。その後も乱の殘党討伐に貢献し、迴紇の第三代の牟羽可汗（可汗は王を指す）は唐より英義建功毘伽可汗の称号を授かっている。その後の迴紇の混乱や吐蕃の北庭侵攻等について、徐余注は『旧唐書』迴紇伝の記事を引いて説明する。すなわち、貞元六年（七九〇）四月、第五代忠貞可汗をその弟が殺し王に立ったが、その弟も国人によって殺され、忠貞の子が可汗となった。忠貞可汗の喪を告げ、新しい王の冊立を唐朝に要請したところ、翌年正式に冊立された。これが奉誠可汗である。

これより前、北庭・安西都護府が統治する諸部族は迴紇を経由して唐に朝参するため、迴紇とは従属関係にあった。こうした弱小の他民族に対する迴紇の収奪は厳しく、北庭都護府は迴紇から比較的近かったことで、特にそこで暮らす沙陀部落の人々は苦しめられていた。もともと迴紇と平和的な関係であった葛禄や白服突厥などの部族も、沙陀部落と同様に迴紇の略奪を不満に思っており、吐蕃に賄賂を贈られ誘われたことで、吐蕃に従うことになったのである。吐蕃はこうした諸部族の大衆を率い、貞元六年冬に北庭都護府を攻撃。迴紇は大相頡干迦斯を救援に向かわせるものの連敗する。迴紇に苦しめられていた北庭の部族は街ごと吐蕃に降服、沙陀部落も吐蕃に投降した。翌貞元七年（七九一）五月、鴻臚少卿兼史大夫庾鋌が派遣され、迴紇の人々が独自に立てていた忠貞可汗の子が、正式に奉誠可汗として唐朝によって冊立されたのである。

以上述べてきた烏孫と迴紇の共通点を整理すると、①漢・唐朝と（他の民族と比べ相対的に）友好的関係にあった、②王位継承の問題で国内が混乱した、③その混乱を防ぐために漢・唐朝が王号を与えて部族や領土の支配を公認する一方で、皇帝との君臣関係を結んだという点にまとめられる。

張籍のこの二句に詠われる烏孫国の混乱と漢朝によるその收拾は、徐余注の指摘する事件と重なる点が多い。ただ、「降胡」について、烏孫国の先の事件に際して烏孫の人々が匈奴に降順したとする直接的な記事は見当たらない(唐代の迴紇に関しては、服従していた諸部族が吐蕃に降つたことが明記)。しかし、少し後のことではあるが、『漢書』匈奴伝下には、小昆弥末振将の弟・卑援(ひえん)が十万の衆人とともに匈奴の単于と結託し、またその子供を単于に仕えさせるといふ事件が発生していることや、匈奴への異民族の投降を阻止するために漢側が匈奴に示した四箇条に「中国人亡入匈奴者、烏孫亡降匈奴者、西域諸国佩中国印綬降匈奴者、烏桓降匈奴者、皆不得受」(中国人の亡びて匈奴に入る者、烏孫の亡びて匈奴に降る者、西域諸国の中国の印綬を佩びて匈奴に降る者、烏桓の匈奴に降る者、皆、受くるを得ず)とあり、異民族では烏孫が第一に挙げられていることから、烏孫国の人々の匈奴への投降や結託は実際にあり、そのことを漢朝が危惧していたのは確かである。

張籍が烏孫国で発生したどのような具体的事件を念頭にこの二句を詠じたかは明確にはしがないが、漢朝にとって非常に困つた事態を詠じているのは間違いないであろう。先述の通り、烏孫との関係強化が漢朝にとって匈奴対策の要とされていたことから、ここでは「降胡」を烏孫国内の混乱による匈奴への帰順の意味で解釈することにした。

この二句に唐代の異民族政策に関わるどのような事件が重ねられているかは容易には判断しがたいが、張籍のこの詩に詠われる隴山及びその以西の地は、この詩が書かれた貞元・元和の頃はすでに吐蕃に占領されていること、また、【補】で後述するように、そのことを張籍が他の辺塞詩でも話題にしていることを考えれば、漢朝最大の敵であった匈奴に吐蕃(チベット)が重ねられていると考えるのは妥当な判断と思われる。よって、ここでは徐余注に従って解釈しておくことにしたい。

これまでの詩の内容から一変し、漢朝と友好関係を結ぶ烏孫国の混乱と漢朝によるその混乱收拾のための王号を与えたことを詠っている。烏孫国内の混乱により、漢と敵対する匈奴がさらに強大となつてしまう可能性があり、それを防ぐために漢朝は烏孫国の王と君臣関係を結び、その混乱を抑えて烏孫国の人々が匈奴へ投降するのを防ぐことを詠っている。

11・12 年年征戰不得閑、辺人殺尽唯空山  
 【年年】毎年。

これまでも張籍3「雜怨」・13「猛虎行」・17「求仙行」・27「関山月」・31「賈客樂」・33「車遥遥」・39「烏啼引」(いずれも巻一)に見えた。その【語

積】を参照。

なかでも27「関山月」には、「可憐万里関山道、年年戰骨多秋草」(憐むべし 万里 関山の道、年年の戦骨 秋草よりも多きを)とあり、辺境で続く戦争の悲劇を詠じており、この詩と共通する。「関山」は、引用した箇所の前二句が「隴頭風急雁不下、沙場苦戰多流星」(隴頭 風急にして 雁下らず、沙場の苦戦 流星多し)となつていことから、この詩と同じく隴山のことであると考えられる。付言すれば、「塞上曲」が戦いに備える部隊の日中の様子を詠じているのに対し、「関山月」では秋の雪夜、月明かりのもとで敵兵の様子を窺う兵士たちの姿を詠じている点で対照的である。

陳注は李頎「古從軍行」(『全唐詩』卷一三三)に「年年戰骨埋荒外、空見蒲桃入漢家」(年年戦骨 荒外に埋もれ、空しく蒲桃の漢家に入るを見る)とあるのを引く。李頎の詩については、27「関山月」で共通性を指摘した。

〔征戰〕出征すること。張籍の14「別離曲」・34「妾薄命」(ともに巻一)に見えた。その【語積】も参照。

古くは『管子』小匡に「君有征戰之事、則小国諸侯之臣有守圍之備矣」(君征戰の事有れば、則ち小国の諸侯の臣は守圍の備え有り)とある。君主が戦争することになれば、小国の諸侯の臣下は防衛の備えをすると記される。唐詩の用例は初唐から戦争を主題にした楽府詩を中心とする多くの用例が見える。例えば、類題楽府である常建「塞下曲四首」其一(『全唐詩』卷一四四)に「天涯静处無征戰、兵氣銷为日月光」(天涯の静処 征戰無く、兵氣銷えて日月の光と為る)とあるのは、辺塞の地での戦争の終結を詠じている。常建の詩とは対照的に、辺塞詩や戦争を詠じた類題楽府の多くでは、長引く戦争と結びつく。王翰「涼州詞二首」其一(『全唐詩』卷一五六)にある「醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回」(酔いて沙場に臥す 君 笑うこと莫かれ、古來征戰 幾人か回らん)は、辺塞に出征した兵士のやるせなさを詠じた名句であり、『唐詩選』にも採録される。また、李白「戰城南」(王琦注本卷三)に「烽火燃不息、征戰無已時」(烽火 燃えて息まず、征戰 已む時無し)とあり、終わりのない征戰を批判して詠っている。杜甫には用例がない。

〔不得閑〕毎年絶え間なく続く長征をこのように表現する。

『史記』呂后本紀に「太后欲殺之、不得閑」(太后 之を殺さんと欲するも、閑を得ず)とあるのは、趙王を殺すことが無いことを言う。屈原「九歌二首」山鬼に「怨公子兮恨忘帰、君思我兮不得閑」(公子を怨みて恨として帰るを忘る、君は我を思ふも閑を得ざらん)とあるのは、暇を見つけて自分に会ってくれないことを言う。



唐以前の詩に用例はない。唐詩の用例も中唐までない。同時代の白居易「病  
仮中南亭閑望」084に「始知吏役身、不病不得閑」（始めて知る 吏役の身  
の、病まざれば 閑なるを得ざることを）とあり、役人である限り病気でも  
なければ閑な時間はないと詠う。

〔辺人〕辺境に住む人々。張籍30「將軍行」（巻一）・414「隴頭行」（巻七）  
に見えた。それらの【語釈】を参照。三首ともに、隴山（隴頭山）付近での  
胡との戦争を詠じたもの。

〔殺尽〕皆殺しにされる。同じく張籍30「將軍行」（同上）に「胡兒殺尽陰  
磧暮、擾擾唯有牛羊声」（胡兒 殺され尽くして 陰磧暮れ、擾擾として  
唯だ牛羊の声有るのみ）とあった。用例はその【語釈】を参照。「將軍行」  
の場合、胡を皆殺しにすることであり、その凄惨な事件の後には、ただ牛や  
羊の声だけが聞こえるだけだと詠う。この詩の場合は、ただ人氣の無い山（4  
句の「隴頭山」）があるだけであると詠う。

後の【補】でも触れるように、この詩と関係の深い張籍414「隴頭行」（巻  
七）に「漢兵処処格闘死、一朝尽没隴西地」（漢兵 処処 格闘して死し、  
一朝尽く没す 隴西の地）とあり、胡軍（吐蕃）との戦闘で漢軍の兵士が隴  
山の西側で全滅したと詠われている。また、同じく張籍161「没蕃故人」（巻  
二）に「前年伐月支、城上没全師」（前年 月支を伐ち、城上 全師没す）  
とあるのは、月支族（古代の部族名）討伐に向かった部隊が、城塞付近で行  
われた戦いで全滅したことを言う。詩題から明らかのように、月支には吐蕃  
が重ねられている。これらの詩と同じように、「塞上曲」でも吐蕃との戦い  
によって殺された隴山やその周辺に住んでいた人々を詠っているであろう。

〔空山〕人氣の無い山。先に述べたように、辺境の住人が皆殺しにされ、ひ  
っそりと人氣の無い山だけがそこに存在しているのである。

唐以前の詩の用例は多くなく、作者が明らかかなものとしては、劉宋の呉邁  
遠「飛來双白鶴」（『玉臺新詠』巻四）に「譬如空山草、零落心自知」（譬え  
ば空山の草の如し、零落すること 心 自ら知る）とあり、愛する男性と離  
れ離れにある自分の未来を、枯れ落ちる人氣の無い山の草に喩えた例である。

唐詩では、初唐から多くの用例が見える。有名な魏徵「述懷」（『全唐詩』  
卷三一）に「古木鳴寒鳥、空山啼夜猿」（古木 寒鳥鳴き、空山 夜猿啼く）  
とあり、旅の途中の寂しい風景を詠うなかに見える。この詩と同じく異民族  
との戦争と関わる例を挙げれば、岑參「送狄員外巡按西山軍」（『校注』巻四）  
に「胡兵猶不歸、空山積年歲」（胡兵 猶お帰らず、空山 年歳を積む）と

あり、劍南（四川省劍閣の南部）の地に侵入した吐蕃の兵のために、山に人  
がいない状態が続いていることを詠う。

杜甫には十二例（異同のあるものを除く）あるが、張籍のような戦場の山  
を詠じたものはない。例えば「武侯廟」（『詳注』巻一五）に「遺廟丹青落、  
空山草木長」（遺廟 丹青落ち、空山 草木長し）とあるのは、諸葛亮の廟  
が経年のために寂れ、草や木の茂る人氣の無い山にあることを詠っている。  
張籍にこの他三例あり、うち143「莊陵挽歌詞三首」其三（巻二）に「空山  
煙雨夕、新柏遶陵臺」（空山 煙雨の夕べ、新柏 陵臺を遶る）とあるのは、  
敬宗の陵墓のひっそりとした様子を詠っている。

以上この二句は、長引く戦争により辺境の住人がみな殺され、隴山だけが  
ひっそりとそこにあるという印象的な場面で結ばれる。

#### 【補足】

##### 一 詩の構成

この詩は換韻の箇所が四つに分かれるが、内容としては最後の二句を除き、  
人事に関する内容と辺塞の風景の描写とが二句ずつ、交互に詠われる形式に  
なっている。

- 1・2 人事…辺塞での防秋作業
- 3・4 風景…隴山の様子（天候および外観）
- 5・6 人事…戦争の準備としての狩獵
- 7・8 風景…隴山の様子（天候および山中）
- 9・10 人事…烏孫国の混乱とその收拾
- 11・12 人事と風景…終わりなき戦争に対する批判

##### 二 張籍「塞上曲」の特徴

樂府「塞上曲」は、【題解】で指摘したように、郭茂倩『樂府詩集』では  
類似した樂府題である「塞下曲」とともに、「新樂府辭・樂府雜題」に分類  
されている（『樂府詩集』や『全唐詩』では、張籍のこの詩は「塞下曲」に  
作る）。また、郭茂倩が「樂府解題」で、「塞上曲」「塞下曲」が横吹曲辞で  
ある「塞上」「塞下」から派生したものであることを指摘していることも【題  
解】で指摘した通りである。横吹曲辞には、この他にも「前出塞」「後出塞」

「出塞」「入塞」「入塞曲」などの類似した楽府題の楽府詩が作られており、張籍自身、77「出塞」(巻二)がある。なお、張籍「出塞」は、『全唐詩』巻三八四題下注に「塞上曲」に作るテキストがあることが指摘されている。

これら、同題または類似した楽府題の楽府詩は、『樂府詩集』に採録されているものだけでもかなりの数に上るが、いずれも兵士の従軍の苦しみや悲しみ、或いはそれとは反対の兵士の功名心などが詠じられた辺塞詩のジャンルに入る作品がほとんどであり、なかには遠征している夫を待つ思婦を詠じたものが含まれている。張籍「塞上曲」も、それら辺塞樂府詩に数えられるであろう。そうした諸作品すべてと比較して、張籍「塞上曲」の特質を明らかにすることは難しいが、ここでは張籍の構成上の工夫に絞って、この詩の特徴を見ていくことにしたい。

この詩は、【補】の「詩の構成」でも触れたように、二句がひとまとまりとなり、辺境防衛のための様々な対策を詠じた箇所と、辺塞の風景(隴山の様子)を描写した箇所とが交互に詠われるという特殊な構成になっている。末二句だけはやや異なっているが、11句が毎年続けられる遠征を詠じ、12句が辺境の人々が全員殺された後に残った人気のない山、すなわち隴山を詠じていることから、この句だけは人事と情景とが二句ではなく一句ずつ詠われており、異なる二つの内容が交互に詠われている点では共通している。

今、人事に関して詠じた箇所を(A)、辺塞の風景を詠じた箇所を(B)とすると、この詩は、(A) 1・2句 ↓(B) 3・4句 ↓(A) 5・6句 ↓(B) 7・8句 ↓(A) 9・10句 ↓(A) 11句 ↓(B) 12句と

いう非常に珍しい構成になっているのである。この詩の構成については、実は李樹政注が以下のように指摘している。此篇写景叙事与末二句的議論感慨渾然一体。如写景・風沙・林枝・山石・帳雪。如叙事・閱兵・獵困・国乱・名王。相互參差漸進、繪声繪形。因此、篇末二句的感慨也就不是空發議論了。

李樹政注では、「写景」と「叙事」が交互に混じり合って詩が展開し、そうした内容が末二句の「議論感慨」と渾然一体となっていると指摘する。

以下、李樹政注を踏まえ、張籍の他の辺塞樂府との関連を考えつつ、張籍「塞上曲」の構成上の工夫とその効果について詳しく見ていくことにしたい。

まず(A) 辺境防衛のための様々な対策を詠じた箇所について見てみる。それぞれの箇所に出てくるのは、2句「候騎」(斥候の騎兵)、5句「將軍」と「兵」、9句「烏孫国」の胡人・10句「名王」(烏孫国王)である。1・2句の城塞の修繕と砂漠に生える草の焼却、及び5・6句で詠われる戦闘の訓練としての狩獵は、いずれも匈奴侵入に対する準備、いわゆる防秋について詠われている。

1句「城堡」と5句「青塞」は同じ城塞(の建造物)を指しているかどうかは不明であり、そのため1・2句、城塞の修繕と草の焼却作業は、5・6句、戦闘の訓練として行われる狩獵と同じ部隊によるものかそうでないかはわからない。ただ、いずれも部隊による防秋作業の一環として行われているには違いない。それに対し、9・10句は烏孫国——徐余注によれば迴紇(ウイグル)の比喻——の王に漢臣(唐臣)としての印を与えるという国家間の盟約を詠じており、1・2句、5・6句が、部隊による防秋の作業を詠じているのとは内容的に異なっている。ただし、烏孫の胡人が漢の敵である匈奴に投降するという漢朝にとって不利な状況を防止するための対策を詠じているという点ではそれまでの(A)の箇所と共通しており、やはり辺境防衛の対策の一つとして数えることができよう。

それに対して(B)の箇所は、(A)とは異なり、人間は漢人・異民族いずれも登場しない。しかも、(A)の箇所とは場面や時間的なつながりが明確でない、人気の無い殺伐とした辺塞の山の風景が詠われている。その場所は3・4句に「隴」「隴頭」とあるように、隴山であることがわかる。

隴山は陝西省と甘肅省の境界をなす山であり、古来漢民族と西北の異民族とを隔てる国境であった。張籍<sup>414</sup>「隴頭行」(巻七)に「隴頭路断人行、胡騎已入涼州城」(隴頭 路断えて 人行かず、胡騎 已に涼州城に入る)と詠われていたように、唐代、隴山以西の隴右の地が吐蕃に占領されて以降、国境防衛の最前線は隴山以東に置かれた。その後、隴山を越えて失地回復のための進軍が行われることは無く、隴西は完全に吐蕃に占領されたままとなる。この詩に詠われる隴山も、すでに吐蕃に隴西の地が陥落した後のものである。(B) 7・8句は「山路」とあることから、3・4句と同じく隴山の様子を詠じていると考えられ、割れた岩が散在する荒涼とした隴山の山道が詠われる。8句、隴山の山中にあるテント(帳)は、かつてここが漢軍(唐軍)の統治下にあった時に兵士等が使用していたものである。【語釈】に示したように、張籍の161「没蕃故人」(前出)に「無人收廢帳、歸馬識殘旗」(人の廢帳を収むる無く、歸馬 殘旗を識る)と、吐蕃との戦闘で全軍が敗れた後、テントだけが取り残されている状態を詠じた句があり、この詩と類似する。雪が積もったままのテントを詠うのは、兵士等が隴山から撤退し、今や無人となった隴山の殺伐とした様子を張籍が表現しようとしたものと考えられる。無人の隴山は、最終的には12句で「空山」とわずか二字で端的に表現されている。

(A)の1・2句、5・6句で詠われる城塞(「城堡」「青塞」)は、先述のように城塞の同じ建造物を指しているかどうかは明らかではないが、匈奴(吐蕃)侵略後、隴山以東に新たに設置された国境防衛のための城塞を詠つ

ている点では共通しているであろう。だとすれば、烏孫国内のことを詠じた9・10句を除く(A)で詠われている城塞付近の様子と、(B)で詠われている隴山の様子は、国境防衛のために新たに設けられた城塞を挟んだ東側(城塞の漢軍側)と西側(胡軍により陥落した隴山)とを交互に詠じた辺塞の風景ということになる。

では張籍は、なぜこの詩をこうした特殊な構成にしたのであろうか。結論を言えば、張籍の意図は、(A)(B)を交互に対比して描くことで、その違いを鮮明に打ち出すことであつたと考えられる。

(A)1・2句、5・6句に詠われる匈奴の侵入に備える漢軍の行動は、いかにも慌ただしい様子である。城塞の修繕、斥候兵による砂漠地帯の草焼き、將軍による部隊の点検と訓練としての狩猟、城塞一帯に響き渡る太鼓の音は、いずれもそうした慌ただしさを印象づけるものばかりである。また、9・10句、漢帝の命令で烏孫国の王に王位を授け、漢との君臣関係を結ぶのも、それが最善策ではないことを承知しながらも、匈奴の勢力拡大を防ぐために急を要して行われた対策であろう。このように、(A)城塞の東側や友好国について詠われた箇所は、敵の攻撃に備えて非常に慌ただしい様子である。

それに対し、(B)城塞の西側、隴山の風景を詠じた箇所では、殺伐とした辺塞の風景が終始描かれている。胡地から吹く冷たい北風と、それによって巻き上げられた砂漠の砂によって隴山山頂の木々は北向きの枝が枯れ落ち、山道には裂けた岩石、雪の積もるうち捨てられたテントがある。なんとも荒涼とした風景である。

こうした(A)慌ただしい漢軍や漢朝の動きと、(B)殺伐とした隴山の風景は、最終的には11・12句の最後の二句に集約されており、(A)の慌ただしさは、まさしく11句の「閑なるを得ず」であり、(B)殺伐とした隴山は、12句で「空山」と端的に表現されている。

このように、城塞を挟んだ異なる二つの場面を交互に、かつ繰り返して詠ずることで、その違いが鮮明となると同時に、(A)で詠われる漢軍(漢朝)の対策が、いかに空しいものであるかが浮かび上がり、読む者に何とも言いぬやり切れないさを抱かせる効果をあげている。

張籍が、特に楽府詩において構成に工夫して詩を書いていることについては、本訳注でこれまでも何度か指摘した。しかし、この詩のように異なる情景を交互に詠ずることで、それぞれの違いを鮮明に描き出している詩は、他には見られないものである。この詩は張籍の構成上の工夫を、詩全体に渡って試みた作品であるといえよう。

(畑村)

#### 418 董逃行

##### 【題解】

董卓が逃げるうた。董卓(？～一九二)、字は仲穎、後漢末の軍人。強大な軍勢力を背景に、皇帝の廢立を行うなど、一時政權を掌握して横暴な振る舞いが多かったが、各地の武將が董卓討伐の兵を挙げると、帝を携えて長安に遷都した。董卓が逃げるとは、その際、歴代の帝王の陵墓を暴いて財宝を手に入れ、街に火を放つて都の洛陽を捨てたことを指す。その後、董卓は長安で部下であり養子であつた呂布に殺害される。

『楽府詩集』卷三四、相和歌辞九・清調曲二に「董逃行」があり、その解題に次のようにいう。

崔豹『古今注』曰、「董逃歌」、後漢游董所作也。終有董卓作乱、卒以逃亡。後人習之為歌章、樂府奏之以為傲誡焉。『後漢書』五行志曰、「靈帝中平中、京都歌曰、『承樂世、董逃、遊四郭、董逃。蒙天恩、董逃、帶金紫、董逃。行謝恩、董逃、整車騎、董逃。垂欲發、董逃、與中辭、董逃。出西門、董逃、瞻宮殿、董逃。望京城、董逃、日夜絕、董逃、心摧傷、董逃。』案、『董』謂董卓也。言欲跋扈、縱有殘暴、終歸逃竄、至於滅族也。『風俗通』曰、「卓以董逃之歌、主為己發、太禁絕之。」楊阜『董卓伝』曰、「卓改董逃為董安。」『樂府解題』曰、「古詞云『吾欲上謁從高山、山頭危險大難。』言五岳之上、皆以黃金為宮闕、而多靈獸仙草、可以求長生不死之術、令天神擁護君上以壽考也。若陸機『和風習習薄林』、謝靈運『春虹散彩銀河』、但言節物芳華、可及時行樂、無使徂齡坐徒而已。晉傳玄有歷九秋篇十二章、具叙夫婦別離之思、亦題云『董逃行』、未詳。」(※引用部分を明らかにするため、中華書局点校本により「」『』等の記号を付した)

崔豹『古今注』に曰く、「董逃歌」は、後漢の游董の作る所なり。終に董卓の乱を作す有り、卒に以て逃亡す。後人之を習いて歌章と為し、樂府之を奏して以て傲誡と為す」と。『後漢書』五行志に曰く、「靈帝の中平中、京都 歌いて曰く、『樂世を承け、董逃、四郭に遊ぶ、董逃。天恩を蒙り、董逃、金紫を帯ぶ、董逃。行きて恩に謝し、董逃、車騎を整う、董逃。発せんと垂欲し、董逃、与に中に辞す、董逃。西門を出で、董逃、宮殿を瞻る、董逃。京城を望み、董逃、日夜 絶え、董逃、心 摧け傷む、董逃』と。案ずるに、『董』は董卓を謂うなり。跋扈せんと欲し、縦に殘暴有るも、終に逃竄に歸し、滅族せらるるに至るなり。『風俗通』に



曰く、「卓 董逃の歌を以て、主に己おのれに発すと為し、太はなだ之を禁絶す」と。楊卓『董卓伝』に曰く、「卓 董逃を改めて董安と為す」と。『樂府解題』に曰く、「古詞に云う『吾 從高山に上謁せんと欲し、山頭 危険にして大いに難し』と。五岳の上、皆黄金を以て宮闕と為し、靈獸仙草多く、以て長生不死の術を求め、天神をして君上を擁護して寿考ならしむるべきを言うなり。陸機の『和風習習として林に薄る』、謝靈運の『春虹 彩を銀河に散ず』の若きは、但だ節物芳華にして、時に及んで行樂すべく、徂ゆく齡をして坐るに徒たさしむる無かれと言うのみ。晋の傅玄に歴九秋篇十二章有り、具まさに夫婦別離の思いを叙べ、亦た題して『董逃行』と云うは、未だ詳らかならず」と。

そして、古辞・傅玄の「董逃行歴九秋篇」・陸機の「董逃行」・元稹の「董逃行」・張籍のこの詩を載せている（これら関連作品は【補】の部分に引く）。このうち、元稹の「董逃行」については、長谷川真史氏に「元稹樂府古題『董逃行』考」（『中国文学論集』第三八号、二〇〇九年）の專論があり、元稹の作品の制作過程や張籍の作品との比較が行われているほか、樂府題の変遷についても考察されている。以下、長谷川氏および他の先行文献に導かれつつ、樂府題「董逃行」について触れてみたい。

まず注目されるのは、この解題には、二つの異なる系統の記述が含まれているように思われるという点である。

一つは崔豹『古今注』・『後漢書』五行志・『風俗通』・楊卓『董卓伝』の資料に記されたもので、後漢の中平年間（一八四〜一八九）に都で流行した童謡「董逃歌」である。「天子の恩を受けて高位を得た者が、途中で去って門から出た後、都を振り返って悲しむ」といった内容の歌詞に、「董逃」という囃子詞が混じったもので、董卓は自分のことを歌っていると考えてこれを禁じ、また「董逃」を「董安」に改めようとしたようだ。結局董卓は初平元年（一九〇）に都の洛陽に火を放って長安に遷都し、同三年（一九二）には殺されることになり、謡の予言が的中することになる。

もう一つの系統は、『樂府解題』に記されたもので、『樂府詩集』で直後に引かれる「董逃行」古辞では、不老長寿の術を求めて、天子に長寿になつてほしいという願いが歌われており、つまり董卓とは関係のない内容となっている。行樂を勧める陸機の作（後掲）と謝靈運の作（佚）もその系統と考えているようだ。さらに、夫婦の別離の思いを詠じた傅玄の作（後掲）について、「董逃行」という理由が分からないとしているが、古辞や陸機・謝靈運の作が「董逃行」と呼ばれる理由も、この記述からは読み取れないようである。

この「董逃行」は、テキストによってはしばしば「董桃行」に作っているが、長谷川氏も指摘するように、北宋の劉次莊の『樂府集』（『詩話總龜』巻七評論門）に、次のような記述がある。

董逃行、言神事、傅休奕九秋篇十二章、乃叙夫婦別離之思。梁簡文行幸甘泉宮歌復云、董桃律金紫、賢妻侍禁中。疑若引董賢及子瑕殘桃事、終云、不羨神仙侶、排煙逐駕鴻。皆所未詳。按漢武内伝、：（中略）：、作者取諸此耶。

董逃行は、神事を言うも、傅休奕の九秋篇十二章は、乃ち夫婦別離の思いを叙ぶ。梁の簡文の行幸甘泉宮歌に復た云う、董桃 金紫に律し、賢妻 禁中に侍すと。疑うらくは董賢及び子瑕の殘桃の事を引くが若きも、終りに云う、羨まず 神仙の侶の、煙を排して 逐おいて鴻に駕するを、と。皆未だ詳まらかならざる所なり。漢武内伝を按ずるに、：（中略）：、作者 諸此に取るか。

劉次莊は、『樂府解題』と同様、古辞が神仙のことをいうにも関わらず傅玄の作が夫婦の別離をいうことを指摘した後、梁の簡文帝の「行幸甘泉宮」（『樂府詩集』巻八四）の「董桃トウトウ 律金紫、賢妻侍禁中」（董桃トウトウ 金紫を律し、賢妻 禁中に侍す）の句を挙げ、漢の哀帝に寵愛された董賢の故事と、春秋時代に衛の靈公に愛された弥子瑕が、寵愛されている時にはおいしい桃を残しておいてくれたと褒められ、寵愛が冷めると食べかけの桃を食わせたと責められたという故事とを、合わせて用いたように見えるが、この「行幸甘泉宮」の末尾には「羨まず 神仙の侶の、煙を排して 逐おいて鴻に駕するを」という句があるのは、よく分からないと指摘する。すなわち、愛情のことを詠じた句がありながら、神仙に関わる結びであるのがつながりが悪いというのであろう。

そう指摘した上で、長いので原文は省略したが、漢の武帝のもとを西王母が訪れた時、七つの桃を持参したのを、武帝が四つ、西王母が三つ食べ、その後、侍女の董双成に雲和の笙を吹かせて酒を飲んで楽しんでという故事を引き、この故事を用いたのではないかと指摘して終わる。つまり、神仙と関わる故事で、「董双成」という人物も桃も登場するというところで、簡文帝が基づいたばかりでなく、「董桃行」の樂府題のもとになったというのである。

一方、南宋の鄭樵の『樂府原題』相和歌三十曲の「董逃行」の条に、古辞の内容を要約した上で、次のようにいう。

疑此辞、作於漢武之時。蓋武帝有求仙之興。董逃者、古仙人也。後漢遊童競歌之、有董卓之乱、卒以逃亡、此則語讖之言。因其所尚之歌、故有是事、実非起於後漢也。梁簡文詠行幸甘泉云、董逃拜金紫、賢妻侍禁中。又云、不羨神仙侶、排煙遠駕鴻、所言仙事也。然陸機・謝靈運之作、皆言節物易徂、可及時行樂、晋傅休奕九秋十二篇、有擬董逃行、但言夫婦離別、各隨其意。

疑うらくは此の辞、漢武の時に作る。蓋し武帝 仙を求むるの興有ればなり。董逃なる者は、古の仙人なり。後漢の遊童 競つて之を歌いて、董卓の乱有り、卒に以て逃亡するは、此れ則ち語讖の言なり。其の尚ぶ所の歌に因りて、故に是の事有り、実は後漢に起るに非ざるなり。梁の簡文 甘泉に行幸するを詠じて、董逃 金紫を拜し、賢妻 禁中に待す、と云い、又、神仙の侶の、煙を排して 遠く鴻に駕するを、と云うは、言う所は仙の事なり。然れども陸機・謝靈運の作は、皆節物の徂き易く、時に及んで行樂すべきを言ひ、晋の傅休奕の九秋十二篇に、擬董逃行有りて、但だ夫婦の離別を言うは、各おの其の意に随う。

すなわち、「董逃行」の古辞は、仙人になりたがっていた漢の武帝の時代の作、董逃というのは昔の仙人の名前であり、後漢の子供達がこの仙人を歌ったところ、董卓の乱が起つて逃亡したのは、この歌が予言となつたのであり、好むものを歌つたら事実になつたということで、後漢に始まつたのではない、というのである。そして、梁の簡文帝の「行幸甘泉宮」の作も「董逃拜金紫」として引き、神仙のことをいう詩であるとした上で、陸機・謝靈運の作で時間があるうちに行樂するよう勧めたり、傅玄の作で夫婦の離別を詠じたりしているのは、それぞれの好みによつたものだとしている。

黄節『漢魏樂府風箋』（一九二三年序、黄節注漢魏六朝詩六種本による。人民文学出版社、二〇〇八年）の「董逃行」の条では、まず「董逃歌」と「董逃行」を分け、『古今注』・『後漢書』五行志・『風俗通』に記されているのは「董逃歌」であつて「董逃行」ではないとした上で、清の呉景旭の『歴代詩話』巻二四からこの『樂府原題』の「実非起於後漢也」までの記載を引く。そしてそれに基づいて、「董逃行」古辞は武帝の頃の作、「董逃歌」の方は後漢の童謡であるとし、「董桃」に作るテキストがあることや劉次莊の説をも紹介するが、それらは全て付会の説であるとして退けている。増田清秀氏『樂府の歴史的研究』（創文社、一九七五年）も、やはり劉次莊の説は奇抜な着想ではあるが、妥当ではないとする。

以上のように複雑な状況で、どの説が正しいのか、現在の段階では判断しかねるが、張籍の先行作品として見た場合、後漢の童謡にも董卓の逃亡のこ

とははつきりとは詠じられていないのであるから、結局のところ、従来の「董逃行」の系列の作品の中に董卓の事跡が詠じられたものはなく、また、謝靈運以来作例が見られない、ということが確認できればよいと思われる。そして、長谷川氏も指摘するように、そのような状況の中で、元稹と張籍という同時代の詩人が同じ「董逃行」の樂府題を用いて、董卓の事跡を詩に詠じたということが重視されるべきであろう。

元稹の「董逃行」（『元稹集』巻二三）は「樂府古題」十九首の連作の一つで、通州司馬であつた元和十二年（八一七）に、劉猛と李餘という二人の進士の作つた古樂府数十首のうち「新意」あるものを選んで唱和したものであり、そのことは元稹自身が「樂府古題序」（同前）に明記している。序文の内容も含め、制作の経緯の詳細については長谷川氏の論考に譲るが、氏は元稹の「董逃行」を、従来の擬古樂府と一線を画する、むしろ新樂府に近いものと位置づける。張籍のものと同じ傾向を持つものだから、張修蓉氏『中唐樂府詩研究』（文津出版社、一九八五年）は「古題古意」に分類するが、「古題新意」とすべきかもしれない。

劉猛の作は残っていないため、その内容は明らかではないが、先に述べたように、元稹と張籍の作はともに董卓の事跡を詠じている。中唐の彼らが単に董卓の事跡を樂府にしたとは考えにくく、諸注が指摘するように、唐代の社会状況を踏まえて詠じられたと考えられる。それを徐注・李樹政注は安史の乱に限定し、徐余注は安史の乱を中心としつつ、その後頻繁に起こつた内乱をも含めて考えている。董卓に仮託した樂府の作品を作るという時点で、歴史上の事実は再構成されて読者に提示されることになるから、あまり穿鑿する必要はないであろう。本稿では、語釈を施した詩語が安史の乱に関わる詩に用いられている場合に指摘したほかは、諸注積書に記されている史実についてのみ触れることとした。

なお、制作年代について、羅氏年譜は、元稹の序文から、劉猛の作品を承けて制作されたものとして、仮に元和十二年（八一七）、張籍五十二歳の作としている。一方徐余注は、洛陽が舞台となつていることから、22「永嘉行」（巻一）・415「廢宅行」（巻七）と同じく、張籍が若い頃洛陽に寄寓していたときの作品であるとして、仮に貞元二年（七八六）張籍二十一歳の作とする。どちらの説もありうるであろうし、別の時に作つた可能性を全く否定しうるほど説得力を持つものでもないようである。不明としておくのが正確ということになるのではないだろうか。

#### 【本文・書き下し文】

1 洛陽城頭火燿燿 洛陽城頭 火燿燿たり

2 亂兵焼我天子宮 乱兵 我が天子の宮を焼く  
 3 宮城南面有深山 宮城の南面に 深山有り  
 4 盡將老幼藏其間 尽く老幼を將て 其の間に藏す  
 5 重巖爲屋椽爲食 重巖を屋と爲し 椽を食と爲し  
 6 丁男夜行候消息 丁男 夜に行きて 消息を候う  
 7 聞道官軍猶掠人 聞道く 官軍 猶お人を掠むと  
 8 舊里如今歸未得 旧里 如今 帰ること未だ得ず  
 9 董逃行 董逃行  
 10 漢家幾時重太平 漢家 幾時か 重ねて太平ならん

## 【押韻】

瞳・宮—上平声一東

山・間—上平声二八山  
 食・息—入声二四職、得—入声二五徳（同用）  
 行・平—下平声一二庚

## 【口語訳】

1 洛陽の街では 火が明るく燃えさかる  
 2 反乱軍が 我らが天子の宮を焼いたのだ  
 3 宮城の南側には 深い山がある  
 4 幼い子や年寄りには みんなその中に隠しておいた  
 5 重なり合った岩を屋根とし どんぐりを食事として暮らし  
 6 夜になると若者が出かけて 様子をうかがう  
 7 聞けば 官軍がまだ人をさらっているそう  
 8 もとの住まいには 今もなお帰ることができない  
 9 董逃行のうた  
 10 漢の国は いつになったら 再び平和になるのだろうか

## 【語釈】

1・2 洛陽城頭火瞳瞳、乱兵焼我天子宮  
 「洛陽城頭」洛陽の街のあたり。

「洛陽」は現在の河南省洛陽市、東周以来の「九朝の古都」と称せられる都市で、董卓が火を放った後漢の都であり、安祿山が掠取した唐の東都でもある。ただし、漢魏洛陽城はその名の通り洛水の陽にあつたが、隋唐洛陽城はその約十キロ西に洛水をまたいで建設されたものであり、董卓が放火した

洛陽と安祿山が占領した洛陽は別の場所にあつた。なお、洛陽の概要や歴史、文学的イメージ等については、松浦友久・植木久行氏『長安・洛陽物語』（中国の都城二、集英社、一九八八年）に詳しい。また、白居易・司馬光を中心とした文人と洛陽との関わりについては、中尾健一郎氏に『古都洛陽と唐宋文人』（汲古書院、二〇一二年）の近著がある。

都の名であることから、古くから膨大な数の用例が見え、詩においても、古く後漢の宋子侯の「董嬌饒詩」（『玉臺新詠』巻一）の冒頭に「洛陽城東路、桃李生路傍」（洛陽 城東の路、桃李 路傍に生ず）の句が見え、「長歌行古辞二首」其二（『樂府詩集』卷三〇）に「驅車出北門、遥觀洛陽城」（車を驅つて 北門を出で、遙かに觀る 洛陽城）とあるなど、用例の枚挙にいとまがないが、ここでは先に述べたように、一義的には董卓が焼き払った後漢の都として描かれており、それが安祿山が唐の東都である洛陽を陥落させたことと重ね合わせられていよう。

靈帝崩御後の混乱に乗じて少帝劉弁を手中に収めた董卓は、何太后を殺し、帝を廢して陳留王劉協を即位させる（獻帝）など専横を極めたが、初平元年（一九〇）、東方諸州の連合軍が董卓征伐の兵を進めると、洛陽を焼き払い、後漢の帝王の陵墓をあばいて財宝を奪うと、長安への遷都を強行した（『後漢書』獻帝紀、『三國志』董卓伝等）。

この時期の状況を樂府の形で詠じたとされる曹操の「薤露」（『宋書』樂志三）に「瞻彼洛城郭、微子為哀傷」（彼の洛の城郭を瞻て、微子 為に哀傷す）の句があり、殷の廢墟を見て微子が「麦秀歌」を歌った故事（『史記』宋微子世家等）に基づいて、一般に箕子の作とされるが、『尚書大伝』は微子の作とする）に基づいて、その荒廢ぶりを象徴的に表現している。さらに、曹植の「送応氏詩二首」其一（『文選』卷二〇）では、冒頭の「歩登北邙坂、遥望洛陽山。洛陽何寂寞、宮室尽燒焚」（歩みて北邙の坂を登り、遙かに洛陽の山を望む。洛陽 何ぞ寂寞たる、宮室 尽く燒焚せらるる）の句以下、当時の荒れ果てた洛陽の風景が詳細に詠じられている。

ただ、それ以後、中唐に及ぶまで、董卓によって荒廢した洛陽の様子を詠じた例は見当たらないようである。

唐代、洛陽は副都とされ、特に玄宗の頃までは、しばしば天子が行幸したため、繁華な都市となっていた。盧照鄰の「結客少年場行」（『全唐詩』卷四一）には「長安重遊俠、洛陽富財雄」（長安 遊俠を重んじ、洛陽 財雄に富む）と、洛陽の繁華をしのばせる描写があり、有名な劉希夷の「代悲白頭翁」（『全唐詩』卷八二）にも、「洛陽城東桃李花、飛來飛去落誰家」（洛陽城東 桃李の花、飛び来たり飛び去って 誰が家にか落つる）と、先に引いた宋子侯の「董嬌饒詩」（前出）に基づきつつ、花の咲き乱れる洛陽の様子が



描かれている。

唐詩において洛陽での戦乱やその荒廃ぶりを詠じた例としては、李白の「北上行」(王琦注本卷五)に「奔鯨夾黄河、鑿齒屯洛陽」(奔鯨 黄河を夾み、鑿齒 洛陽に屯す)といい、馮著の「洛陽道」(『全唐詩』卷二一五)に「天津橋上多胡塵、洛陽道上愁殺人」(天津橋上 胡塵多く、洛陽道上 人を愁殺す)というなどの例がある。ともに樂府の中で安祿山の反乱を表現する中で「洛陽」の語が用いられた例。なお、前者にいう「鑿齒」は、堯の時に人民を苦しめ、弓の名手羿に射られたというものの名で、南方の異民族の名称ともされるが、ここでは「奔鯨」(暴れクジラ)崔乾祐ら安祿山配下の將軍を指すとされる)と対になっており、王琦の注に引く『淮南子』高誘注のように、獸の名とする解釈に従って、安祿山を指して用いたものと思われる。

杜甫には詩中に十一例、詩題に一例。そのうち、「憶昔二首」其二(『詳註』卷一三)に「洛陽宮殿燒焚尽、宗廟新除狐兔穴」(洛陽の宮殿 燒焚し尽くし、宗廟の新除 狐兔穴す)という例は、安祿山の反乱について述べた部分で、この詩と同じく洛陽の宮殿が燃やされたことが描かれており、また冒頭の二字から採られた詩題の一例「洛陽」(『詳註』卷一七)に「洛陽昔陷没、胡馬犯潼関」(洛陽 昔陷没し、胡馬 潼関を犯す)と、安祿山軍による洛陽の陥落が描かれている。

張籍には詩題に三例、詩中に八例。詩題のうち一例は、天子が訪れなくなった洛陽を描いた樂府440「洛陽行」(卷七)の例。詩中の八例のうち、338「秋思」(卷六)に「洛陽城裏見秋風、欲作歸書意万重」(洛陽城裏 秋風を見る、歸書を作らんと欲して 意万重)という例は、人口に膾炙する。

また、「洛陽城頭」の四字で用いた例としては、梁の蕭子顯の「燕歌行」(『玉臺新詠』卷九)に「洛陽城頭鷄欲曙、丞相府中鳥未飛」(洛陽城頭 鷄は曙ならんと欲し、丞相の府中 鳥は未だ飛ばず)と洛陽の早朝の様子を表現し、庾信の「烏夜啼」(『集注』卷五)に「御史府中何処宿、洛陽城頭那得棲」(御史府中 何れの処にか宿せん、洛陽城頭 那ぞ棲むを得ん)と行き場のない鳥を詠ずる。ともに鳥が止まる場所として、「城壁の上」という意味で用いられているようだ。

唐詩においては、他にもう一例、李頎の「別梁錙」(『全唐詩』卷一三三)に「洛陽城頭曉霜白、層冰峨峨滿川沢」(洛陽城頭 曉霜白く、層冰峨峨として 川沢に滿つ)の句があり、寒さの厳しい冬の朝の洛陽を描写している。こちらは城壁の上ではなく、洛陽の街を広く指しているよう。

「火瞳瞳」火が明るく燃えている。

「瞳」は、唐写本『切韻』殘卷(「切二」本)上平声一東の条に「瞳、瞳

瞳、日欲明」(瞳は、瞳瞳、日明らかならんと欲するなり)とあり、陸機の「文賦」(『文選』卷一七)の「其致也、情瞳瞳而弥鮮、物昭晰而互進」(其の致るや、情は瞳瞳として弥いよ鮮やかに、物は昭晰として互いに進む)の李善注に引く魏の張揖の「埤蒼」にも、「瞳瞳、欲明也」(瞳瞳は、明らかならんと欲するなり)とある。本来、太陽が昇ってだんだんと明るくなる様子を形容することばのようである。

「瞳瞳」の形では、古く漢の東方朔の「早頌」(『藝文類聚』卷一〇〇)に「遥望白雲之鄂渚、滃瞳瞳而安止」(遥かに白雲の鄂渚なるを望めば、滃瞳瞳として安りに止まる)という例がある。この例は、白雲がわき起こっていつながら雨を降らせてくれないことを述べているようで、雲が輝く形容として用いられたものと思われる。

唐までの詩に二例、梁の簡文帝の「上之回」(『樂府詩集』卷一六)に「桃林方灼灼、柳路日瞳瞳」(桃林 方に灼灼たり、柳路 日は瞳瞳たり)といい、何遜の「苦熱詩」(『藝文類聚』卷五)に「噎噎風逾靜、瞳瞳日漸吁」(噎噎として 風は逾いよ静かに、瞳瞳として 日は漸く吁る)という。ともに太陽が明るく照りつける形容のようである。

唐に入り、初盛唐では、初唐の詩人賀朝に一例のみ、「宿香山閣」(『全唐詩』卷一七)に「一聞鷄唱曉、已見日瞳瞳」(一たび鷄の曉を唱うるを聞き、已に日の瞳瞳たるを見る)の句がある。ただし、『全唐詩』卷七七六ではこの詩を大曆頃の人とされる賈彦璋の作としている(陳注が李白の作とするのは何かの誤りか)。その後、大曆期の詩人からは多くの用例が見られるようになり、劉長卿の「灞東晚晴、簡同行薛棄・朱訓」(『全唐詩』卷一四九)に「西向看夕陽、瞳瞳映桑柘」(西向して 夕陽を見れば、瞳瞳として 桑柘に映ず)といい、元結の「夜宴石魚湖作」(『全唐詩』卷二四一)に「如見海底日、瞳瞳始欲生」(海底の日の、瞳瞳として始めて生ぜん)と欲するを見るが如し)というなどの例がある。前者は夕日を表現したもの、後者は湖に映る夜宴の明かりを日の出前の太陽に喩えたもの。

元和期になると、この詩に見られるような太陽以外の形容にも用いられるようになる。王建の「白紵歌二首」其二(『王建詩集』卷一)に「夜天瞳瞳不見星、宮中火照西江明」(夜天瞳瞳として 星を見ず、宮中 火照らして 西江明らかなり)というの、宮中の夜宴の光によって夜空が明るく照らされる例であり、劉禹錫の「謁柱山會禪師」(『箋証』卷二三)に「瞳瞳揭智炬、照使出昏昧」(瞳瞳として 智炬を掲げ、照らして 昏昧を出でしむ)というの、知恵をともし火に喩えて、その明るさを形容した例。

張籍にもう一例、232「送令狐尚書赴東都留守」(卷四)に「每領群臣拜章慶、半開門仗日瞳瞳」(群臣を領する毎に 章慶を拝し、半ば門仗を開きて

日瞳瞳たり」という。これは令狐楚が東都留守を拝命して、門前に並ぶ儀仗に日光が注ぐ様子を表現したもので、実際の太陽の光というより、輝かしい榮譽を象徴する情景であろう。

「乱兵」反乱軍の兵士。22 「永嘉行」(巻一)に「婦人出門隨乱兵、夫死眼前不敢哭」(婦人 門を出でて 乱兵に隨い、夫 眼前に死するも 敢て哭さず)の句があった。その【語釈】参照。

「焼我天子宮」我らが天子の宮殿を焼いた。

「天子」は、30 「將軍行」(巻一)に「彈箏峽東有胡塵、天子扞日拜將軍」(彈箏峽東 胡塵有り、天子 日を扞んで 將軍に拜す)といい、また22 「永嘉行」(前出)に「晋家天子作降虜、公卿奔走如驅羊」(晋家の天子 降虜と作り、公卿奔走すること 羊を驅るが如し)という例が見えた。それぞれの【語釈】参照。

「我天子」の三字の並びは、唐までの詩に見えず、唐詩にも他に陳子昂の「慶雲章」(『全唐詩』巻八三)に「玉葉金柯、祚我天子。非我天子、慶雲誰昌」(玉葉金柯、我が天子に祚く。我が天子に非ずんば、慶雲 誰か昌んらん)の例が見えるのみ。

「天子宮」の三字の並びは、『漢書』天文志の、景帝の中の二年(紀元前一四八)六月、蓬星が房宿・心宿付近に出現したことに対する占いの語に「蓬星出、必有乱臣。房・心間、天子宮也」(蓬星出づれば、必ず乱臣有らん。房・心の間は、天子の宮なり)といい、王充『論衡』実知に引く、戦国・秦の樗里子の遺言に「後百年、当有天子宮挟我墓」(後百年にして、当に天子の宮の我が墓を挟む有るべし)というなどの古い例がある。前者は房宿・心宿の星座が天子の宮殿の象徴であることを表現した例、後者は自らの墓が後の漢代になって長樂宮と未央宮の間にはさまれることになったのを予測したという例(なお、『史記』樗里子甘茂列伝では「天子之宮」に作る)。

ただ、詩においては、唐までの詩・『全唐詩』を通じて、この例以外に用例が見られない。

なお、「宮」に関して「焼」と表現した先行例は、唐までの詩では先に挙げた曹植「送应氏」(前出)に「洛陽 何ぞ寂寞たる、宮室 尽く焼焚せらる」という例のみのようである。唐に入って、やはり先に挙げた杜甫の「憶昔二首」(前出)に「洛陽の宮殿 焼焚し尽くし、宗廟の新除 狐兔穴す」の句があった。杜甫にはもう一例、「遣憂」(『詳註』巻一二)にも「隋氏留宮室、焚燒何太頻」(隋氏 宮室を留め、焚燒 何ぞ太だ頻りなる)という例もある。こちらは広徳元年(七六三)に吐蕃が侵入して長安の宮殿を焼き

払ったことを表現した例。張籍にはこれのみ。

反乱軍に燃やされる洛陽を描いて舞台設定を行った冒頭の二句、二句一韻で一まとまりとなっている。洛陽城で火が明るく燃えるという、非日常的で印象的な情景が描かれることによって読者を惹きつけ、次にそれが反乱軍の放った火であるという驚愕の事実が明かされる、という巧みな展開になっている。三人称の叙述ではなく、「我が天子」と一人称が用いられて、冒頭から詩の語り手の実体験として提示されることにより、臨場感が増すと同時に、天子に対する敬愛とその宮殿が燃やされる無念がより強く感じられることになる。

なお、実際の董卓軍は、袁紹らの連合軍に何も残さなかったために、戦略的に洛陽を焼き払ったようだが、ここでは「乱兵」による行為とされており、単に董卓の逃亡という歴史的事実を描いたのではなく、安史の乱などの唐代の事件を踏まえて再構成されていることが想像されよう。

### 3・4 宮城南面有深山、尽将老幼藏其間

「宮城」宮殿を取り囲む城壁、また城壁に取り囲まれた宮殿。たとえば『唐兩京城坊攷』等の都城に関する文献では、宮殿の区域のうち、天子の居室部分を「宮城」、官署が設けられた部分を「皇城」と呼んで区別するようだが、例えば同時代の白居易が牛僧孺に唱和した詩の題名に「酬牛相公宮城早秋寓言見示、兼呈夢得」(牛相公の宮城早秋寓言示さるるに酬い、兼ねて夢得に呈す、305c)があり、牛僧孺が宮城で詩を作っていることからもうかがえるように、文学作品ではあまり厳密な区別はなされていないようである。さらにこの詩の場合は、次に洛陽の南の山に言及されていることや、前の句の末の「天子宮」の表現を受けて、いわゆる蟬聯体の手法によって表現されていることも考えれば、洛陽の宮殿のみならず、宮殿が築かれている洛陽の城全体を意識して「宮城」と表現したと思われる。

「宮城」の語の古い用例としては、『漢書』燕刺王旦伝に「天火烧城門、大風壞宮城樓、折拔樹木」(天火 城門を焼き、大風 宮城の樓を壊し、折りて樹木を抜く)という表現が見える。燕刺王の謀反の計画が失敗することの予兆となる天変地異の描写で、燕王の宮殿を表現するのに用いられている。詩には用例が少なく、唐までの詩の本文には見えず、陳の徐陵の詩題に「同江詹事登宮城南樓詩」(『初学記』巻一〇)という例が見えるのみ。唐に入っても、初唐には例がなく、盛唐以後、李白の「金陵白楊十字巷」(王琦注本 卷二二)に「天地有反覆、宮城尽傾倒」(天地 反覆有り、宮城 尽く傾倒

す」といい、劉長卿の「上陽宮望幸」(『全唐詩』卷一五一)に「深花寂寂宮城閉、細草青青御路閑」(深花寂寂として 宮城閉じ、細草青青として 御路閑かなり)というなどの例が見られるようになる。前者は南朝の都であった建康の宮殿が倒壊していることを詠じた例、後者は詩題に明らかのように、洛陽城の東にあった上陽宮を指して用いた例。杜甫には例がなく、張籍にはこの一例のみ。

〔南面〕南側、南方。「面」は現代中国語と同じく、方位詞の後につく接尾辞。

「南面」の語は古くから膨大な用例があるが、例えば『周易』説卦伝に「聖人南面而聽天下、嚮明而治」(聖人は南面して天下を聴き、明に嚮いて治む)というように、「面」が動詞として用いられた(特に天子が)南を向く)の意の例がほとんどで、接尾辞として用いられた唐までの例は未見。

詩においては盛唐以降用例が見られるようになり、孟浩然の「登安陽城樓」(『全唐詩』卷一六五)に「東城南面漢江流、江漲開成南雍州」(東城南面漢江流れ、江漲 開きて成す 南雍州)といい、皇甫冉の「山中五詠」其二「遠山」(同前卷二四九)に「少室西峰、鳴皋隱南面」(少室 西峰に尽き、鳴皋 南面に隠る)というなどの例が見えるようになる。前者は安陽城の東側の南側をいう例、後者は遠くにある鳴皋山が、自分のいる山の南側によって隠れていることをいうようである。なお、同時代の白居易の「認春、戲呈馮少尹・李郎中・陳主簿」207に「認得春風先到處、西園南面水東頭」(認め得たり 春風 先ず到る處、西園の南面 水の東頭)という例は、やはり現代語と同じく方位詞につく接尾辞「頭」を伴った「東頭」の語と句中対をなして用いられた例。杜甫には用例がなく、張籍の例はこれのみ。

〔有深山〕深い山がある。

李冬生注に洛陽の南に竜門山があると指摘するように、洛陽の南にある山といえ、すぐに竜門山(伊闕山)が想起されよう。

「深山」は古く『春秋』襄公二十一年の『左伝』に引く叔向の言葉に「深山大沢、実生竜蛇」(深山大沢は、実に竜蛇を生ず)といい、『孟子』尽心上の孟子の言葉に「舜之居深山之中、与木石居、与鹿豕遊、其所以異於深山之野人者、幾希」(舜の深山の中に居るや、木石と居り、鹿豕と遊び、其の深山の野人に異なる所以の者は、幾んど希なり)というなどの用例が見える。前者は不思議な動物が生まれる場所として、後者は舜が隠遁していた場所として「深山」の語を用いている。

唐までの詩においても、数はあまり多くないが、『史記』滑稽列伝の東方朔の部分に引く朔の歌に「宮殿中可以避世全身、何必深山之中蒿廬之下」(宮殿の中も 以て世を避け身を全うすべし、何ぞ必ずしも 深山の中 蒿廬の下のみならんや)といい、謝惠連の「猛虎行」二首其二(『樂府詩集』卷三一)に「猛虎潛深山、長嘯自生風」(猛虎 深山に潜み、長嘯すれば 自ずから風を生ず)というなどの例がある。

唐に入ってから多くの用例が見えるようになるうち、陳子昂の「晚次樂鄉里」(『全唐詩』卷八四)に「野戍荒煙斷、深山古木平」(野戍 荒煙断え、深山 古木平らかなり)といい、王維の「過香積寺」(趙注本卷七)に「古木無人徑、深山何處鐘」(古木 無人の徑、深山 何れの處の鐘ぞ)という例は、ともに『唐詩選』に収められて有名な例である。前者は旅をしている樂郷県の山を表現した例、後者は香積寺のある山を表現した例。

杜甫に四例あるうち、「送孔巢父謝病歸游江東、兼呈李白」(『詳註』卷一)に「深山大沢竜蛇遠、春寒野陰風景暮」(深山大沢 竜蛇遠く、春寒野陰風景暮る)という例は、やはり『唐詩選』に収められた例。孔巢父が帰って行く江東の自然を表現するのに「深山」の語が用いられている。

張籍には他に二例、69「征西軍」(卷二)では「深山旗未展、陰磧鼓無声」(深山 旗は未だ展べず、陰磧 鼓は声無し)と、軍旗を広げられないほどの山深さを表現するのに用い、210「送韓侍御歸山」(卷四)では、「新結茆廬招隱逸、獨騎驄馬入深山」(新たに茆廬を結びて隱逸を招き、独り驄馬に騎りて深山に入る)と、韓侍御(未詳)が帰隱する山を表現するのに用いている。

百名家本は「深山」を「青山」に作る。「青山」は青々とした山。後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ』唐詩を読むために(東方書店、二〇〇〇年)に「青山」の項があり(中野将氏執筆)、様々な視点からこの詩語が分析される中で、六朝後期から他のものと色彩の対比が行われるようになったことが指摘される。

「深山」であれば、次にいう「老幼」の隠れ場所としての山の深さが強く感じられることになり、一方「青山」であれば、氏の指摘される通り、朱塗り等の色彩の美しい宮殿や灰色の城壁を感じさせる「宮城」との色彩の対比が強く感じられることになろう。

「青山」は『管子』地員に「青山十六施、百一十二尺、而至於泉。青竜之所居」(青山は十六施、百一十二尺にして、泉に至る。青竜の居る所なり)という用例がある。「施」は七尺の物差し、「泉」は地下水のことで、青山では六施すなわち一二尺掘ると地下水に到達するという部分で、「青山」というのは、下にいう青竜が棲むためでもあり、青々と見える山のことでもある。



るといふ(遠藤哲夫『管子』下、明治書院新釈漢文大系、一九九二年)。

唐までの詩にも多くの用例が見え、阮籍の「詠懐詩十七首」其六(『文選』卷二三)に「登高臨四野、北望青山阿」(高きに登りて 四野に臨み、北のかた 青山の阿を望む)といい、謝朓の「遊東田」(同卷二二)に「不対芳春酒、還望青山郭」(芳春の酒に對せず、還つて青山の郭を望む)といふなどの例がある。前者は町の北にある墓地の山を表現した例、後者は春の美しい山を表現した例。

唐詩にも膨大な用例が見えるうち、駱賓王の「宿温城望軍營」(『全唐詩』卷七九)に「白羽揺如月、青山断若雲」(白羽 揺れて月の如く、青山 断えて雲の若し)といい、李白の「送友人」(王琦注本卷一八)に「青山横北郭、白水遶東城」(青山 北郭に横たわり、白水 東城を遶る)という例は、ともに『唐詩選』に収められた有名な例。

杜甫に十二例、うち「新安吏」(『詳註』卷七)に「白水暮東流、青山猶哭声」(白水 暮れに東流し、青山 猶お哭声あり)という例は、この詩の後半にも見える徴兵の様子を描写する中に用いられた例で、安史の乱の際、洛陽守備の郭子儀の軍に徴集される兵士を詠じている。

張籍には文字に異なる二例を含めて十三例、そのうち<sup>434</sup>「湖南曲」(卷七)に「鴛鴦東南飛、飛上青山頭」(鴛鴦 東南に飛び、飛んで上る 青山の頭)という例は樂府の例で、おしどりの飛んでゆく山を表現するのに用いられている。

なお、洛陽の町の南にある山を詩に詠じた例は、唐までの詩には未見だが、唐詩においては、姚崇の「春日洛陽城侍宴」(『全唐詩』卷六四)に「南山開宝曆、北渚对芳蹊」(南山 宝曆を開き、北渚 芳蹊に對す)という例がある。長安の終南山と解釈する注釈書もあるようだが、そのまま洛陽の南の山と解してよいのではないだろうか。

また杜甫の「遣興三首」其三(『詳註』卷六)にも「昔在洛陽時、親友相追攀。送客東郊道、遨遊宿南山」(昔 洛陽に在りし時、親友 相追攀す。客を送る 東郊の道、遨遊して 南山に宿る)と詠じられており、諸注、洛陽の南の竜門山(伊闕山)をいふと指摘する。

なお、竜門を洛陽の南の地として詠じた例としては、蘇頌の「長相思」(『全唐詩』卷七三)に「君不見天津橋下東流水、南望竜門北朝市」(君見ずや天津橋下 東流の水、南のかた竜門を望み 北のかた市に朝す)という例がある。

「尽将老幼藏其間」老人や幼児をすっかりその山の中に隠した。

「将」の文字を「ひきいて」と解し、「老幼を将いて其の間に藏る」と解

積すべき可能性も大いにあるのだが、ここでは上記のように解しておくこととした。自分たちも隠れて安全になることが同時に表現されることになる句であるよりも、自分たちのことは捨て置いて、か弱い老人と子供だけは一番に助けたい、という切なる願いが込められた句と解したいからである。

なお、徐余注が詩の背景として『新唐書』安祿山伝に「祿山未至長安、士人皆逃入山谷」(祿山 未だ長安に至らざるに、士人 皆逃げて山谷に入る)という記述や、『資治通鑑』卷二二八、徳宗の建中四年(七八三)の条に、李希烈の武將の軍が洛陽に迫った際、「東都士民震駭、竄匿山谷」(東都の士民 震駭し、山谷に竄匿す)という記述を引くのは、この辺りの句を想定してのことであろう。

「老幼」は年寄りと幼な子。

古く『礼記』楽記に「疾病不養、老幼孤独不得其所」(疾病 養わず、老幼孤独 其の所を得ず)といい、『春秋』哀公十一年の『左伝』に「冉有以武城人三百为己徒卒、老幼守宮」(冉有 武城の人三百を以て己が徒卒と為し、老幼に宮を守らしむ)とある。前者は欲望に歯止めがないと大乱に至ることを述べた部分に、弱者が居場所を失うことを表現した例。後者は齊を迎え撃つ際の魯の布陣の記述で、老人と子供に宮殿を守らせたという例。

以後、多くの例があり、文学作品においても、潘岳の「西征賦」(『文選』卷一〇)に「牧疲人於西夏、携老幼而入関」(疲人を西夏に牧い、老幼を携えて関に入る)といい、陳注が引く庾信の「哀江南賦」(『集注』卷二)に「提挈老幼、関河累年、死生契濶、不可問天」(老幼を提挈して、関河に年を累ね、死生契濶、天に問うべからず)というなどの例が見える。前者は家族を連れて長安に赴任することを表現した例、後者は家族を伴って北朝に至ったことを表現した例。

ただし、唐までの詩には見られないようで、唐に入っても初唐には例が見えず、盛唐以降、儲光羲の「效古二首」其一(『全唐詩』卷一三六)に「老幼相別離、哭泣無昏早」(老幼 相別離し、哭泣すること 昏早無し)といい、崔峒の「江南迴逢趙嘏、因送任十一赴交城主簿」(同前卷二九四)に、「不知携老幼、何処度艱難」(知らず 老幼を携えて、何れの処にか 艱難を度らん)というなどの例が見られるようになる。前者は、戦乱のため家族と離れることになった老人や子供が、昼も夜もなく泣き続けることを描写した部分で、直前に「丁男」の語も用いられている(後掲)。後者は年寄りと幼児を連れて赴任の旅のつらさを思いやった例。

杜甫には用例がなく、張籍にはこれのみ。

「其間」、散文的な語であり、散文には古くから多くの例がある。

『礼記』王制に「広谷大川異制、民生其間者異俗」(広谷大川は制を異に

し、民の其の間に生ずる者は俗を異にす」という。地形によって人々の風俗が異なることを述べた部分で、「其間」は、広い谷や大きな川といったそれぞれの土地の地形について用いられている。また『春秋』成公九年の『左伝』に「兵交、使在其間可也」（兵交わりて、使いの其の間に在るは可なり）という。交戦中に使者が兩國を往来することは可能であると述べた部分で、二カ国の間を「其間」と表現した例。

『春秋』襄公十年の『左伝』に「知伯怒、投之以机、出於其間」（知伯怒り、之に投ずるに机を以てするに、其の間に出づ）という。これは二人の人物に向かつて床机を投げつけたところ、当たらずに二人の間を抜けたという例。

『莊子』人間世に「上徴武士、則支離攘臂而遊於其間」（上 武士を徴せば、則ち支離攘臂して其の間に遊ぶ）という例は、体に障碍があるため徴兵される心配のない支離疏が、徴兵された兵士の間を腕まくりしながら悠然と歩むという例。

『韓非子』外儲説右上に「樹木而塗之、鼠穿其間、掘穴託其中」（木を樹てて之に塗るに、鼠 其の間を穿ち、穴を掘りて其の中に託す）とある。社の建物に巢穴を作る、いわゆる「社鼠」の寓話で、「其間」は壁として建てられた木の間をいう。

一方詩においては用例が少なく、「古詩八首」其七（『玉臺新詠』卷一）に「人生無幾時、顛沛在其間」（人生 幾時も無く、顛沛 其の間に在り）というなど、古詩や古樂府などの作者不詳の作に用例が散見するが、文人の作としては、陸機「挽歌詩三首」其二（『文選』卷二八）に「重阜何崔嵬、玄廬竄其間」（重阜 何ぞ崔嵬たる、玄廬 其の間に竄る）という例を見るのみ。これは重なり合った岡の間に「玄廬」すなわち墓が隠れているという例。

唐に入り、張昌宗の「太平公主山亭侍宴」（『全唐詩』卷八〇）に「淮南有小山、嬴女隱其間」（淮南に 小山有り、嬴女 其の間に隠る）といい、李白の「公無渡河」（王琦注本卷三）に「有長鯨白齒若雪山、公乎公乎挂胃於其間」（長鯨有り 白齒は雪山の若し、公や公や 其の間に挂胃す）というなどの例がある。前者、「淮南小山」は一般に淮南王劉安の門客で「招隱士」（『楚辭』）の作者とされる人々を指すが、ここでは詩題にいう太平公主の「山亭」が、隠士でもないそんな山にあることを表現したものか。その山に「嬴女」すなわち嬴姓である秦の穆公の娘・弄玉（太平公主を喩える）が隠れたと表現したもので、山について「其間」を用いた例であり、また隠れたことを表現した例でもある。後者は樂府における例で、川で溺死して海に流された遺体がクジラに食べられてしまうことを、その齒の間に引っかかると表現したものである。

杜甫に四例あるうち、「夔州歌十絶句」其一（『詳註』卷一五）に「中巴之東巴東山、江水開關流其間」（中巴の東 巴東の山、江水開關より 其の間を流る）という例は、樂府において、山について用いた例。

張籍に他に一例、449「寄贈韓愈」（卷七）に「出林望曾城、君子在其間」（林を出でて 曾城を望めば、君子 其の間に在り）という。貞元十四年（七九八）、張籍が汴州の韓愈のもとに身を寄せ、汴州郊外の城西館で科擧の受験勉強に励んでいた頃の作とされ、曾城は汴州城、君子は韓愈を指し、城内にいる韓愈を表現するのに「其間」の語を用いている。

続いて洛陽陥落に対する民衆の対応を描いた二句、一韻で一まとまりになっている。先述の通り、「宮」字をしりとり形式で用いるいわゆる蟬聯体を用いられていて、換韻はあるものの前の二句と滑らかにつながることになり、また口調が良く朗誦しやすくなっている。内容としては連続しているが、雰囲気は動乱を描いた冒頭の二句から一変、洛陽の南にある深い山の静謐が前の句で描かれ、その山深さを利用して老人や子供を隠すことが後の句で描かれる。

本来であれば遠い安全な地まで逃げるところだが、子供や老人がいるために素早い移動が叶わず、洛陽の南にある山中にとりあえず隠しておくということであろう。また、隠す対象として幼な子と年寄りという弱者を登場させることにより、権力を持たない人々には戦乱の時には隠れるよりほか方法がないこと、戦乱で最もしわ寄せを受けるのは弱者にほかならないことが感じられる。それと同時に、そのような弱者だけでは何とでも守ろうとする民衆の善良さと権力のない民衆なりのしたたかさも感じられ、他人を押しつけて我先に逃げ出したであろう董卓ら権力者と、対比する意図があった可能性をもうかがわせる。

#### 5・6 重巖為屋椽為食、丁男夜行候消息

「重巖為屋」重なり合った岩を屋根としている。

「重巖（岩）」は重なり合った岩。徐余注、ここでは岩の洞窟を指すと注する。石窟で名高い竜門山のイメージにもびったりで魅力的な解釈だが、細かいことをいえば、大きくてたくさんの方が入れる立派な鍾乳洞のようなイメージというより、洞窟といってもせり出した岩の陰になった窪み程度のものではないだろうか。あるいは、そのようなものばかりではないとしても、少なくとも中に含まれるのではないだろうか（恐らく多くの人が山中に隠れているのであろうから、一箇所ではないだろう）。屋根という家の基本とな

るものすら岩であるという表現からは、とりあえず上だけは岩で覆われているもの、壁などほとんど役に立たないような場所を表現しているように思われる。大きな洞窟の中で雨風をきちんと凌ぎながら、たくさんの人々がにぎやかに暮らしているといった状況をイメージすることはできないであろう。

古書には見えず、西晋の庾貞の「臨丹賦」(『藝文類聚』卷八)に「激重巖之絶根、弘崇丘之飛嶠」(重巖の絶根を激し、崇丘の飛嶠を払う)と見えるあたりが古い例のようだ。川の流れを表現した賦で、重なり合った岩の基部を急流が流れることを表現しているようである。

唐までの詩においては、徐余注も引く同じ西晋の庾悦の「詩」(同前卷二八)に「重巖吐神溜、傾觴挹涌波」(重巖 神溜を吐き、觴を傾けて 涌波に挹む)といい、陳の張正見の「從永陽王遊虎丘山詩」(同前卷八)に「重巖標虎挾、九曲峻羊腸」(重巖 虎挾を標し、九曲 羊腸よりも峻し)というなどの用例がある。前者は神秘的な川が流れ出る場所として用いられた例、後者は虎の棲みかとして用いられた例。

唐詩においては、楊炯の「巫峡」(『全唐詩』卷五五)に、巫峡の高い絶壁を詠じて「重巖宵不極、疊嶂凌蒼蒼」(重巖 宵として極まらず、疊嶂 凌いで蒼蒼たり)といい、駱賓王の「賦得白雲抱幽石」(同前卷七八)に、謝靈運の有名な句を二句の表現に変えて「重巖抱危石、幽澗曳輕雲」(重巖 危石を抱き、幽澗 輕雲を曳く)というなどの例がある。

杜甫に一例、「九日奉寄嚴大夫」(『詳註』卷一一)に「小馭香醪嫩、重巖細菊斑」(小馭 香醪嫩らかに、重巖 細菊斑なり)という。重陽の日に旅の途上にある嚴武を思いやった表現の中に用いられた例。

張籍の例はこれのみ。  
「為屋」の表現は、38 「江南曲」(卷一)に「清莎覆城竹為屋、無井家家飲潮水」(清莎 城を覆い 竹を屋と為し、井無く 家家 潮水を飲む)の句があった。その【語釈】も参照。

語の用例としては、古く『礼記』雜記上に、「素錦以為屋而行」(素錦 以て屋と為して行く)、「葦蓆以為屋」(葦蓆 以て屋と為す)と用いられている。これらは、棺を載せる車の屋根に関する規定に用いられたもの。また、『韓非子』外儲説左上にも「虞慶為屋、謂匠人曰、屋太尊」(虞慶 屋を為り、匠人に謂いて曰く、屋太だ尊しと)といい、「虞慶將為屋」(虞慶 將に屋を為らんとす)という表現が見える。これらはいずれも家を建てることを表現した例。

以上のように古くから用例は見えているが、詩中の例は極めて少なく、唐までの詩には見えないように、唐詩にも先立つ例は一例のみ。玄宗の「早登太行、山中言志」(『全唐詩』卷三)に「野老茅為屋、樵人薜作裳」(野老

茅を屋と為し、樵人 薜を裳と作す)という。開元十一年(七二三)に太行山を經過した折りの作とされるもので、付近の人民の生活を詠じる中に用いられた例。

以前の例は見えない表現だが、張籍には他に二例の用例があり、先に引いた38 「江南曲」(前出)に加え、419 「江村行」(卷七)に「田頭刈莎結為屋、歸來繫牛還獨宿」(田頭 莎を刈りて 結びて屋と為し、歸り来たりて牛を繫ぎ 還獨り宿る)の句がある。江南の庶民の生活を描く中に用いられた例。なお、張籍にはさらに「作屋」の例もあり、422 「樵客吟」(卷七)に「松柏生枝直且堅、与君作屋成家宅」(松柏 枝を生ずること 直く且つ堅し、君が与に 屋を作り 家宅と成さん)という。苦勞している樵のために家を作つてやりたいという願いを表現する中に用いられた例。

「橡為食」どんぐりを食料にしている。

「橡」はどんぐり。非常用の食品であったこと、また杜甫によって詩に詠じられ始めたことなど、5 「野老歌」(卷一)の「歲暮鋤犁倚空室、呼兒登山收橡實」(歲暮 鋤犁 空室に倚り、兒を呼び 山に登りて 橡實を収めしむ)の【語釈】参照。ここでは、李冬生注に引く例を補つておこう。『晋書』庾袞伝に「又与邑人入山拾橡、分夷嶮、序長幼」(又邑人と与に山に入りて橡を拾うに、夷嶮を分かち、長幼を序す)という。礼に厳しかった庾袞が、山で村人とどんぐりを拾うのにも、土地の険しさによって年寄りと若者を配分したことを表現した部分。

なお李冬生注は『本草綱目』も引いているが、我が国でいうクヌギの実を主に指すことを含め、植物学的な考証については、『続校注唐詩解釈辞典』(松浦友久編、大修館書店、二〇〇一年)の張籍「野老歌」の項(高橋良行氏執筆)に詳しいので、そちらに譲ることとしたい。

「為食」の表現も、『礼記』檀弓下に「齊大饑、黔敖為食於路、以待餓者而食之」(齊 大いに饑え、黔敖 食を路に為り、以て餓うる者を待ちて之に食らわしむ)といい、『孟子』滕文公上に「皆衣褐、捆屨織席以為食」(皆褐を衣、屨を捆ち席を織るを以て食と為す)というなど、經書にも用例が見えている。ただ、前者は飢えた人々のために食事を作るという意味であり、後者は人々が粗末な服を着て、靴作りやむしろ織りによって食べ物に換えているという意味であつて、こことはやや意味が異なる。

經書の他にも『管子』輕重丁に「西方之氓者、……取薪蒸而為食」(西方之氓者、……取薪蒸而為食)という。これも、四方に派遣された使者がその土地の人民の暮らしを報告する中で、西方の人民が薪などを採取して食料と交換していることをいう例であり、意味の異なるもの。なお、他に南方は「田



獵而為食」（田獵して食と為す）、東方は「治葛縷而為食」（葛縷を治して食と為す）という記述がある。

詩における用例は非常に少ないが、古く烏孫公主の歌『漢書』西域伝下）に「廬為室分旃為牆、以肉為食兮酪為漿」（廬を室と為し、旃を牆と為し、肉を以て食と為し、酪を漿と為す）という例は、このことと同じく、以前とかけ離れた生活を表現するのに食事の違いを詠じた例である。この二字の並びで唐までの詩にもう一例、西晋の裴秀の「新詩」『北堂書鈔』卷四三）に「渴者易為飲、飢者易為食」（渴する者は、飲むを為し易く、飢うる者は、食らうを為し易し）とあるが、意味が異なる例。

唐詩で先立つのは一例のみ、韋応物の「擬古十二首」其七（『全唐詩』卷一八六）に「酒星非所酌、月桂不為食」（酒星 酌む所に非ず、月桂 食と為さず）という。月にある桂樹は食べられないと述べて、名声の空しさを比喻したもののようだ。

張籍の例はこれのみ。

〔丁男〕成年男子。立派な若者。

李冬生注も引く『史記』主父偃伝に「然後發天下丁男、以守北河」（然る後に天下の丁男を發して、以て北河を守らしむ）といひ、『説苑』權謀に「魯下令丁男悉發、五尺童子皆至」（魯 令を下して丁男悉く發するに、五尺の童子も皆至る）というなどの用例が見える。

唐の場合、時期によって違いがあったようだが、例えば武徳七年（六二四）の制度では二十一歳から五十九歳までが丁男とされておられ、『通典』食貨典七「大唐」の条に、「大唐武徳七年定令、男女始生為黃、四歳為小、十六為中、二十一為丁、六十為老」（大唐武徳七年令を定め、男女始めて生ずるを黃と為し、四歳を小と為し、十六を中と為し、二十一を丁と為し、六十を老と為す）という記述がある。

やはり散文的な語と思われ、唐までの詩に用例が見えず、唐に入っても先立つ例は陳注も引く儲光羲の「效古二首」其一（前出）の例のみ。先に「老幼」の例として引いた部分の直前に「婦人役州縣、丁男事征討」（婦人 州縣に役せられ、丁男 征討を事とす）という句がある。戦乱により女性はずや県の仕事にかり出され、成年男子は徴兵されたことを述べたもの。

張籍にはこの例のみだが、友人でもある同時代の王建に一例、「田家留客」『王建詩集』卷一）に「双冢直西有県路、我教丁男送君去」（双冢の直西に 県路有り、我 丁男をして君を送り去らしめん）という。田舎の人が客に向かつて「若い者に大通りまで送らせましょう」と述べている部分。

また「丁男」の語は用いられていないが、杜甫の「新安吏」〔詳註〕卷七）

に「借問新安吏、県小更無丁」（新安の吏に借問すれば、県小にして 更に丁無し）の句がある。安祿山に占領された兩京は奪還したものの、まだ反乱軍の反撃が続いていた時期に、官軍の徴兵が行われる新安の状況を詠じたもので、すでに丁男がいなくなっていたので、もっと若い男子を選ばしかなことをいう。

〔夜行〕夜に出歩く。

古く『礼記』内則に「夜行以燭、無燭則止」（夜行くには燭を以てし、燭無ければ則ち止む）という例がある。男性が家の中にいる時と女性が外出する時には、夜は明かりをとすという例。他に、『莊子』山木に「夜行昼居、戒也」（夜に行き昼に居るは、戒むるなり）といい、『管子』兵法に、「二曰、挙月章、則夜行」（二に曰く、月章を挙げれば、則ち夜行く）というなどの例がある。前者は、狐や豹が警戒して昼は潜んで夜に行動することについて用いられた例。後者は、九章と呼ばれる九種類の旗の説明で、月章という旗を掲げたら夜進撃する合図であることをいう。

また、『史記』項羽本紀に記される、「富貴不帰故郷、如衣繡夜行」（富貴にして故郷に帰らざるは、繡を衣て夜行くが如し）という項羽の言葉は、よく知られている。

詩においては、曹丕の「芙蓉池作」〔文選〕卷二二）に「乘輦夜行遊、逍遙步西園」（輦に乗りて 夜に行きて遊び、逍遙して 西園を歩む）といい、曹植の「贈徐幹」〔文選〕卷二四）に「聊且夜行遊、遊彼双闕間」（聊且か 夜に行きて遊び、彼の双闕の間に遊ぶ）という例がある。これらも含め、唐までの詩の本文の例は全て「夜行遊」の形の例であり、「遊」を伴わないのは、陶淵明の「丑歳七月赴飯還江陵夜行塗口」〔文選〕卷二六）の詩題の例のみ。

唐に入り、李嶠の「錦」〔全唐詩〕卷六〇）に「若逢楚王貴、不作夜行人」（若し楚王の貴きに逢わば、夜行の人と作らざらん）といい、李白の「江夏寄漢陽輔録事」（王琦注本卷一四）に「抽劍步霜月、夜行空庭遍」（劍を抜き 霜月に歩み、夜行きて 空庭遍し）というなど、「夜行」のみの例が見られるようになる。前者は先に引いた項羽本紀のエピソードを踏まえた表現で、項羽であれば錦を着て夜に歩くようなことはほしめないだろうと述べる。後者は安祿山の乱の時の作で、詩題にいう輔録事が夜間に劍を持って巡回し、警戒に当たっていることを表現しているようである。

杜甫には例がなく、張籍の例はこれのみ。

〔候消息〕様子をうかがう。

「消息」は情勢、状況。33 「車遥遥」(卷一)に「門前旧路久已抛、無由復得君消息」(門前の旧路 久しく已に抛たれ、復た君が消息を得るに由無し)の句があつた。その【語釈】参照。

上にさらに一字付くが、「候消息」の三字の並びで『後漢書』に見える。独行列伝の陸続の伝に、「統母遠至京師、覘候消息、獄事特急、無縁与統相聞」(統の母 遠く京師に至り、消息を覘候するも、獄事 特に急にして、統と相聞するに縁無し)という。捕らえられた陸続の母が様子をうかがつたが、厳しい詮議が行われていて連絡が取れなかったという例。「覘」もうかがうの意。

山に逃れた人々の状況を詠う、四句で一まとまりになつた中間部分の前半二句。前の句で山中の不自由な生活が食と住の面から描かれた後、後の句では若者が夜に偵察に行く様子が詠じられる。

「重巖為屋」の表現、先に記した解釈が正しければ、建物の基本である屋根すら岩であることをいう。あずまやなどを考えても、壁や床はそのままであつても屋根だけは作るのが建物というものである。しかし、材料や工具がないばかりでなく、隠れた生活であるから、屋根を葺けば人目につくこともあつて、屋根すら作れないのであろう。それと句中対をなした「橡為食」の表現、秋の木の実他にも色々ある中から、どんぐりが選ばれたのは、非常用の食料が普段の食料になつていてることを表現しようとしたのであろう。どんぐりには渋みがあり、それを抜くには流水に浸す必要があるということだが、火を使わないので人目に立たないということもあるのかもしれない。後の句、若者が夜、偵察に向かうことをいう。明るいうちに行動しては発見される危険があるから、夜に偵察に行き、夜に山を上り下りするから、若者が選ばれるということであろう。その若者が手に入れた情報が次の二句で詠じられる。

### 7・8 聞道官軍猶掠人、旧里如今歸未得

〔聞道〕聞くとことよると。

この二字の並びは古書にも多く見えるが、例えば『論語』里仁に「朝聞道、夕死可矣」(朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり)という有名な言葉があるように、いずれも道を聞くとことよる例である。「聞くとことよると」の意味で使われるようになったのは梁くらいからのようで、徐悱の妻(劉令嫺)の「答唐孀七夕所穿針」(『玉臺新詠』卷六)に「雖言未相識、聞道出良家」(未だ相識らずと云うと雖も、聞道く 良家より出づと)と見える。詩題に

という唐孀が良家の出身だと聞いていると表現したもの。なお、「徐悱妻」の「悱」字に誤りがあるとも、王叔英の妻の劉氏(劉令嫺と同じく劉孝綽の妹)の作であるとする説もある。唐までの詩においては、他に庾信の「擬詠懷詩二十七首」其七一(『集注』卷三)に「聞道樓船戰、今年不解圍」(聞道く 樓船戰い、今年 囲みを解かずと)というなどの例が見られる。

唐に入つて非常に多くの用例があるうち、張説の「送梁六自洞庭山作」(『全唐詩』卷八九)に「聞道神仙不可接、心随湖水共悠悠」(聞道く 神仙は接すべからずと、心は湖水に随いて 共に悠悠たり)といい、岑参の「和祠部王員外雪後早朝即事」(『校注』卷四)に「聞道仙郎歌白雪、由来此曲和人稀」(聞道く 仙郎 白雪を歌うと、由来 此の曲 和する人 稀なり)という例は、ともに『唐詩選』に収められてよく知られる例。

杜甫にも二十三例と多くの例があるうち、「三絶句」其三(『詳註』卷一四)に「聞道殺人漢水上、婦女多在官軍中」(聞道く 人を殺す 漢水の上、婦女 多く官軍の中に在り)という例は、こと同じく、異民族の軍だけでなく官軍も横暴であることを詠じた例、罪のない人々を殺し女性を掠めることを述べている。

張籍に他に二例、115 「酬韓祭酒雨中見寄」(卷二)に「聞道韓夫子、還同此寂寥」(聞道く 韓夫子、還た此の寂寥を同じゅうすと)というのは、韓愈の原唱が雨の寂しさを詠じたことを指している例、310 「送僧往金州」(卷六。なお、底本は「全州」に作るが、諸注釈書が「金州」に作るテキストによるのに従つた)に「聞道溪陰山水好、師行一一遍經過」(聞道く 溪陰は山水好しと、師 行きて 一一 遍く經過せん)というのは、僧の向かう金州は、山水が美しいと聞いている、と述べる例。

〔官軍猶掠人〕官軍がまだ人をさらっている。

「官軍」は官軍、政府側の軍。30 「將軍行」(卷二)に「辺人親戚曾戰没、今逐官軍收旧骨」(辺人の親戚 曾て戰没し、今 官軍を逐いて 旧骨を収む)の句が見えた。その【語釈】参照。

「掠人」の語は用例が少なく、『宋書』後廢帝本紀の元徽五年(四七七)の条に引く、後廢帝の死後に出された皇太后の令に「奪人子女、掠人財物、方策所不書、振古所未聞」(人の子女を奪い、人の財物を掠むるは、方策の書せざる所、振古 未だ聞かざる所なり)といい、『文心雕龍』指瑕に「若掠人美辞、以為己力、宝玉大弓、終非其有」(若し人の美辞を掠めて、以て己の力と為さば、宝玉大弓も、終に其の有に非ず)という辺りが古い例のようである。ただし、ともに「掠人〇」(人の〇を掠む)の形の例で、前者は暴君として知られる後廢帝が、生前他人の財物を盗んでいたことを表現した例、

後者は他人の文章を剽窃することを表現した例。

唐までの詩に見えず、『全唐詩』にもこの例のみ。

ここで人を連れ去ることについて、李樹政注は『資治通鑑』卷二一七、玄宗天宝十四載（七五五）の条に、「封常清所募兵皆白徒、未更訓練、屯武牢以拒賊、賊以鉄騎蹂之、官軍大敗。常清収余衆、戰於葵園、又敗。戰上東門内、又敗。丁酉、祿山陷東京、賊鼓譟自四門入、縦兵殺掠。常清戰於都亭驛、又敗。退守宣仁門、又敗、乃自苑西壞牆西走」（封常清の募る所の兵は皆白徒にして、未だ訓練を更ざれば、武牢に屯して以て賊を拒むも、賊、鉄騎を以て之を蹂み、官軍大いに敗る。常清、余衆を収め、葵園に戦うも、又敗る。上東門内に戦うも、又敗る。丁酉、祿山、東京を陥れ、賊、鼓譟して四門より入り、兵を縦にして殺掠す。常清、都亭驛に戦い、又敗る。退きて宣仁門を守るも、又敗れ、乃ち苑西の壞牆より西に走る）というのを引き、敗残兵となった官軍の規律が緩んで、あちこちで人をさらうことをいうと解釈している。

一方、徐余注は、丁男をさらって兵士にすることと注している。徐余注は詩の背景として、「新安吏」（前出）と同時期に作られた杜甫の「石壕吏」（『詳註』卷七）に「暮投石壕村、有吏夜捉人」（暮れに、石壕村に投ずれば、吏の夜に人を捉うる有り）というのを引いており、同じ状況を詠じたものと解釈したものであろうか。ただし「石壕吏」は、子供三人が徴兵されて若者がいなくなった家で、老翁が逃げて残された老婆が「飯炊きにでも」と志願して連行されるという内容である。

細かいニュアンスの違いであって、どちらの解釈も可能であろうが、後者の解釈の場合、子供や老人も無理に連行するにせよ、男性だけに関係することになるのに対し、前者の解釈の場合、若い女性は兵士の慰み者となり、老婆も「石壕吏」のように飯炊き女にされ、安全な者はいないことになり、より悲惨な状況といえるだろう。

なお、史実に関していえば、董卓の逃亡後に洛陽に入城したのは、各地の武將達の連合軍であり、非正規軍ということになる。それがここで「官軍」に変えられているのは、諸注に指摘されるような、安祿山の乱等の唐代の事件を踏まえたものであろう。

〔旧里〕もと住んでいたところ。郷里。

古書には見えない表現であるが、古い賦の中に見え、張衡の「南都賦」（『文選』卷四）に「真人南巡、觀旧里焉」（真人、南巡し、旧里を觀んことを）という表現がある。これは、高祖や光武帝の出身地である南都・宛に天子が行幸することを願った部分。帝室の父祖の地である宛のことを「旧里」と呼

んでいる。

唐までの詩にも多くの例が見え、陸機「百年歌」十首其八（『藝文類聚』卷四三）に「安車駟馬入旧里、樂事告終憂事始」（安車駟馬もて、旧里に入れば、樂事、終わりを告げ、憂事、始まる）といい、梁の簡文帝の「從軍行」（『藝文類聚』卷四一）に「何時反旧里、遙見下機来」（何れの時か、旧里に反り、遙かに、機を下り来たるを見ん）というなどの例がある。前者は年を取って故郷に帰ることを表現した例、後者は從軍兵士の望郷の思いが詠じられる中に用いられている。

唐詩にも、陳注も引く張九齡の「与弟遊家園」（『全唐詩』卷四九）に「林鳥飛旧里、園果讓新秋」（林鳥、旧里に飛び、園果、新秋に讓る）といい、賈至の「送夏侯子之江夏」（同前卷二三三）に「羨君還旧里、帰念独悠哉」（君が、旧里に還るを羨み、帰念、独り悠なるかな）というなど、多くの例がある。前者は詩題に言う、弟とともに帰った故郷の韶州曲江（広東省韶関市）を指しており、後者は詩題に言う夏侯某が帰る江夏（湖北省武漢市）を指している。

杜甫には例がなく、張籍にはもう一例、110「送人任濟陰」（卷二）に、「將書報旧里、留褐与諸生」（書を將て、旧里に報じ、褐を留めて、諸生に与う）という。濟陰への赴任が決まったことを、手紙で郷里の人々に知らせるといふ例。

〔如今歸未得〕今もなお、帰ることができない。

〔如今〕は、いま、現在。

この二字の並びは、『毛詩』小雅「何人斯」に「始者不如今、云不我可」（始めは今かららず、云に我を可ならずとす）というなど、經書などにも例が見えるが、意味が異なっている。この意味の古い例とされるのが、『史記』項羽本紀に「如今人方為刀俎、我為魚肉、何辭為」（如今、人は方に刀俎為り、我は魚肉為り。何ぞ辞するを為さん）という例である。有名な鴻門の会の場面において、劉邦を逃がす際の樊噲のことば。

唐までの詩においては、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩八首」其五「劉楨」（『文選』卷三〇）に「辰事既難諧、歛願如今并」（辰事、既に諧え難きも、歛願、如今に并わす）といい、梁の劉孝勝の「冬日家園別陽羨始興詩」（『藝文類聚』卷二一）に「如今腰艾綬、東南各殊挙」（如今、艾綬を腰にし、東南、各おの殊に挙がる）というなどの例がある。前者では、なかなか手に入れない良辰・樂事を併せ持っていることを述べる部分に用いられており、後者では、命により印綬を帯びて赴任するために別れることを述べた部分に用いられている。



唐に入り、初唐には例が見えず、盛唐になって、王維の「崔興宗写真」（趙注本卷一三）に「画君年少時、如今君已老」（君が年少の時を画く、如今君は已に老いたり）といい、張謂の「贈喬琳」（『全唐詩』卷一九七。なお卷二五六は劉熊虚の作とする）に「如今五侯不愛客、羨君不問五侯宅」（如今五侯 客を愛せず、羨む 君が五侯の宅を問わざるを）というなどの例が見えるようになる。前者は若い頃の肖像画と現在の姿を比較する中に用いられた例、後者は『唐詩選』に収められる有名な例で、現在の世俗の人と喬琳（『唐詩選』通行本は喬林に作る）とを比較する中に用いられている。

杜甫には文字の異なる例を含めて九例。そのうち、「天育驃図歌」（『詳註』卷四）に「如今豈無驃裏與驃驪、時無王良伯樂死即休」（如今 豈に驃裏と驃驪と無からんや、時に王良・伯樂無く 死して即ち休す）という例は、楽府における例。名馬はいてもそれを見分けられる人物がいなことを詠じた例。

張籍に他に十二例。一例を挙げれば、313 「憶故州」（卷六）に「如今身是他州客、每見青山億旧居」（如今 身は是れ 他州の客、青山を見る毎に旧居を億う）という。望郷の思いを詠じた詩で、故郷を離れている現在を「如今」と強調している。

「婦未得」の表現は、6 「行路難」（卷一）に「湘東行人長嘆息、十年離家婦未得」（湘東の行人 長く嘆息す、十年 家を離れて 帰ること未だ得ず）という表現があった。

「不得婦」の三字の形であれば、「婦すことができない」の意味ではあるが、『戦国策』楚策二に「予我東地五百里、乃婦子、子不予我、不得婦」（我に東地五百里を予えば、乃ち子を婦し、子 我に予えずんば、婦すを得ず）という古い用例があり、また、詩においても、曹植の「情詩」（『文選』卷二九）に「眇眇客行士、遙役不得婦」（眇眇たる 客行の士、遙役して 婦を得ず）といい、劉宋の呉邁遠の「長別離」（『玉臺新詠』卷四）に「楚有扛鼎士、出門不得婦」（楚に鼎を扛ぐるの士有り、門を出でて 婦を得ず）というなど、帰れないという意味の用例が見られるのだが、「婦未得」の形の古い例は未見。

唐になって、陶峴の「西塞山下迴舟作」（『全唐詩』卷一二四）に「白髮數莖婦未得、青山一望計還成」（白髮 數莖 婦ること未だ得ず、青山 一望計還た成る）といい、皇甫曾の「送鄭秀才貢舉」（『全唐詩』卷二一〇）に「自憐婦未得、相送一勞歌」（自ら憐れむ 帰ること未だ得ざるを、相送りて 一たび歌を勞す）というなどの例が見られるようになる。

杜甫に二例あるうち、「天辺行」（『詳註』卷一四）に「天辺老人婦未得、日暮東臨大江哭」（天辺の老人 帰ること未だ得ず、日暮 東のかた 大江

に臨んで哭す）という例は、楽府における例で、自分自身を「天辺の老人」と呼んで、望郷の思いを詠じる中に用いられている。

張籍にこの詩と6 「行路難」（前出）の他に一例、472 「夏日閑居」（卷八）に「自憐婦未得、猶寄在班行」（自ら憐れむ 帰ること未だ得ず、猶お寄りに 班行に在るを）と、故郷に帰れないまま宮仕えをする悲しみを詠じている。

山に逃れた人々の状況を歌う、四句で一まとまりになった中間部分の前半二句。前の二句を承けて、夜に偵察に出かけた若者が仕入れた情報と、それがもたらした結果を詠じた二句。前の句の「聞説」の二字、直接の見聞でないところがリアルで臨場感にあふれている。「掠人」の状況なので、うかつに近づけない状況なのであろう。情報提供者は、「掠人」から命からがら逃げ出してきた人々辺りが想定されているだろうか。

そして、ここでもたらされた情報は衝撃的なものであった。官軍が、董卓が去った今もなお、人をさらっているというものだったのである。災いをもたらすのは董卓の軍ばかりでなく、官軍も同じだったのだ。官軍が来たからといって、安心はできない。すなわち後の句の「旧里如今婦未得」という結論に至るのである。

「如今」の語、やはり一人称的であり、現実味にあふれた表現となっている。現在が強調されることよって、帰れない暮らしが長引いていることが実感されるが、しかもこの詩の中では、語り手は帰れないまま終わってしまう。それが最後の二句の悲痛な叫びに結びついていくのである。

#### 9・10 董逃行、漢家幾時重太平

【董逃行】題解 参照。後に見るように元稹は実際に董卓が逃げたことを詩中に詠ずるが、ここでは「行」の文字を伴っており、曲名として用いられていると思われる。李樹政注は「董逃行の歌を思い出せ」と訳している。

「漢家幾時重太平」漢の国はいつになったら再び平和になるのだろうか。

「漢家」は漢の国家、漢の王朝。34 「妾薄命」（卷一）に「漢家天子平四夷、護羌都尉裏戸婦」（漢家の天子 四夷を平らぐれば、護羌都尉 戸を裏んで帰る）の句があり、414 「隴頭行」（卷七）に「誰能還使李輕車、重取涼州屬漢家」（誰か能く還た李輕車をして、重ねて涼州を取りて漢家に属さしめん）と見えた。それぞれの【語釈】参照。

「幾時」、「どのくらい」と時間の長さを尋ねる用法と「いつ」と時点を尋

ねる用法があるが、ここでは後者。14 「別離曲」(巻一)に「行人結束して門を出でて去る、幾時か 更に踏む 門前の路」(行人結束出門去、幾時更踏門前路)の句があり、36 「遠別離」(同前)に「幾時断得城南陌、勿使居人有行役」(幾時か 城南の陌を断じ得て、居人をして行役有らしむること勿からん)の句があったが、ともに「いつ」の意で用いられていた。それぞれの【語釈】参照。

「太平」は常見の語。古く『礼記』仲尼燕居に「君子力此二者、以南面而立、夫是以天下太平也」(君子 此の二者に力めて、以て南面して立ち、夫れ是を以て天下太平なり)という。礼と楽とに努めた君子が即位すると天下が太平になるという部分。また、『莊子』天道に「知謀不用、必歸其天、此之謂太平。治之至也」(知謀 用いずして、必ず其の天に帰す、此を之れ太平と謂う。治の至りなり)という。無為の治による理想的な状態を「太平」と表現している。

唐までの詩においても、古楽府「鷄鳴」古辭(『樂府詩集』卷二八)に「蕩子何所之、天下方太平」(蕩子 何の之く所ぞ、天下 方に太平なり)とい、陳注も引く曹操の「対酒」(『宋書』樂志三)に、「対酒歌、太平時、吏不呼門」(酒に対して歌う、太平の時、吏は門に呼ばず)の句があるなど、古くから多くの用例がある。

唐詩においても、袁朗の「賦飲馬長城窟」(『全唐詩』卷三〇)に「太平今若斯、汗馬竟無施」(太平なること 今斯くの若し、汗馬 竟に施す無し)と兵馬の不要になった状況を詠じ、李白の「春日行」(王琦注本卷三)に「万姓聚舞歌太平、我無為、人自寧」(万姓聚舞して 太平を歌い、我 無為にして、人自ずから寧らかなり)と太平を喜ぶ人々を詠するなど、多くの用例がある。

杜甫には詩中に二例、「中夜」(『詳註』卷一七)に「胡雛負恩沢、嗟爾太平人」(胡雛 恩沢に負く、嗟く 爾 太平の人)といい、「上水遣懷」(同卷二二)に「我衰太平時、身病戎馬後」(我は衰う 太平の時、身は病む戎馬の後)という。前者はかつて太平を謳歌した人民が安祿山の反乱に苦しむことを述べる中で用いた例、後者は反乱前の太平の時代に衰え始めたことを述べた例。

張籍の例はこのみ。

なお、「重太平」の形でも先立つ例が一例、崔日用「饒唐永昌」(『全唐詩』卷四六)に「洛陽桴鼓今不鳴、朝野咸推重太平」(洛陽の桴鼓 今は鳴らず、朝野 咸推す 重ねて太平なるを)という。

末尾の二句、一韻で一まとまり、前の部分を承けて、平和を願う悲痛な思

いが詠じられて結びとなっている。

ここで注目されるのは、前の句で曲名「董逃行」がそのまま用いられていることである。曲名をそのまま用いているのには、その曲名の持つ意味を強調する意図があるのではないか。つまり、「董逃行」董卓が逃げるうた」という曲名だが、実際は、董卓が逃げる際に火を放ったのは、ほんの発端に過ぎなかったのである。董卓という暴虐の限りを尽くした人物の逃亡は、人々の苦難の終わりではなく、そこから街を焼かれ家を追われて山中でつらい暮らしをする日々が始まった。そしてそれは「如今」も続いているのである。

最後の句、「漢家」という表現が用いられているのは、恐らく第二句の「我天子」の表現と呼応している。官軍の横暴に苦しみながらも、人々は「我天子」「漢家」を慕っているのである。自分の愛する国に平和が再び訪れることを強く願って、詩は結ばれる。そしてそこには恐らく、安史の乱の後、不安定な状況が続いている唐に、再び平和が訪れることを願う張籍の思いが重ねられている。

### 【補】

#### 一 張籍「董逃行」の構成

この詩は換韻によって四つに分けられる。

- 1・2 乱兵により洛陽城が焼かれる
- 3・4 焼かれたために人々が山中に逃れる
- 5・8 山中に逃れた人々を待っていた現実
- 9・10 人々の切なる願い

これら四つの部分は、それぞれがいわゆる起承転結に該当しており、巧みな構成といえるのではないだろうか。七言句が大半を占める中、末尾の二句のみが三言句と七言句で構成されており、内容の痛切さの面のみならず、形式の面からも深く心に刻みつけられる結びとなっている。これまでの張籍の楽府にもしばしば見られた、印象的な末尾の二句を工夫する例の一つといえるようか。

#### 二 元稹「董逃行」との比較

『樂府詩集』には、先立つ作品として雑言体の「董逃行」古辭と、傅玄の

「董逃行歴九秋篇」(六言) および陸機の作(六言)を取めているが、【題解】に引く楽府の解題書が指摘する通り、古辞は仙山への登山と、菓を得て君主を長生させたいという願いを詠じるもの、傅玄の作は夫と離れている妻の嘆きを詠じるもの、陸機の作は時の推移の速さを嘆き行楽を勧めるものであり、長谷川真史氏前掲論文も指摘する通り、直接の影響関係はうかがえない(古辞は小尾郊一・岡村貞雄『古楽府』(東海大学出版会、一九八〇年)、陸機のものは佐藤利行『陸士衡詩集』(白帝社、二〇〇一年)、傅玄のものは『玉臺新詠』の各種訳本に訳注が収められているので、詳細はそちらを参照いただきたい)。謝靈運の作は楽府の解題書の中に「春虹散彩銀河」の一句を残すのみであるが、これが六言であるから、同系統の作品と思われ、その内容も、解題書によれば陸機の詩と同じ系統だったようである。

強いていえば、古辞が天子の長生を願ってその敬愛ぶりがうかがえるのが、この詩の「我天子」といった敬愛の表現と関連がある可能性もあるが、多くの詩に見られるものであることを考えれば、影響があるとは言いがたいであろう。用語の上でも、前代の同題楽府との重複は見られないようである。

この他、後漢の童謡は先の解題の中に引かれていたが、先も触れたように、天子の寵愛を得た高位のものが都を振り返って嘆くという点に、董卓の人生との関連がうかがえるが、董卓逃亡後の洛陽を描いたこの詩とは、あまり関連がなさそうである。

さらに、魏の曹操に「董卓歌(辞)」(『三国志』魏書袁紹伝の裴松之注に引く『英雄記』)というものがあり、これについて、丁福保『全漢三国晋南北朝詩』全三国詩卷一(一九六八年藝文印書館版による)・夏伝才『曹操集注』(中州古籍出版社、一九八六年)等は「董逃歌」の誤りであるとしている。そうであるとすれば董卓と同時代人による貴重な資料ということになるが、実際は次の通りの内容で、董卓とは関わりがない。

德行不虧缺 德行は虧缺せざるも  
 变故自難常 变故 自ずから常なり難し  
 鄭康成行酒 鄭康成は酒を行  
 伏地氣絶 地に伏して 氣絶す  
 郭景図命尽於園桑 郭景図は 命 園桑に尽く

「徳は十全に備えていても、変化や事故が不意に起こるもので、鄭玄は宴会の途中で氣絶したし、郭景図は桑畑で突然死した」という内容である。鄭玄が氣絶したという故事は残されていないようであり、郭景図という人物も未詳のようである。世の中のこととは予測しがたいといいたいようだが、張籍

の「董逃行」との関連は薄いと考えてよさそうである。

以上のように見ると、やはり重要なのは同時代の元稹の作との比較ということになる。これについては長谷川真史氏前掲論文に詳しく、元稹の作にない「衆庶への同情」という視点が見られること、それが杜甫の影響下にあることなど、重要な指摘が多くなされているが、ここではそれを少し補足しておくこととしたい。なお、長谷川氏は元稹のものが先で張籍のものが後であるとする立場から比較しておられるが、先述の通り、非常に早い時期の作であるという説もあるので、先後不明ということと比べることとしたい。

元稹「董逃行」(『元稹集』卷二三)

董逃董逃董卓逃 董逃ぐ 董卓逃ぐ  
 措鏗戈甲声劳嘈 措鏗たる戈甲 声劳嘈たり  
 剌剌深臍脂焰焰 剌剌たる深き臍 脂焰焰たり  
 人皆数嘆曰 人皆数しば嘆じて曰く  
 爾独不憶年年取我身上膏 爾独り年年我が身上の膏を取るを憶わず、と  
 膏銷骨尽煙火死 膏銷え 骨尽き 煙火死え  
 長安城中賊毛起 長安城中 賊毛 起くる  
 城門四走公卿士 城門 四に走る 公卿の士  
 走劬劉虞作天子 走りて劉虞に劬む 天子と作るを  
 劉虞不敢作天子 劉虞 敢て天子と作らず  
 曹瞞篡乱從此始 曹瞞の篡乱 此より始まる  
 董逃董逃人莫喜 董逃ぐ 人喜ぶ莫かれ  
 勝負相環相枕倚 勝負は相環り 相枕倚す  
 縫綴難成裁破易 縫綴は成し難く 裁破は易し  
 何況曲針不能伸巧指 何况んや 曲針は巧指を伸ばす能わず  
 欲学裁縫須准擬 裁縫を学ばんと欲して 准擬を須つをや

大意は次のようなところか。——董卓が逃げてゆく。ガチャガチャと武器や鎧が鳴り、音が混じり合う。深くくぼんだ董卓のへそで、脂が炎をあげて燃え上がる。人々はみな言う「お前は毎年私の体の脂をしばり取っていたことなど考えたこともなかったろう。」脂が尽き骨もなくなつて火が消えると、長安の街には賊どもが出現し、城門から公卿の士が四方へ逃げ出した。逃げながら劉虞に天子となるよう勧めたが、そうしなかったため、曹操(幼名阿瞞)の篡奪が始まった。董卓が逃げるが、喜んではいけな、勝敗というのは巡り巡ってくるものだから。破るのは簡単だが、縫い合わせるの難しいものだ。まして曲がった針では、裁縫の腕前も發揮できず、裁縫を学



ぼうとするのに準備が必要となるのだから、なおさらだ。

両者の共通点としては、やはり、董卓が逃げたのが終わりではなく、始まりなのだと言調されていることが挙げられよう。長谷川氏の指摘する通り、元種の作は民衆の苦しみではなく、歴史の展開の方に主に目を向けているが、元種も董卓死後のことを中心に詠じているといえよう。

相違点としては、「我天子」の語を用い官軍の様子が伝聞で記されるなど、張籍の詩が一人称で描かれており、臨場感を出そうとしているのに対し、元種のものはいわゆる神の視点の三人称が用いられている。それにより、董卓の死から民衆の反応、賊の蜂起、公卿の逃走、政権の行方などが滑らかに描かれていく。そして、最後の部分では、道理を語るのにふさわしい語り手として登場し、説得力をもって読者に哲理を説く。

恐らく両者の叙述の目的は異なっており、張籍は読者の共感を得ることを主眼とし、元種は読者に道理を主張することを主眼としていたのである。そしてそれぞれが、目的にふさわしい手法をとったということであると思われる。

### 三 董卓を詠ずる詩について

最後に、「董逃行」の楽府題が元種・張籍に至って突然変化するという流れになっているのを補う意味で、董卓を詠じた詩の流れについて確認しておこう。

董卓という人物は当時の人々に強いインパクトを残した人物だったらしく、同時代人が詩の中に名前を詠じている。

いくつかを挙げれば、孔融「六言詩三首」其一（『古文苑』巻四）に「漢家中葉道微、董卓作乱乘衰」（漢家 中葉にして 道 微となり、董卓 乱を作し 衰うるに乘ず）といい、蔡琰「悲憤詩」（『後漢書』列女、董祀妻蔡琰伝）に「漢季失權柄、董卓乱天常」（漢の季 權柄を失い、董卓 天常を乱す）という句がある。また、韋昭の手になる「呉鼓吹曲十二篇」の「漢之季」（『宋書』樂志四）にも「漢之季、董卓乱」（漢の季に、董卓乱す）という。

しかしこの後、六朝時代には、魏の武帝や諸葛孔明などに焦点を当てて三国の歴史を詠ずる詩は散見されるものの、董卓のことを取り挙げて詠ずることはほとんどなかったようで、後漢末の一連の混乱の描写の中に埋もれていたようである。

その間の例外的な作品として、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩八首」其三「陳

琳」（『文選』巻三〇）に「董氏淪関西、袁家擁河北」（董氏 関西を淪め、袁家 河北を擁す）という例が挙げられる。これは詩題に明らかなように、陳琳に擬作したものであり、当時の詩人の句作りを意識したものといえるだろう。あるいは陳琳の作に董卓を詠じたものがあり、それに基づいたものかもしれない。

董卓がほとんど詩に詠じられないという状況は初唐の間も変わらなかったようで、管見の及ぶ限りでは、沈佺期の「赦到不得帰、題江上石」（『全唐詩』巻九七）に「五方思寄刃、万姓喜然臍」（五方 刃を寄するを思い、万姓 臍を然やすを喜ぶ）と、元種も用いていた、董卓の死後へそこに灯した火が数日間燃え続けた故事を詠じる例が見えるくらいのものである。この例では武后に寵愛された張易之・張昌宗兄弟を董卓に喩えているとされる。

こういった状況の後、安史の乱を経て、久しぶりに董卓に注目した詩人が、杜甫であった。杜甫には「鄭駙馬池台、喜遇鄭広文同飲」（『詳註』巻五）に「然臍鄆鳩敗、握節漢臣回」（臍を然やして 鄆鳩敗れ、節を握りて 漢臣回る）といい、また「寄岳州賈司馬六丈・巴州嚴八使君兩閣老五十韻」（同巻八）に「小儒輕董卓、有識笑符堅」（小儒 董卓を軽んじ、有識 符堅を笑う）という例がある。いずれも董卓の故事を用いて安禄山のことを詠じたもので、董卓は、安禄山との類似性によって再び注目を浴び、詩に詠じられるようになったといえるだろう。

その後、大曆期には例が見られないようだが、元和期の詩人の作には、多くの用例が見えるようになり、張籍と元種の「董逃行」の他に、以下のような例が見える。

まず劉禹錫の「城西行」（『箋証』巻二五）に「守吏能然董卓臍、飢鳥來覘桓玄目」（守吏 能く然やす 董卓の臍、飢鳥 来たり覘う 桓玄の目）の句がある。これは反乱を起こして処刑された劉闢・李錡・呉元済の三人を董卓に喩えたものとされる。

また、呂温の「題陽人城」（『全唐詩』巻三七一）に「天下起兵誅董卓、長沙子弟最先來」（天下 兵を起こして 董卓を誅せんとし、長沙の子弟 最も先に來たる）の句がある。この詩は詠史詩で、陽人城は長沙太守だった孫堅が董卓軍の武將を敗った場所。すなわちここでは比喩ではなく董卓自身を指して用いられている。

さらに李賀の「送秦光禄北征」（王琦『李長吉歌詩彙解』巻三）には「屢断呼韓頸、曾燃董卓臍」（屢は断つ 呼韓の頸、曾て燃やす 董卓の臍）の句がある。詩題にいう秦光禄の過去の武功を表現した例で、秦光禄という人物が未詳のため、董卓が誰を比喩しているのか分からない。ただ、時代が離れすぎているので、安禄山ということはないと思われる。

以上のように、元和期の詩人たちは安祿山に限らず、様々な形で詩に詠み込むようになってきており、杜甫によつて再び用いられるようになった董卓の表現が、すっかり定着していることがうかがえる。劉猛・元稹・張籍の「董逃行」はそのような流れの中で生み出されたものといえるだろう。(橘)

## 419 江村行

【題解】  
川辺の村の歌

「江村行」は、『樂府詩集』には収録されておらず、張籍が創作した新しい樂府題。唐より前の詩題に「江村」を含むものが見当たらず、唐に入ってから有名な杜甫「江村」(『詳注』巻九)が最も早い例のようである。「江村」は、浣花溪の流れる江村の穏やかな夏の風景の中、家族と幸せに暮らす生活の充足を詠む。

杜甫「江村」

- |           |                 |
|-----------|-----------------|
| 1 清江一曲抱村流 | 清江一曲 村を抱きて流る    |
| 2 長夏江村事事幽 | 長夏江村 事事幽なり      |
| 3 自去自来堂上燕 | 自ら去り自ら来る 堂上の燕   |
| 4 相親相近水中鷗 | 相親しみ相近づく 水中の鷗   |
| 5 老妻画紙為棋局 | 老妻 紙に画きて棋局を為し   |
| 6 稚子敲針作釣鉤 | 稚子 針を敲いて釣鉤を作る   |
| 7 但有故人供禄米 | 但だ故人の禄米を供する有り   |
| 8 微躯此外更何求 | 微躯 此の外 更に何をか求めん |

また杜甫には他に「春日江村五首」(『詳注』巻一四)がある。いま其の一のみをあげておく。

杜甫「春日江村五首」其一

- |         |             |
|---------|-------------|
| 1 農務村村急 | 農務 村村 急にして  |
| 2 春流岸岸深 | 春流 岸岸 深し    |
| 3 乾坤万里眼 | 乾坤 万里の眼     |
| 4 時序百年心 | 時序 百年の心     |
| 5 茅屋還堪賦 | 茅屋 還た賦するに堪え |
| 6 桃源自可尋 | 桃源 自ら尋ぬべし   |

- |         |            |
|---------|------------|
| 7 艱難昧生理 | 艱難 生理に昧く   |
| 8 飄泊到如今 | 飄泊 今の如きに至る |

この詩は冒頭こそ春に農事が多忙になること、また春の水が満ちあふれるさまを描くが、その後は現在の自らの思いが述べられている。「乾坤万里眼、時序百年心」は農事の忙しさから解放されて旅に出たいと思う心と、時節の推移に身の行く末が思われることを言うのである。後半は、そのような思いを抱えつつも、今のこの浣花溪での生活に充足を求めようとしている。

「春日江村五首」は、其二では蜀での自由きままな生活を詠み、其三では思いがけず推薦されて官を授けられたこと、其四では幕府の勤めになじめず、草堂に帰る楽しみを詠み、其五では王粲と賈誼に自らを重ねて現在の自分の境遇について思いを述べており、以後は農事については全く触れられてない。杜甫には他にも「季秋江村」(『詳注』巻二〇)があり、これは夔州の瀘西に移り住んだ大暦二年(七六七)の作とされ、当地の秋の江村の景を詠み、貧しくとも自らこの地での生活を樂しむ思いを詠む。

その他、顧況に「江村乱後」(『全唐詩』巻二九二)、司空曙に「江村即事」(『全唐詩』巻二九二)があり、前者は夕暮れに江村に人を訪ねて、その住居の閑寂として春の訪れを感じさせる様子を詠み、後者は江村の穏やかな夜の景を描いており、いずれも静かで穏やかな江村の様子を外側から描いている。

詩中に「江村」を用いる例は、唐より前に二例あり、謝朓「高齋視事詩」(『校注』巻二)に「曖曖江村見、離離海樹出」(曖曖として江村見れ、離離として海樹出づ)とあり、梁・虞騫「遊湖山悲古塚詩」(『古詩紀』巻九一)に「長林帶朝夕、孤嶺枕江村」(長林 朝夕を帯び、孤嶺 江村を枕とす)とある。前者は春に霧の向こうに遠く見える水辺の村を詠み、後者は山のふもとに見える水辺の村を詠む。いずれも水辺の村を遠望することを詠み、江村の内部への視線はまだうかがえない。

唐に入って詩の用例も多くなり、川辺の風景として、またその地が朝廷の生活から離れた場所であることを象徴するものとして用いられる。張九齡「巡屬県道中作」(『全唐詩』巻四七)に「再入江村道、永懷山藪情」(再び入る江村の道、永く懐う 山藪の情)、孟浩然「夜歸鹿門山歌」(『全唐詩』巻一五九)に「人隨沙路向江村、余亦乘舟歸鹿門」(人は沙路に随いて江村に向かい、余も亦た舟に乗りて鹿門に歸る)とある。前者は貧賤から身を起こした自分が再び官吏として江村に帰ってきた感慨を詠み、後者は鹿門山に歸る途次の川辺の村の様子を描き、人々が川沿いの砂地を通って村へと帰って行く様子を詠む。

杜甫の用例は詩中に用いるものが九例あり、彼が好んで用いた詩語のようである。杜甫「江村」(既引)に「清江一曲抱村流、長夏江村事事幽」(清江一曲 村を抱きて流れ、長夏江村 事事幽なり)とあり、川辺の村の夏は何事もなくのどかであることを言い、「暇日小園散病、將種秋菜、督勸耕牛、兼書觸目」(『詳注』巻一九)に「江村意自放、林木心所欣」(江村 意は自ら放たれ、林木 心の欣ぶ所)とあり、江村は思いが解放される場所であるとする。

張籍の「江村」の用例は、詩題ではこの一例のみ、詩中に用いる例は一例、38「江南曲」(巻二)に「江村亥日長為市、落帆度橋來浦裏」(江村 亥日 長に市を為し、帆を落ろし 橋を度りて 浦裏に來たる)とあり、これは市を訪れる舟の賑わいを詠み、江村の賑わいを詠むところが、それ以前の「江村」のイメージとは異なる。

このように張籍以前の「江村」は、都や朝廷の喧噪から離れた場所であり、のどかで心休まる場所としてイメージされていたようである。張籍は、その「江村」の内側に視線を向け、水田を耕作して苗を植えるまでの農村の人々の苦勞を描く。

農夫の苦勞を詠む詩としては、李紳「憫農二首」(『全唐詩』卷四八三)が有名であり、張籍も5「野老歌」(巻二)において、山中の數畝の田を耕して暮らす老人の苦しい生活を詠んでいる。このように貧農の生活を描き、現在の政治状況を批判することは中唐期の諷諭詩の重要なテーマの一つである。李樹政は、張籍が幼い頃に和州(現在の安徽省和県)で育ち、そこは長江の岸に近く、また彼は祖籍である吳郡(現在の江蘇省蘇州)を訪れたこともあり、その江南の水郷の美しい風景は彼に深い印象を与えていたこと、また99「送從弟戴玄在蘇州」(巻九)に「江天詩景好、迴日莫含餘」(江天 詩景に好く、迴日 餘からしむる莫かれ)とあるように蘇州を賞賛していることから、彼はただ故郷を愛していただけではなく、長江下流域の三角州の農村生活を十分に熟知していたと言う。そしてこの詩は水田耕作と採桑養蚕のことを描写し、豊かな江南の水郷の特色を表したものであると言う。

また増田清秀氏は、張籍の「江村行」は「水田地帯における農事の行事を寫生したもの」であり、「田植期に入りて、灌溉、整地、假小舎作り、早苗の移植等、作業を轉じてゆく農夫の動きを繪畫的に描いている」とする(同氏『樂府の歴史的研究』創文社、一九七五、四〇一頁)。

### 【本文】

1 南塘水深蘆筍齊 南塘 水深くして 蘆筍齊しく

- 2 下田種稻不作畦 下田 稻を種うるに 畦を作らず  
 3 耕場磷磷在水底 耕場 磷磷 水底に在り  
 4 短衣半染蘆中泥 短衣 半ば蘆中の泥に染す  
 5 田頭刈莎結爲屋 田頭 莎を刈りて 結びて屋と爲す  
 6 歸來繫牛還獨宿 歸り來たりて 牛を繫ぎて 還た独り宿す  
 7 水淹手足盡爲瘡 水は手足を淹して 尽く瘡と爲り  
 8 山虻遶衣飛撲撲 山虻は衣を遶りて 飛びて撲撲たり  
 9 桑村榭黑蠶再眠 桑村 榭は黒く 蚕再び眠り  
 10 小姑採桑不餉田 小姑 桑を採りて 田に餉らず  
 11 江南熱旱天氣毒 江南 熱旱にして 天氣毒し  
 12 雨中移秧顏色鮮 雨中 秧を移せば 顏色鮮かなり  
 13 一年耕種長苦辛 一年の耕種 長く苦辛し  
 14 田熟家家將賽神 田熟せば 家家 將に神を賽らんとす

### 【押韻】

齊・畦・泥―上平声十二齊  
 屋・宿・撲―入声一屋  
 眠・田―下平声先・鮮―下平声仙(同用)  
 辛・神―上平声十七真

### 【口語訳】

- 1 南の堤は春の水が満ちて深く 蘆の芽はひとしく伸び  
 2 低い土地の田は(豊かな水にひたって) 稻を植えるのに畦はいらない。  
 3 田起こし前の田地は澄み切った水の底にあり  
 4 蘆草が生い茂る中 短い衣服を半ば泥だらけにしながら田を起こす  
 5 (彼らは) 田のそばに莎草を刈り取って仮の小屋を作り  
 6 一日の作業を終えて帰ってくると そこに牛を繫ぎ止めて ふたたび一人さみしく寢床につく  
 7 つねに水に浸っているで 手や足はひびやあかぎれだらけ  
 8 大きな蚊が衣服にたかって 周りをうるさく飛びまわる  
 9 桑の木が多い村里では 桑の実が黒く熟し、蚕が二度目の眠りに入り  
 10 幼い妹も桑の葉摘みに忙しく 田に食事を運んで来なくなる  
 11 江南の地は暑く日照りがちで その気候は過酷  
 12 時に降る雨の中、稻の苗を田に移し植し終えりと 苗は鮮やかな色



13 耕作と種植えの作業は一年を通じていつも苦しく  
14 水田が実れば どの家も神を祭ることになるだろう

## 【語釈】

1・2 南塘水深蘆箭齊、下田種稻不作畦

〔南塘水深〕南のつつみは水が満ちあふれて深い。

〔南塘〕は南のつつみ。李樹生は「南塘」は水田の灌漑に用いられると言う。経書や諸子などには用例は見られず、史書に用例が見える。『晋書』何無忌伝に盧循の遣わした軍隊の勢いを恐れた鄧潛之が何無忌に「宜決破南塘、守二城以待之、其必不敢捨我遠下」(宜しく南塘を決破して、二城を守りて以て之を待つべくして、其れ必ず敢えて我を捨てて遠く下らざらん)と、南塘の水を決壊させて城の守りとすべきだと進言している。また『世説新語』任誕篇に祖逖が江南に渡つて来たとき、建康の「南塘」でしばしば強奪をくり返していたという記事が見える。

唐より前の詩の用例は少なく、「西洲曲」(『樂府詩集』卷七二)に「採蓮南塘秋、蓮花過人頭」(蓮を採る 南塘の秋、蓮花 人の頭を過ぐ)とある。

「西洲曲」の古辞は春、夏、秋の風物が読み込まれており、岡村貞雄氏は従来の説をまとめた上で、「春・夏・秋を通じて、恋い続けてきた自分の日々の胸中を述べている」という(『古樂府』東海大学出版会一九八〇・三九六〜三九八頁)。引用した部分は秋に男性を思って蓮を採る場面。

唐に入つて詩の用例として、耿漳「春日洪州即事」(『全唐詩』卷二六八)に「鍾陵春日好、春水滿南塘」(鍾陵 春日好く、春水 南塘に満つ)、戴叔倫「寄司空曙」(『全唐詩』卷二七三)に「北郭晚晴山更遠、南塘春尽水爭流」(北郭 晩に晴れて 山更に遠く、南塘 春尽きて 水は流れを争う)とあり、前者は南塘に春の水が溢れるさまを、後者は晩春に雨を集めて南塘の水が激しく流れるさまを詠む。

また李賀「梁公子」(『全唐詩』卷三九二)に「南塘連子熟、洗馬走江沙」(南塘 連子熟し、洗馬 江沙を走る)とあり、南塘に蓮の実が熟すさまを詠む。また白居易「南塘暝興」319は、暮れゆく南塘で風に揺れる蓮の花や波間に映る月などに心を引かれて帰ることをためらうことを詠む。このように「南塘」は水が豊かに満ち、また蓮が生い茂る場所としてイメージされてきたようである。

杜甫の用例は一例。「陪鄭広文遊何將軍山林十首」其一(『詳注』卷二)に「不識南塘路、今知第五橋」(識らず 南塘の路、今知る 第五橋)とある。かつては「南塘」への道を知らなかったが、何將軍の山林に遊んで、いまは

その近くの第五橋も知ることとなったという。『詳注』に引く朱鶴齡の注に、この「南塘」は韋曲(長安の南)の辺りにある地名と言う。  
張籍の用例は一例のみ。

〔蘆箭齊〕蘆の芽がひとしくそろって伸びる。まばらであった若い芽が生長して、その長さを等しくなったことを言うのであろう。

〔蘆箭〕は蘆の生えたばかりの柔らかな芽を言う。『爾雅』「蘆」の郭璞注に「今江東呼蘆芽為蘆。然則蘆葦之類、其初生者皆名蘆」(今江東 蘆芽を呼びて蘆と為す。然らば則ち蘆葦の類、其の初め生ぜし者は皆蘆と名づく)とある。

唐より前の詩に「蘆箭」の用例は見えないようであり、唐詩にも用例は少ない。張籍以前の用例としては、王維「戲題示蕭氏外甥」(趙注本卷九)に「蘆箭穿荷葉、菱花冒雁兒」(蘆箭 荷葉を穿ち、菱花 雁兒に冒かる)とあり、これは池辺の蘆の若芽が荷の葉を貫くように伸びるさまを詠む。杜甫「客堂」(『詳注』卷一五)に「石暄葦芽紫、渚蘆秀箭綠」(石暄 葦芽が紫なり、渚 秀しくして蘆箭緑なり)とあり、杜甫は春の川辺に草木が芽吹くさまを詠む。杜甫の例はこの一例のみ。

張籍には他に一例あり、343「涼州詞三首」其一(卷六)に「辺城暮雨雁飛低、蘆箭初生漸欲齊」(辺城暮雨雁は飛ぶこと低く、蘆箭初めて生じて漸く齊しからんと欲す)とあり、蘆箭がその長さをそろえ始めることを描いて、辺境の遅い春の訪れを表現する。

〔下田種稻不作畦〕低い土地の田は畦を作らずに稲の苗を植える。

〔下田〕は低い土地の田。『漢書』溝洫志に「若有渠漑、則塩鹵下湿、填淤加肥。故種禾麦、更為秔稻、高田五倍、下田十倍」(若し渠漑有らば、則ち塩鹵は下に湿い、填淤 肥を加う。故に禾麦を種うれば、更に秔稻と為り、高田は五倍、下田は十倍す)とあり、水路を通せば塩は下へ、泥が堆積して肥料となり、上の田は五倍、下の田は十倍の収穫が得られることを言う。

また『齊民要術』卷二・早稲に「早稲用下田。白土勝黑土。凡下田停水処、燥則堅垆、湿則汚泥、難治而易荒、堯堯而殺種」(早稲 下田に用う。白土は黒土に勝れり。凡そ下田の水を停むる処は、燥けば則ち堅垆、湿れば則ち汚泥にして、治め難くして荒れ易し、堯堯にして種を殺す)とある。これは下田は乾燥に強い陸稲を植えるのに適していることを言う。ここで「下田」は水が届かず乾きやすい所であることを言う。灌漑の水は高い田から順番に流れ、夏に水が少ない時には「下田」には水が行き届かないことがあることを言うようである。

唐より前の詩の用例には、謝靈運「田南樹園激流植援」(『文選』卷三〇)に「靡迤趨下田、迢遞瞰高峰」(靡迤として下田に趨き、迢遞として高峰を瞰る)とあり、これは山のふもととの田の例。

唐に入ってから、張籍より前に詩の用例はないようであり、後の例であれば、李商隱「行次西郊作一百韻」(『全唐詩』卷五四一)に「高田長檣樞、下田長荊榛」(高田には檣樞長じ、下田には荊榛長ず)とあり、農地が荒れはてて高い土地の田にはクヌギなどの樹木が茂り、低い土地の田にはいばらが生い茂っていることを言う。

「畦」は水田を区切るあぜ。『説文解字』十三篇下・田部に「畦、田五十畝曰畦」(畦、田五十畝を畦と曰う)とあり、また徐余注の引く『楚辭』「招魂」(『文選』卷三三)「路貫廬江兮、左長薄。倚沼畦瀛兮、遙望博」(路廬江を貫いて、長薄を左にす。池に倚り瀛を畦ちて、遙望は博し)、郭璞注に「畦、猶区也」(畦は、猶お区の如きなり)とある。

「不作畦」は、『齊民要術』卷二・種茄子法に「其春種、不作畦、直如種凡瓜法者、亦得。唯須曉夜澆耳」(其れ春に種うるに、畦を作らず、直だ凡瓜を種うる法が如きも、亦た得。唯だ須く曉夜に澆すべし)とあり、これは春に茄子を植える場合に、瓜を植えるように畦を作らなくとも良いが、朝晩に数度水やりをする必要があることを言う。また同じく『齊民要術』卷二・水稻に「畦畝大小無定、須量地宜、水均而已」(畦畝の大小は定め無く、須らく地の宜しきを量りて、水均しくすべきのみ)とあり、「畦」は水をひとしく田全体に行きわたらせるために設けるべきことを言う。

唐より前に詩の用例はなく、唐に入ってから詩の用例は、張籍以外に王建の例が見える。王建「山居」(『王建詩集』卷五)に「桂熟長収子、蘭生不作畦」(桂熟して長に子を収め、蘭生ずるも畦を作らず)とある。この詩の冒頭に山居のそばには溪流が流れているとあるので、ここも水が豊富であるため、畦を作る煩いも無いことを言うのであろう。

冒頭の二句は、江村の南のつつみに春の水があふれて岸边には蘆草が生い茂り始める様子から歌い起こされる。次の二句とともに四句一韻でひとまとまり。

「南塘」は春の水があふれて蓮の花が咲く採蓮の場であり、また時期は蘆草の芽が生い茂り始める頃。冒頭は、従来の「江村」のイメージを踏まえつつ、春を迎えた江村ののどかな景物を詠むことから歌い起こされる。二句目では江村の水田へと目を転じる。『齊民要術』に拠れば、「下田」とは水が行き届かない場所であり、そのような「下田」であっても、この江村では畦を作って水を行きわたらせる必要もないほど、春の水が豊かであることを言う

のであろう。

### 3・4 耕場磷在水底、短衣半染蘆中泥

「耕場」稲を植えるために田起こしする場所。

張籍より前の用例は見当たらず、張籍以後にも用例を見出しがたい語。張籍の造語か。農家が野菜を植えたり、収穫した作物を貯える場所を「場圃」と言い、また秋に収穫した稲を打つ場を「秋場」という。

『詩経』豳風「七月」に「九月築場圃、十月納禾稼」(九月 場圃を築き、十月 禾稼を納む)とあり、毛伝に「春夏為圃、秋冬為場」(春夏 圃と為し、秋冬 場と為す)とある。春夏に野菜や果実を植える場所を「圃」と言い、秋に収穫した稲を打つ場所を「場」という。

「秋場」の用例は、謝朓「和王著作八公山」(『文選』卷三〇)に「春秀良已凋、秋場庶能築」(春秀 良に已に凋み、秋場 能く築かんことを庶う)とあり、年老いて故郷に帰り、秋には稲を打つ場を築くことを願う思いを詠む。

また韋忠物「觀田家」(『校注』卷七)に「丁壯俱在野、場圃亦就理」(丁壯は俱に野に在り、場圃も亦た理に就く)とあり、これは春に雨が降ったのを見計らって農家が農作業を始め、みながそろって「場圃」を耕し終えることを言う。

「耕場」とは、「場圃」「秋場」のような語を踏まえて、田起こしをする春の田地を指す語として用いられているのであろう。

「磷磷」水中のものがはつきりと見えることを言う。『詩経』唐風「揚之水」に基づく語。

『詩経』唐風「揚之水」に「揚之水、白石粼粼」(揚れるの水 白石粼粼たり)とあり、毛伝に「粼粼、清澈也」(粼粼は、清澈なり)とあり、水中の白石がはつきりと見えるさまを言う。

唐より前の用例には、「上林賦」(『文選』卷八)に「磷磷爛爛、采色滟汙、叢積乎其中」(磷磷爛爛、采色滟汙、其の中に叢積す)とあり、美しい石や玉が水底に輝き集まっていることを言う。また詩の用例には、劉楨「贈從弟三首」其「一」(『文選』卷二三)に「汎汎東流水、磷磷水中石」(汎汎たり東流の水、磷磷たり水中の石)とあり、清らかな水中にみえる石を、従弟の清らかな才能に比する。

唐に入ってから、詩の用例には張九齡「自豫章南還江上作」(『全唐詩』卷一四八)に「歸去南江水、磷磷見底清」(歸り去る南江の水、磷磷として底の清

らかなるを見る」とあり、また白居易「題牛相公婦仁里宅新成小灘」3510に「深処碧磷磷、浅処清濺濺」(深き処は碧として磷磷、浅き処は清くして濺濺たり)とある。前者は、水の底まで見えるほど水が清らかなことを言い、後者は水の流れが深いところでも底がみえるほど美しいことを言う。

また『齊民要術』卷二・水稻では「稻無所縁、唯歳易為良。選地欲近上流」(稻は縁る所無く、唯だ歳易を良と為す。地を選ぶは上流に近きを欲す)とあり、注に「地無良薄。水清則稻美也」(地に良薄無し。水清ければ則ち稻は美なり)とあり、清らかな水であれば稻は美味しくなると言う。もしこれを踏まえるのであれば、底が見えるほど水が清らかであることは、上等の稻が育つことも予想させよう。

杜甫の用例は無く、張籍もこの一例のみ。

〔短衣〕農作業や労働に適した短い衣。庶民の服装を言う。

張籍の12「築城詞」(巻一)に「来时一年深積裏、尽著短衣渴無水」(来りし時より一年 深積の裏、尽く短衣を着て渴するも水無し)とあり、これは長城を建築に従事する人々の服装を言う。その【語釈】を参照。

いま陳注の引く杜甫「曲江三章」其三(『詳注』巻二)を挙げれば、「短衣匹马随李広、看射猛虎終殘年」(短衣匹马 李広に随い、猛虎を射るを看て殘年を終えんとす)とあり、これは兵士の服装を言う。労働に従事する服装を言う例には、杜甫「乾元中寓居同谷県作歌七首」其二(『詳注』巻八)に「黄独無苗山雪盛、短衣数挽不掩脛」(黄独は苗無くして山は雪盛んにして、短衣は数しば挽くも脛を掩わず)とある。

〔半染蘆中泥〕蘆が生い茂る岸辺で、泥水に浸かりながら作業を行う様子を言う。

陳注は謝朓「酬王晋安」(『文選』巻二六)の「誰能久京洛、緇塵染素衣」(誰か能く京洛に久しくせんや、緇き塵は素き衣を染む)が「染」の基づくところと指摘する。これは都の俗塵に染まることに長くは堪えられないことを言う。

〔半染〕の用例は、唐より前に詩の用例は見えず、唐に入ってから、張籍より前の例は一例のみ。司空曙「送曲山人之衡州」(『全唐詩』巻二九二)に「衣中半染煙霞氣、語笑兼和菓草香」(衣巾 半ば煙霞の氣に染まり、語笑するは菓草の香を兼ね和す)とある。これは山人の衣巾が煙霞に半ば染まっていると言ひ、彼が俗世を離れた存在であることを表現する例。

〔蘆中〕は川辺に生える蘆草の中。『吳越春秋』巻四に、伍子胥がかつて蘆の中に身を潜めていたため、後に漁父が彼を「蘆中人」と呼んだというエ

ピソードが見える。

唐より前の詩の用例としては、梁簡文帝「祠伍員廟詩」(『藝文類聚』巻七九)に「舟裏多奇計、蘆中復吐誠」(舟裏 奇計多く、蘆中 復た誠を吐く)とあり、これは伍子胥のエピソードを踏まえる例。

唐に入ってから、詩の用例は漁人が居る隠棲の場所として用いられることが多い。儲光羲「酬慕母校書夢耶溪谷見贈之作」(『全唐詩』巻一三六)に「山人松下飯、釣客蘆中吟」(山人 松下の飯、釣客 蘆中の吟)とあり、岑參「漁父」(『校注』巻一)に「朝從灘上飯、暮向蘆中宿」(朝は灘上に従いて飯らい、暮は蘆中に宿る)とある。前者は帰隱の思いを抱いて夢に溪谷に遊び、山人や釣客のびやかに暮らすさまを詠む例、後者は日々をきまみに過ごす漁父の姿を詠む例。

杜甫に用例はなく、張籍には15「牧童詞」(巻一)に「入陂草多牛散行、白犢時向蘆中鳴」(陂に入りて草多く牛散行し、白犢 時に蘆中に向いて鳴く)とあり、草を食む子牛たちが蘆の中で時折鳴く、のどかな放牧の景を詠む。その【語釈】も参照。

ここは「下田」で田起こしを行う農夫たちの姿を詠む。冒頭の二句からここまで四句で一韻ひとまとまりとなっている。

冒頭の二句から続けて、江村の美しい水田の様子を描き出している。水田は清らかでその底も見えるようであり、それは上等な稻が育つことを予想させ、江村の豊かさをも想像させる。後の句は、農夫たちは丈の短い衣を着ているが、それを半ば泥まみれにしながら作業を行う様子を描く。「蘆中泥」とは水田が岸辺に近く、また水田を耕すために蘆を刈りとりながら田を起しているのである。また『齊民要術』巻二・水稻では田に水を放水して十日後に、「陸軸」を引いて、土を十分にこねる必要があることを言う。ここまではのどかな江村の春の農作業の風景を描くようだが、「短衣」の句は次句以降に農作業の苦勞を読み始める布石ともなっている。

#### 5・6 田頭刈莎結為屋、归来繫牛還独宿

〔田頭〕水田のそば。

張籍の32「羈旅行」(巻一)に「行尋田頭暝未息、双轂長轅礙荆棘」(行きて田頭を尋ね 暝くして未だ息わず、双轂 長轅 荆棘に礙げらる)とあり、今夜の宿泊させてくれる人を捜して水田の辺りを尋ねることを詠む。その【語釈】を参照。



〔刈莎〕「莎」は、かやつりぐさ科の多年草。河岸の砂地に生育し、葉は細長く硬い。

『爾雅』積草に「蒿侯莎、其実媞」（蒿侯は莎、其の実は媞）とあり、郭璞の注に「夏小正曰、蒿也者莎藨。媞者其実」（夏小正に曰く、蒿なるは莎藨なり。媞は其の実なり）とあり、古くは「蒿侯」とも呼ばれ、司馬相如「子虚賦」（『文選』卷七）にも「其高燥則生葳蕤苞荔、薛莎青藨」（其の高燥には則ち葳・蕤・苞・荔、薛・莎・青藨を生ず）とあり、張揖の注に「薛、藨蒿也。莎、蒿侯也。青藨、似莎而大、生江湖、雁所食」（薛は、藨蒿なり。莎は、蒿侯なり。青藨は、莎に似て大、江湖に生じて、雁の食らう所なり）とあり、江南地方の沼沢周辺に生育する植物として見える。

また、その葉の色が深い緑であることから『楚辞』「招隐士」（『文選』卷三三）に「青莎雜樹兮、藨草蘼靡」（青莎 樹に雜り、藨草蘼靡たり）とあり、また後漢・馬融「広成頌」（『後漢書』馬融伝）に「鎮以瑤臺、純以金堤、樹以蒲柳、被以緑莎」（鎮うるに瑤臺を以てし、純むに金堤を以てし、樹つるに蒲柳を以てし、被うに緑莎を以てす）とある。前者は草木が生い茂るさまを言い、後者は莎草が周囲を覆うさまを言う。

唐より前の詩の用例には「青莎」の例が多く、「青莎」以外では、潘岳「射雉賦」（『文選』卷九）に「青鞞莎靡、丹臆蘭絳」（青鞞は莎のごとく靡き、丹臆は蘭のごとく絳る）とあり、謝朓「和王長史臥病詩」（『校注』卷四）に「幸留清樽味、言藉故田莎」（幸いに清樽の味を留め、言に故田の莎を藉かん）とある。前者は雉の青い尾を風に靡く莎草に喩え、後者は故田の莎を地面に敷いて酒宴をしましうと問いかける例。

唐詩の用例も「青莎」の例が多く、南方の景物を詠むものとしては、李白「同王昌齡送族弟襄陽二首」其二（王琦注本卷一七）に「爾家何在瀟湘川、青莎白石長沙辺」（爾が家は何くにか在る 瀟湘の川、青莎 白石 長沙の辺）とある。

張籍には「莎」の用例が多く、彼が好んで用いた景物の一つであったようである。南方の景物を詠んだものには、38「江南曲」（卷一）に「清莎覆城竹為屋、無井家家飲潮水」（清莎 城を覆い 竹を屋と為し、井無く 家家 潮水を飲む）とあり、「清莎」の用例が見える。その【語釈】を参照。

〔結為屋〕田の中に仮の家を作ることと言う。

『漢書』食貨志上に「井方一里、是為九夫。八家共之、各受私田百畝、公田十畝、是為八百八十畝、餘二十畝以為廬舍」（井は方一里、是を九夫と為す。八家 之を共にし、各の私田百畝、公田十畝を受け、是を八百八十畝と為し、餘二十畝以て廬舍と為す）とあり、師古の注に「廬、田中屋也。春夏

居之、秋冬則去」（廬は、田中の屋なり。春夏には之に居し、秋冬には則ち去る）とある。春夏の農繁期には農民は田の中に仮の家を作って住まい、秋冬にはそれを撤去したと言う。

陳注は、「結為屋」は陶淵明「雜詩」二首其一（『文選』卷三〇）に「結廬在人境、而無車馬喧」（廬を結びて人境に在り、而して車馬の喧しき無し）に基づく表現であると指摘する。

「為屋」は、38「江南曲」（既引）、418「董卓行」（卷七）に見えた。その【語釈】を参照。特に「江南曲」の「清莎覆城竹為屋、無井家家飲潮水」（清莎 城を覆い 竹を屋と為し、井無く 家家 潮水を飲む）は、莎が城壁を覆い、竹を屋根に葺く江南の江村の様子を描く。

田植への頃に農夫が農作業のために帰れなくなることは、王建「戴勝詞」（『王建詩集』卷一）に「声声催我急種穀、人家向田不帰宿」（声声 我を催し穀を種うるを急かし、人家 田に向かいて帰宿せず）とある。これは季春に農事を知らせる戴勝（キクイタダキ）が鳴き始めると、人々が田に向かつて夜にも帰らなくなることを言う。

〔归来〕帰ってくる。もとかえらることを言う。

『尚書大伝』卷一に「和伯之樂、舞玄鶴、其歌声比中謠、名曰归来」（和伯の樂、玄鶴を舞わしめ、其の歌声は中謠に比し、名づけて归来と曰う）とあり、鄭玄の注に「玄鶴象陽鳥之南也。归来、言反其本也」（玄鶴は陽鳥の南に之くを象るを言うなり。归来は、其の本に反るを言うなり）とある。

唐より前にも詩の用例は多く、兵役や労役を終えて或いは退隠して故郷に帰る例が多い。一日の終わりに家に帰る例には、左思「詠史八首」其七（『文選』卷二一）に「陳平無産業、归来驕負郭」（陳平 産業無く、帰り来たりて負郭に驕る）とある。これは陳平はかつて貧しく、彼の家は城郭に隠れるような所にあつたことを言う。

唐に入っても詩の用例は多く、やはり兵役や労役を終えて或いは退隠して故郷に帰る例が多い。一日の終わりに住居に帰ってくる例には、韋応物「寄全椒山中道士」（『校注』卷三）に「澗底束荆薪、归来煮白石」（澗底 荆薪を束ね、帰り来たりて白石を煮る）とある。

杜甫にも用例が多く、陳注の引く杜甫「兵車行」（『詳注』卷二）に「去時里正与裏頭、归来頭白還成辺」（去る時 里正与に頭を裏む、帰り来たるに頭白くして還た辺を成る）を引く。これは兵士が辺境の守備から帰ってくることを言う。一日の終わりに帰ってくる例としては、杜甫「乾元中寓居同谷縣作歌七首」其二（既引）に「此時与子空归来、男呻女吟四壁静」（此の時 子と空しく帰り来たり、男呻い女吟じて四壁静かなり）とある。

〔繫牛〕牛をつなぎとめる。

「繫牛」の古い用例はないようだが、『周易』無妄に「六三、無妄之災、或繫之牛、行人之得、邑人之災」(六三、無妄の災。或いは之が牛を繋ぎ、行人の得るは、邑人の災)とある。これは繫いでいた牛を行人が持ち去ってしまった、村人に嫌疑がかけられることを言う。また『説文解字』十三篇上・糸部に「縦、以長繩系牛也」(縦、長繩を以て牛に系くるなり)とある。

史書の用例として、『晋書』天文志中に「氣如繫牛、如人臥、如双蛇、如飛鳥、如決堤垣、如壞屋、如驚鹿相逐、如兩鷄相向、此皆為敗軍之氣」(氣の繋がるる牛の如く、人の臥せるが如く、双蛇の如く、飛鳥の如く、決する堤垣の如く、壞れたる屋の如く、驚鹿の相逐うが如く、兩鷄の相向うが如きは、此れ皆敗軍の氣たり)とあり、雲氣の形は繋かれた牛のようであれば、それは軍隊が敗れる兆しであることを言う。

また『通典』卷一五九・兵十二に「時(北齊)神武士馬不滿三万、以衆寡不敵、遂於韓陵山為陣、繫牛驢以塞道。於是將士皆死戰、四面奮擊、大破之」(時に(北齊の)神武 士馬は三万に満たず、衆寡敵せざるを以て、遂に韓陵山に於いて陣を為し、牛驢を繋ぎて以て道を塞ぐ。是に於いて將士皆死戦し、四面に奮撃して、大いに之を破る)とあり、北齊の神武帝が牛と驢馬を繫いで道を塞ぎ、背水の陣を布いたことを言う。

詩の用例は唐より以前になく、唐詩にも張籍のこの用例のみのようである。

〔独宿〕ただ一人で寝る。ここは村里には戻らず、田のそばに作った仮の家に一人で寝ることを言う。

古くより用例が多く、離別や孤独など、否定的な意味で用いられる。陳注の引く『詩経』豳風「東山」に「敦彼独宿、亦在車下」(敦たる彼の独宿、亦た車の下に在り)とあり、鄭箋に「敦敦然独宿於車下。此誠有劳苦之心」(敦敦然として独り車の下に宿る。此れ誠に劳苦の心有り)とある。これは出征していた人物が故郷に帰る日に雨が降り、故郷に帰ることを思いながら、戦車の下で眠ることを言う。また『後漢書』方術伝・公沙穆に「居建城中、依林阻為室、独宿無侶」(建城中に居し、林阻に依りて室と為し、独り宿して侶無し)とあり、伴侶がない男性の孤独を詠む。

唐より前の詩の用例としては、「古詩十九首」其十六(『文選』卷二九)に「独宿累長夜、夢想見容輝」(独宿 長夜を累ね、夢想 容輝を見る)とあり、鮑照「還都道中詩三首」其二(『集注』卷五)に「愁來攢人懷、羈心苦独宿」(愁來たりて人懷を攢め、羈心 独宿に苦しむ)とある。前者は男性と離別した女性を言い、後者は旅人の孤独をいう。

唐に入っても詩の用例は多く、唐以前と同じように離別や孤独を示す例が多い。杜甫の用例は二例あり、「佳人」(『詳注』卷七)に「昏昏尚知時、鴛鴦不独宿」(昏昏尚お時を知り、鴛鴦 独り宿せず)とあり、輕薄な夫を怨む女性が仲睦まじい鴛鴦は独り眠ることは無いことを言い、「宿府」(『詳注』卷一四)に「清秋幕府井梧寒、独宿江城蠟炬殘」(清秋の幕府 井梧寒く、独宿す江城 蠟炬残す)とあり、家族と離れて独り幕府に宿泊することを言う。

張籍の用例はこの一例のみ。

次の二句と合わせて四句一韻でひとまとまり。一日の作業を終えても農夫は家に帰らず、田のそばに建てた仮の小屋に寝泊まりすることを言う。春の水田耕作は大変な作業であり、家に帰る暇も無く朝から晩まで耕作に従事しなければならぬ。「帰來」は常用の語ではあるが、兵役や労役から故郷へと帰ってくることを表現するのに用いられることの多い語でもあり、また「独宿」も離別や旅の孤独を表現するのに用いられる語である。ここではそのような語を用いることで、水田耕作の苦勞を表現しようとしているのであろう。

7・8 水淹手足尽為瘡、山蛇遶衣飛撲撲

〔水淹〕水にひたる。ここでは水田耕作のため、一日中手足を水に浸して作業することを言う。

〔水淹〕は、史書の用例では決壊した土地が水浸しになることを言う。例えば、『宋書』田亮伝に「時三吳水淹、穀貴民饑、刺史彭城王義康使立議以救民急」(時に三吳は水に淹り、穀貴くして民饑え、刺史彭城王義康 議を立てて以て民の急を救わしむ)とあり、東吳地方が水害によって民の暮らしが困窮していることを言う。

唐より前に詩の用例は無いようであり、唐詩にも数例しか用例がない。顧況「同裴觀察東湖望山歌」(『全唐詩』卷二六五)に「水淹徐孺宅恒乾、繩墜洪崖井無底」(水淹るも徐孺の宅は恒に乾き、繩墜つるも洪崖の井は底無し)とある。これ後漢の徐孺のごとき裴觀察の居宅は崖の高い所にあるので、水が溢れてもそれにひたる事が無いことをいう。

杜甫に用例は無く、張籍にもこの一例のみ。

〔手足尽為瘡〕水に長時間浸って作業を行っているために、手足全体にひびやあかぎれができることを言う。

『詩経』小雅「巧言」に「既微且燠、爾勇伊何」(既に微且つ燠、爾が勇

伊れ何ぞ」とあり、その鄭箋に「此人居下湿之地、故生微腫之疾。人憎惡之。故言女勇伊何、何所能也」（此の人 下湿の地に居り、故に微腫の疾を生ず。人は之を憎惡す。故に女が勇は伊れ何ぞ、何ぞ能くする所ぞと言うなり）とあり、湿地に住む人が足かさや腫れものに悩まされることをいう。

「瘡」を詩に用いる例は唐詩以前にはあまり見られず、『北堂書鈔』巻一五六に引く庾信の詩に「山風寒折骨、目面尽生瘡」（山風 寒くして骨を折り、目面 尽く瘡を生ず）とあり、寒さによって顔に「瘡」が生じることを言う。

唐に入って詩の用例は、杜甫に多く、十一例。多くは「瘡痍」という語で用いられ、民の苦しみを言う例が多い。「瘡痍」以外の例を挙げれば、「入衡州」（『詳注』巻二三）に「隱忍枳棘刺、遷延砥研瘡」（枳棘の刺を隱忍し、砥研の瘡を遷延す）とあり、「瘦馬行」（『詳注』巻六。『文苑英華』巻三四四は「老馬行」に作る）に「天寒遠放雁為伴、日暮不収鳥啄瘡」（天寒くして遠く放たれて雁を伴と為し、日暮れて鳥の瘡を啄むを収めず）とある。前者は兵士がいばらに刺されながら行軍する苦しみに耐え、帰郷して農作業に苦勞することが先延ばしになっていることを言い、後者は瘦せ老いた馬が日暮れともなれば鳥が瘡を啄むのを追い払う力さえ無いことを言う。

また、陳注に引く杜甫「孟氏」（『詳注』巻一九。一に「公有過孟十二倉曹十四主簿兄弟詩」と題す）に「承顔砥手足、坐客強盤餐」（承顔 砥なる手足、坐客 強いて盤餐す）とあり、働きの孟氏兄弟の手足は日々の農作業のために砥（たこ）だらけであることを言う。

労働の苦勞によって手足に「胼胝」ができるというのは、古くは先秦諸子の書に見える。『莊子』讓王篇に「曾子居衛、縑袍無表、顔色腫皴、手足胼胝」（曾子 衛に居るに、縑袍は表無く、顔色は腫皴し、手足は胼胝す）とあり、この他にも『墨子』『荀子』『韓非子』などにも見え、「手足胼胝」が労働の苦勞を表す常套表現として以後用いられる。また『史記』李斯列伝には禹が治水のための労働によって、手足が胼胝ができ、顔は真っ黒となって、遂に死亡したという記事がみえる。

唐詩に於いて、「手足」が傷む例も「胼胝」を用いるものが多く、錢起「鋤藥詠」（『全唐詩』巻二三六）に「但使芝蘭出蕭艾、不辭手足皆胼胝」（但だ芝蘭をして蕭艾より出だしむるに、手足の皆胼胝なるを辭せず）とあり、王建「去婦」（『王建詩集』巻二）に「新婦去年胼手足、衣不暇縫蚕廢簇」（新婦 去る年 胼なる手足、衣は縫うに暇あらず 蚕は簇を廢す）とある。前者は菓草を採取する苦勞を、後者は新婦の苦勞を言う例。

〔山蛇〕山中のおおきな蛇。人や動物の血を吸おうとして群がり飛ぶ煩わし

い存在。

『説文解字』十三篇下蝮部に「蛇、齧人飛虫」（蛇、人を齧む飛虫なり）とある。また『國語』楚語上に「夫边境者、国之尾也。譬之如牛馬、処暑之既至、蛇蠆之既多、而不能掉其尾、臣亦懼之」（夫れ边境は、国之尾なり。之を譬うれば牛馬の、処暑の既に至り、蛇蠆の既に多くして、其の尾を掉う能わざるが如きは、臣亦た之を懼る）とあり、韋昭の注に「蛇蠆、即牛蛇、大曰蛇、小曰蠆」（蛇蠆は、即ち牛蛇なり。大を蛇と曰い、小を蠆と曰う）とある。『史記』項羽本紀にも、項羽が趙の鉅鹿を囲む秦將章邯の軍を攻撃すべきことを進言したのに対して、宋義が牛に群がる蛇を撃ち払ったとしても、蟻蝨（だにやしらみ）を一掃することはできないことに喩えて、章邯の秦軍を攻撃することの無益を主張したという故事がみえる。このように「蛇」は牛馬の周囲に群がり飛ぶ煩わしい存在として、古くから用いられている。

唐より前の詩の用例は見られないようであるが、王褒「四子講徳論」（『文選』巻五一）に「夫蚊虻終日經營、不能越階序、附驥尾則涉千里、攀鴻翮則翔四海」（夫れ蚊虻は終日經營するも、階序を越ゆる能わず。驥尾に附けば則ち千里を涉り、鴻翮に攀れば則ち四海を翔ける）とある。これは「蚊子」の文を踏まえて、卑小な存在である「蚊虻」も駿馬や大鳥によれば遠くまで行けることを言う。

唐に入っても詩の用例は少なく、張説「岳州作」（『全唐詩』巻八六）に「器留魚鱉腥、衣点蚊虻血」（器には留む魚鱉の腥、衣には点ず蚊虻の血）とあり、南方の風物を示すものとして見える。また王建「荆門行」（『王建詩集』巻二）には「南中三月蚊蚋生、黄昏不聞人語声」（南中三月 蚊蚋生じ、黄昏には人語の声も聞こえず）とあり、これは南方では「蚊蚋」が三月には発生して、夕暮れには人の声も聞こえないほど、その羽音が騒がしいことを言う。

「蛇」そのものを詠むものに、陳注に引く元稹「虫多詩 蛇三首」（『元稹集』巻四）があり、その序文に「巴山谷間、春秋常雨、自五六月至八九月。雨則多蛇。道路群飛、噬馬牛血及蹄角。且暮尤極繁多。人常用日中時趣程。逮雪霜而後尽。其齧人、痛劇浮蟻。而不能毒留肌。故無療術」（巴山の谷間、春秋常に雨ふり、五六月より八九月に至る。雨ふれば則ち蛇多し。道路に群り飛び、馬牛の血及び蹄角を噬む。且暮尤も極めて繁多なり。人常に日中の時を用て程を越る。雪霜に逮びて後に尽く。其の人を齧むや、痛きこと浮蟻より劇し。而して毒の肌に留まるに能えず、故に療術無し）とあり、巴山周辺には夏に蛇が多く、人馬に多大な害を与えることを言う。

また白居易「蚊蟆」(558)に「呬膚拂不去、繞耳薨薨声」（膚を呬みて拂うも去らず、耳を繞る 薨薨たる声）とあり、蚊蟆が耳の周りをめぐってうる



さいことを詠み、張籍の句と表現が類似する。

杜甫に用例はなく、張籍もこの一例のみ。

百名家全集本は「虻」を「虫」に作る。

「山虫」は山中で鳴く虫。古い用例はなく、梁・劉孝先「草堂寺尋無名法師詩」(『古詩紀』卷八八)に「竹風声若雨、山虫聽似蟬」(竹風 声は雨の若く、山虫 聴くに蟬に似たり)とあり、陳・江総「山庭春詩」(『藝文類聚』卷三)に「野花寧待晦、山虫詎識秋」(野花 寧ぞ晦を待たん、山虫 詎ぞ秋を知らん)とある。前者は山中の寺の周囲で鳴く虫の音が蟬の声に似ることを言い、後者は夏の山の虫が秋を待たずに死ぬことを言っていて、続く句で人生の短促を言う。この二つの用例から考えれば、「山虫」は夏の山の虫を言うようである。

唐詩には用例は一例のみ。盧照鄰「宴梓州南亭得池字」(『全唐詩』卷四二)に「水鳥翻荷葉、山虫咬桂枝」(水鳥は荷葉に翻り、山虫は桂枝を咬む)とあり、これも夏の山の虫のようである。

「遶衣」衣にまわりつく。

「遶衣」の古い用例はなく、詩の用例も唐より前には無いようである。唐に入ってから、張籍以外の用例は一例のみ。権徳輿「新月与儿女夜坐聽琴酒」(『全唐詩』卷三二九)に「儿女各冠笄、孫孩遶衣襟」(儿女 各おの冠笄し、孫孩 衣襟を遶る)とあり、孫たちが自分にまわりついてくる様子を詠む。

百名家全集本は「遶」を「繞」に作り、全唐詩は「衣」を「身」に作る。「繞衣」も用例の見られない語であり、古い用例はなく、唐より前の詩文の用例も一例のみ。江淹「倡婦自悲賦」(『江文通文集』卷一)に「霜繞衣而葭冷、風飄輪而景昃」(霜は衣に繞りて葭は冷く、風は輪を飄して景は昃く)とあり、君主の寵愛を失った女性が自分の周囲の厳しい環境を霜が衣にまわりつくと言っている。

「遶身」は身にまとう。古い用例は見当たらず、唐より前の詩にも用例は無いようである。「繞身」であれば、『梁書』諸夷伝・狼牙修国に「女子則被布、以瓔珞繞身」(女子は則ち布を被り、瓔珞を以て身に繞う)とあり、狼牙修国の女性(婆利国では王)が玉をつないで作った首飾りを身に帯びていることをいう。

唐に入ってから、中唐から詩の用例が見える。孟郊「贈建業契公」(『校注』卷六)に「師住青山寺、清華常遶身」(師は青山の寺に住み、清華 常に身を遶る)とあり、白居易「初除官蒙裴常侍贈鵲瑞草緋袍魚袋。因謝惠貺。兼抒離情」1091に「魚綴白金隨步躍、鵲銜紅綬遶身飛」(魚は白金を綴り 歩に随いて躍り、鵲は紅綬を銜み 身を遶りて飛ぶ)とある。前者は、契公が

青山の寺に住み、その周囲には美しい山水があることを言い、後者は三品以上の官吏の服飾である「鵲銜瑞草」のことを、鵲が紅い組紐をくわえて身体のみわりを飛んでいるようだと言う例。

「撲撲」虻が盛んに飛び交うさまを言う。その羽音の音の盛んさもここでは含むであろう。

古く経書や史書に用例は見えず、唐以前の詩文にも用例は見えないようである。唐に入ってから、中唐以降に詩に用いる例が見え始める。

王建に二例の用例があり、「田家行」(『王建詩集』卷二)に「野蚕作繭人不取、葉間撲撲秋蛾生」(野蚕繭を作るも人は取らず、葉間撲撲と秋蛾生ず)とあり、「荊門行」(既引)に「犬声撲撲寒溪煙、人家燒竹種山田」(犬声撲撲たり寒溪の煙、人家竹を燒きて山田に種う)とある。前者は野生の蚕は人がその繭をとることもなく、秋になると蛾が繭から多く発生することを言い、後者は犬の音が盛んに聞こえてくることを言う。

この他には、白居易「山石榴寄元九」0503の序に「山石榴、一名山躑躅、一名杜鵑花、杜鵑啼時花撲撲」(山石榴、一名山躑躅、一名杜鵑花、杜鵑啼きし時に花撲撲たり)とあり、これは花が盛んに咲き始めることを言う例。

「撲撲」を百名家全集本は「漂漂」に作り、『全唐詩』は「颺颺」に作る。「漂」は水を支える大きな板のこと。「漂漂」の用例はこの他に見当たらない。

「颺颺」は飛び舞うさま。これであれば山虻が衣の周囲を飛びめぐるさまを詠むことになる。古い用例は見当たらず、唐に入ってから詩の用例は二例。韋応物「長安遇馮著」(『校注』卷五)に「冥冥花正開、颺颺燕新乳」(冥冥花正に開き、颺颺 燕新たに乳す)とあり、元稹「月臨花」(『元稹集』卷六)に「凌風颺颺花、透影朧朧月」(風に凌る 颺颺たる花、影を透す 朧朧たる月)とある。前者は飛び交う燕の様子を、後者は風にひるがえる林檎の花の様子を詠む例。

前の二句と合わせて、四句で一韻ひとまとまり。水田耕作の苦勞を具体的に描き出す。彼らの手足は常に水に浸かっているために、ひびやあかざれだらけであり、作業の時には大きな蚊がうるさくつきまとう。水田耕作の苦勞を身体や作業中の状況を具体的に描くことで、その苦勞が身体感覚を伴って伝わってくる。

9・10 桑村榎黒蠶再眠、小姑採桑不餉田

〔桑村〕桑の木が多い村里。

「桑村」の張籍以前の用例は見当たらない。張籍以後であれば、趙嘏「西江晚泊」(『全唐詩』卷五五〇)に「茫茫靄靄失西東、柳浦桑村処処同」(茫茫靄靄として西東を失い、柳浦桑村 処処に同じ)とあり、皮日休「西塞山泊漁家」(『全唐詩』卷六一三)に「中婦桑村挑葉去、小兒沙市買蓑婦」(中婦は桑村に葉を挑みて去き、小兒は沙市に蓑を買いて帰る)。前者は柳の浦と桑の村が並列され、それぞれの場所に柳と桑が多いことを言い、後者は女性が多い場所に葉を摘みに行くことを言う。

『全唐詩』は「桑林」に作る。「桑林」は古くは殷の天子の音楽や地名、また神の名として用いられるが、桑樹の林の意では、『史記』張儀列伝に韓の宮苑の名として「桑林之苑」が見える(但し、徐広は「桑」は一に「栗」に作ると言う)。また『晋書』や『宋書』に晋の武帝の宮中に皇后が桑を採るための「桑林」があったと言う。

唐詩には王昌齡「塞下曲四首」其一(『全唐詩』卷一四〇)に「蟬鳴空桑林、八月蕭關道」(蟬は鳴く空桑の林、八月 蕭關の道)とあり、高適「淇上別業」(『全唐詩』卷二二四)に「依依西山下、別業桑林辺」(依依たり西山の下、別業 桑林の辺)とある。前者は『全唐詩』の注に「桑林間に作るとあり、蟬が桑樹の林に寂しく鳴くさまを、後者は桑樹の林の傍らに別業を営むことを言う。また張籍より後の例ではあるが、李頻「鄂州頭陀寺上方」(『全唐詩』卷五八七)に「沙渚漁婦多濕網、桑林蚕後尽空條」(沙渚 漁婦りて 湿網多く、桑林 蚕後 尽く空條なり)とあり、江辺の桑林は養蚕のために葉が摘み採られている様子を詠む。

「榘黒」桑の実が黒く成熟する。「榘」は桑の実。桑の実は初夏に成熟すると赤黒くなるので、「榘黒」と言う。

陳注の引く『詩経』衛風「氓」に「桑之未落、其葉沃若。于嗟鳩兮、無食桑葢」(桑の未だ落ちざるとき、其の葉 沃若たり。于嗟 鳩、桑葢を食う勿れ)とある。鄭箋は「桑之未落」とは仲秋の時期を言い、鳩が時に有らざるに桑の実を食らうのを、女子が礼に従わずに嫁ぐことに喩えると言う。

また『太平御覽』卷九五五に引く『東觀漢記』に「蔡君仲、汝南人。王莽乱、人相食。君仲取桑榘、赤黒異器。賊問所以、君仲云、黒与母、赤自食。賊義之、遺塩二斗、受而不食」(蔡君仲は、汝南の人なり。王莽乱し、人は相食む。君仲は桑榘を取りて、赤と黒と器を異にす。賊 所以を問うに、君仲云う、黒は母に与え、赤は自ら食うと。賊は之を義として、塩二斗を遺るも、受けて食らわず)とあり、蔡君仲が成熟した黒い桑の実を母に与え、自分は未成熟の赤い実を食べたとある。

唐以前の詩に「榘(葢)」を用いる例は少なく、『齊民要術』卷二(『古語諺』では「桑榘」を「桑葉」に作る)に引く歌謡に「二月昏、参夕。杏花盛、桑榘赤」(二月の昏、参の夕。杏花は盛んにして、桑榘は赤し)とあり、桑の実は春二月に赤くなることを言う。また傅玄「桑榘賦」(『太平御覽』卷九七三)に「繁実離離、含甘吐液。翠木三变、或玄或白。嘉味殊滋、食之無斂」(繁実離離として、甘を含み液を吐く。翠木三変し、或いは玄く或いは白し。嘉味殊に滋い、之を食えば斂うこと無し)とある。「玄」とは桑の実が黒くなることで、「白」は桑の花を言うのであろう。

この他に沈約「齊禅林寺尼淨秀行状」(『漢魏百三家集』卷八七)に「即見兩外国道人、举手共語。一云呖羅、一云毗呖羅。所著袈裟、色如桑榘之熟」(即ち兩外国道人の、手を挙げて共に語るを見る。一は呖羅と云い、一は毗呖羅と云う。著けし所の袈裟は、色は桑榘の熟するが如し)とあり、外国の道人の袈裟が桑の実が熟したように黒かったと記す。

唐に入って、「榘」を詩に用いる例は少なく、韓愈「城南聯句」(『繫年集積』卷五)に「榘黒老蚕蠟、麦黄韻鸚鵡」(榘黒くして蚕蠟老い、麦黄にして鸚鵡韻く)とあり、桑の実が黒くなるころに蚕の幼虫も脱皮をくり返して大きくなることを言う。また同じく韓愈の「遊城南十六首・賽神」(『繫年集積』卷九)に「麦苗含穰桑生葢、共向田頭樂社神」(麦苗は穰を含み桑は葢を生じ、共に田頭に社神を樂しましむ)とあり、麦が実る頃に桑の実も生じることを行い、春に麦が実りを迎える頃に桑の実が結ぶことを言う。

「蚕再眠」蚕が二度目の脱皮を行う前に眠つたようにしばらく動かなくなることを言う。蚕は四回脱皮をくり返した後に繭を作り始め、脱皮の前には眠つたように動かなくなる。脱皮の前には多くの桑の葉を食べるので、そのために桑を摘む作業が忙しくなる。

宋・秦觀「蚕書」「時食」に「蚕生明日、桑或柘葉風戾以食之、寸二十分。晝夜五食、九日不食、一日一夜、謂之初眠。又七日再眠如初。既食葉寸十分。晝夜六食。又七日三眠如再。又七日若五日不食二日、謂之(大)眠」(蚕生れて明くる日、桑或いは柘の葉の風戾して以て之を食うこと、寸二十分。晝夜五食して、九日にして食わざること、一日一夜、之を初眠と謂う。又た七日にして再び眠むること初の如し。既に葉を食うこと寸十分。晝夜六食す。又た七日にして三たび眠むること再の如し。又た七日若しくは五日にして食わざること二日、之を(大)眠と謂う)とある。

唐より前の詩には、庾信にこの蚕の性質を詠んだ詩が見える。庾信「燕歌行」(『集注』卷五)に「春分燕来能幾日、二月蚕眠不復久」(春分 燕の来たるや能く幾日ぞ、二月 蚕の眠むるや復た久しからず)とあり、また庾信

「帰田詩」(『集注』巻四)に「杜鵑新欲伏、原蚕始更眠」(杜鵑 新たに伏せんと欲し、原蚕 始めて更に眠る)とある。前者は春が訪れたことを燕の訪れと蚕の眠りがはじまったことで表現し、後者は帰田して農事に従事し、春には杜の鵑が卵をあたため、蚕が眠りを重ねて生育する様を描く。

また沈約「三月三日率爾成篇」(『文選』巻三〇)に「寧憶春蚕起、日暮桑欲萎」(寧ぞ憶わん春蚕の起き、日暮れて桑の萎えんと欲するを)とあり、これは宴席に侍る宮女たちは、眠りから醒めた蚕に桑の葉を与えるような苦勞を知らないことを言う。

唐に入つて、詩に春の訪れを示すものとして蚕の眠りが詠まれ、王維「渭川田家」(趙注本巻三)に「雉鳴麥苗秀、蚕眠桑葉稀」(雉鳴きて麥苗秀いで、蚕眠りて桑葉稀なり)とあり、戎昱「漢上題韋氏莊」(『全唐詩』巻二七〇)『全唐詩』巻二〇〇に岑參の作ともする)に「調笑提筐婦、春來蚕幾眠」(調笑す筐を提ぐる婦、春來りて蚕は幾くか眠る)とある。前者は渭水周辺の農家ののかなさまを描くなかに見え、後者は「陌上桑」の故事を踏まえて、春になつて眠りをくり返す蚕のために、女性が採桑に勤しむことを言う。

杜甫には「蚕」の例は少ないが、戦乱に明け暮れて牛耕と養蚕もままならない世を歎いた「蚕穀行」(『詳注』巻二三)がある。

張籍の「蚕」の用例は三例、415「廢宅行」(巻七)に「宅辺青桑垂宛宛、野蚕食葉還成繭」(宅辺の青桑は垂れて宛宛たり、野蚕は葉を食らいて還た繭を成す)とあり、122「送嚴大夫之桂州」(巻二)に「有地多生桂、無時不養蚕」(地に多く桂を生ずる有り、時に蚕を養わざる無し)とある。前者は廢墟の周囲に野生の蚕が繭を作っていることを、後者は桂州では養蚕業が盛んで有ることを言う。

〔小姑〕本来は夫の妹を言うが、ここでは幼い妹又は娘の意であろう。

陳注の引く「青溪小姑曲」(『樂府詩集』巻四七)に「小姑所居、独処無郎」(小姑の居る所、独り処りて郎無し)とある。「青溪小姑曲」は江南で神を祀る時に歌われた「神弦歌」の一つであり、『太平御覽』巻三五〇に引く「異苑」に拠れば、青溪小姑は三国呉の時に鍾山に祀られた蒋子文の三番目の妹とされる。ただ歌詞の「小姑」は若い娘の意とも解釈できよう。

また「歎好曲三首」其一(『樂府詩集』巻四五)に「淑女総角時、喚作小姑子」(淑女総角の時、喚びて小姑子と作す)とあり、これは「小姑子」が幼い子の呼称として用いられている例。

唐より前では、他に「古詩為焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』巻一)に「却与小姑別、淚落連珠子。新婦初來時、小姑如我長」(却て小姑と別るるに、淚落ちて珠子を連ぬ。新婦初めて來りし時、小姑は我が如く長ぜり)とあり、こ

れは夫の妹のこと。

唐に入つて詩の用例は盛唐以降に見え、夫の妹の意に用いる例が多い。李白「湖邊採蓮婦」(王琦注本巻二五)に「小姑織白紵、未解將人語」(小姑白紵を織り、未だ人と語るを解せず)とあり、王建「新嫁娘詞三首」其三(『王建詩集』巻三)に「未諳姑食性、先遣小姑嘗」(未だ姑の食性を諳んぜず、先に小姑をして嘗めしむ)とある。前者は夫が不在で、その妹は話し相手にならぬことを言い、後者は姑の好みはまだ分からず、夫の妹に先に味見してもらおう新婦を詠む。

夫の妹であることが明示されていない例に、皇甫松「採蓮子二首」其二(『全唐詩』巻八九一)に「箇箇香連十頃陂、小姑貪戲採蓮遲」(箇箇 香は十頃の陂に連なり、小姑 戯を食りて採蓮遅し)とあり、また張籍より後の例だが、許渾「春日題韋曲野老村謝舍二首」其二(『全唐詩』巻五二九)に「鶯啼幼婦懶、蚕出小姑忙」(鶯啼きて幼婦懶く、蚕出でて小姑忙し)とある。前者は「小姑」が遊びに耽つて蓮採りを怠ることを言い、後者は蚕の世話のために「小姑」が忙しく働くことを言い、張籍のこの詩に類似する。

杜甫に用例はなく、張籍もこの一例のみ。

『全唐詩』は「小」を「婦」に作る。「婦姑」は嫁と姑。『漢書』賈誼伝に「婦姑不相説、則反唇而相稽」(婦姑 相説ばざれば、則ち唇を反せて相稽ぶ)とある。唐詩の用例は少なく、そのうち王建に三例有り、王建「雨過山村」(『王建詩集』巻九)に「婦姑相喚浴蚕去、閑看中庭梔子花」(婦姑相喚びて浴蚕に去き、閑かに見る 中庭梔子の花)とあり、嫁と姑が一緒に浴蚕(蚕繭の選別)に従事するために行くことを言う。また白居易「觀刈麥」0006に「婦姑荷簞食、童稚携壺漿」(婦姑 簞食を荷い、童稚 壺漿を携う)とあり、嫁と姑が田に食事を運んでくれることを言い、張籍の句に類似する。

〔採桑不餉田〕桑の葉摘みに忙しく、水田に食事を運んでこないことを言う。

陳注の引く曹植「美女篇」(『文選』巻二七)に「美女妖且閑、采桑歧路間」(美女 妖にして且つ閑、桑を采る歧路の間)とある。また顔延之「秋胡詩」(『文選』巻二二)に「蚕月觀時暇、桑野多經過」(蚕月 時暇を觀て、桑野 多く經過す)とあり、養蚕の時期には女性たちが桑の野を何度も往來することを詠む。飢えた蚕のために採桑の女性が忙しく働くさまは、六朝の詩にしばしば見えるモチーフであり、劉邈「萬山見採桑人詩」(『玉臺新詠』巻八)に「蚕飢日已暮、詎為使君留」(蚕飢えて日は已に暮れ、詎ぞ使君の為に留まらん)とあり、「陌上桑」の古辞を踏まえて、採桑の女性が飢えた蚕の世話を理由として言い寄る使君を拒絶することを詠む。

〔餉田〕は田に食事を運ぶこと。陳注の引く『詩經』豳風「七月」に「同



我婦子、饁彼南畝」（我が婦子と同じく、彼の南畝に饁す）とあり、毛伝に「饁饋也」（饁は饋るなり）とあり、鄭箋に「耕者之婦子、俱以饁来、至於南畝之中、其見田大夫、又為設酒食焉。言勸其事、又愛其吏也」（耕者の婦子、俱に以て饁り来たりて、南畝の中に至る。其れ田大夫に見い、又た為に酒食を設く。其の事を勸め、又た其の吏を愛すを言うなり）とある。

唐より前には「餉田」の詩の用例は見出せない。唐に入つて盛唐から詩の用例が見える。王維「田家」（趙注本卷一一）に「餉田桑下憩、旁舍草中帰」（田に餉りて桑下に憩い、旁舍草中に帰る）とあり、白居易「觀刈麥」（既引）に「相隨餉田去、丁壯在南岡」（相隨いて田に餉りて去く、丁壯 南岡に在り）とある。

「餉」を百名家全集・『全唐詩』は「向」に作る。

「向田」は田に行く。古い用例は無く、『魏書』索敞伝に「世隆子孟貴、性至孝、每向田耘耨、早朝拜父、来亦如之」（世隆の子孟貴、性至孝にして、毎に田に向かいて耘耨し、早朝に父に拜し、来たるも亦之の如し）とあり、索敞の友人であつた陰世隆の子孟貴が朝早くから田に出かけて農耕に励んでいたことを言う。

唐より前の詩の用例は無く、唐に入つて儲光羲「田家雜興八首」其一（『全唐詩』卷一三七）に「春至鶉鳴鳴、薄言向田墅」（春至りて鶉鳴き、薄か言に田墅に向かう）とあり、劉長卿「過前安宜張明府郊居」（『全唐詩』卷一四七）に「夕陽臨水釣、春雨向田耕」（夕陽には水に臨みて釣り、春雨には田に向いて耕す）とある。前者は農家は春に鶉鳴が鳴きはじめると、田畑に耕作に行くことを言い、後者は退隱した張明府の悠々自適の生活を詠む。

女性は養蚕の作業に忙しく、田を耕す農夫に食事を運んでこない。次の四句とあわせて一韻でひとまとまり。蚕の眠りを詠む例は唐詩にも見られるが、桑の実の成熟するさまや蚕の成育過程を具体的に述べて、採桑の女性たちの仕事に忙しくなることを表現するところが新鮮であろう。また「採桑」のために「餉田」できないと言つて、江村の春は女性たちも忙しいことを描き出すと同時に、水田を耕作する農夫たちの苦勞をも表現しているところが巧みである。

11・12 江南熱早天氣毒、雨中移秧顏色鮮

〔江南〕長江中下流域より南の地域を言う。

「江南」は常用の語。古くは『春秋』昭公三年の「左氏伝」に「子産乃具田備、王以田江南之夢」（子産は乃ち田備を具え、王以て江南の夢に田す）

とある。これは鄭の簡公が楚の雲夢沢で狩猟したことを言う。用例は諸子の書や史書に散見し、詩の用例は晋以後に増え始める。

「江南」と言えば、江南の穏やかな春の採蓮を詠んだ漢の古楽府「江南」が想起され、六朝の詩でも江南の春の穏やかな気候を詠む例が多く、その気候の厳しさが描かれることは稀である。いま江南の気候を否定的に言う例を挙げれば、呉均「酬周參軍詩」（『古詩紀』卷八一）に「江南霜雪重、相如衣服單」（江南 霜雪重く、相如 衣服單からん）とあり、孫万寿「遠戍江南」（『隋書』孫万寿伝）に「江南瘴癘地、從來多逐臣」（江南 瘴癘の地、從來 逐臣多し）とある。前者は洞庭湖周辺に赴任する周參軍（周捨）を司馬相如に擬してその身を案じたもの、後者は江南の守備軍に従事することになったことを憂え、江南は気候が悪く、本来左遷の地であると歎く。

唐に入つても詩の「江南」の用例は、江南の気候を肯定的に詠むものが多し。「江南」の気候を否定的に詠むものには、杜甫「夢李白二首」其一（『詳注』卷七）に「江南瘴癘地、逐客無消息」（江南 瘴癘の地、逐客 消息無し）とあり、これは先の孫万寿の句に類し、夜郎に流刑となった李白の身を案じたもの。また鮑防・邱丹・嚴維ら十一人が江南の十二月の景物を詠んだ「狀江南」の「季夏」（范燈の作・『全唐詩』卷三〇七）に「江南季夏天、身熱汗如泉。蚊蚋成雷沢、袈裟作水田」（江南 季夏の天、身熱く汗は泉の如し。蚊蚋は雷沢を成し、袈裟は水田と作る）とあり、これは「江南」の夏の暑さを詠む珍しい例。

〔熱早〕暑い日が続き雨が降らないことを言う。

『墨子』公孟篇に「今鳥聞熱早之憂則高、魚聞熱早之憂則下。当此雖禹・湯為之謀、必不能易矣」（今鳥は熱早の憂を聞けば則ち高く、魚は熱早の憂を聞けば則ち下る。此に当たりては禹・湯の之が謀を為すと雖も、必ず易う能わず）とある。日照りには鳥や魚はそれを避けるような自然の道理は、禹や湯王でも変更することはできないことを言う。

『墨子』以外に用例は見当たらず、唐より前の詩の用例も見当たらないようである。

唐に入つても詩の用例は見当たらず、白居易の詩題に「贈韋處士六年夏大熱早」2249があるのみである。これは連日の暑さに草木も枯れて人々が苦しむことを詠む。白居易には他に「早熱二首」3025があり、これは雨が降らずに皆がその暑さに苦しむ中、心安らかに過ごすことを詠むもの。

「早」を四庫全書本は「早」に作る。「熱早」であれば、江南は暑くなるものが早いことを言うことになろう。「熱早」の張籍より前の用例は未見。

〔天氣毒〕 氣候が過酷である。

「天氣」は常用の語。古くから用例の多い語で、「地氣」と対となつて、季節の変化や天候の変化を説明する際に用いられる。

詩語としては、魏・曹丕「燕歌行」(『文選』卷二七)に「秋風蕭瑟天氣涼、草木搖落露為霜」(秋風蕭瑟として天氣涼しく、草木揺落して露は霜と為る)とあるのが早い例のようである。これは秋の氣候の清涼さを言うが、「天氣〇」は張籍の表現と類似する。また曹丕には他に「与朝歌令吳質書」(『文選』卷四二)にも「天氣和暖、衆果具繁」(天氣和暖にして、衆果具に繁る)とあり、こちらは五月仲夏の温暖な氣候を言う。

氣候の厳しさを言う例には、曹摅「思友人詩」(『文選』卷二九)に「凜凜天氣清、落落井木疎」(凜凜 天氣清く、落落 井木疎なり)とあり、これは秋の天候の厳しさを言う。また「天氣〇」の例ではないが、北魏・崔巨倫「五月五日詩」(『魏書』崔辯伝附崔巨倫伝)に「五月五日時、天氣已大熱」(五月五日の時、天氣已に大熱なり)とある。これは賊將の葛榮に招聘された崔巨倫が、自らの才能を隠そうとして故意に初夏の暑さという非常識なことを詠んだ例。

唐に入って詩の「天氣〇」の用例は、秋の清涼な氣候を言う例が多い。「天氣」を用いて夏の暑さを言う例は、盛唐より前の詩には見られないようであり、中唐に至つて、王建「送張籍歸江東」(『王建詩集』卷四)に「五月天氣熱、波濤毒于湯」(五月には天氣熱く、波濤は湯よりも毒なり)とある。これは張籍が江東に帰るのを見送る詩であり、江東は五月には既に暑くなり、波濤がお湯よりも熱くなるであろうと諧謔的に言う例。湯の熱さを「毒」と表現するところも張籍の句と類似する。

杜甫に「天氣」の用例は三例あり、杜甫「麗人行」(『詳注』卷二)に「三月三日天氣新、長安水辺多麗人」(三月三日 天氣新たに、長安水辺麗人多し)は、春になつて氣候も新たにすることを言う。

張籍の「天氣」の他の用例は秋と春の例。

「毒」は江南の夏の氣候は、その暑さが過酷なことを言う。『論衡』言毒篇に「夫毒、太陽之熱氣也、中人人毒。人食湊懣者、其不堪任也。不堪任、則謂之毒矣。太陽火氣、常為毒螫、氣熱也」(夫れ毒は、太陽の熱氣なり。人に中るや人毒せらる。人食いて湊懣する者は、其れ任に堪えざるなり。任に堪えざれば、則ち之を毒と謂う。太陽の火氣、常に毒螫なるは、氣の熱ければなり)とある。

唐より前の詩に暑さを「毒」によつて表現する例は見られないようである。唐に入って、杜甫に「毒熱寄簡崔評事十六弟」(『詳注』卷一五)という題の詩があり、その冒頭に「大火運金氣、荊揚不知秋」(大火 金氣を運らし、

荊揚 秋を知らず)とあつて、秋になつても続く夔州の暑さを詠む。また杜甫「雨」(『詳注』卷一五)に「清涼破炎毒、衰意欲登臺」(清涼 炎毒を破り、衰意 臺に登らんと欲す)とあり、これも夔州での作で、雨がひどい暑さを解消してくれることを詠む。

この他に先に引用した白居易「贈韋處士六年夏大熱旱」(既引)に「驕陽連毒暑、動植皆枯槁」(驕陽 毒暑を連れ、動植 皆枯槁す)とあり、猛烈な太陽が続く暑さを「毒暑」と表現する。また白居易「蚊蟆」(既引)に「巴徼炎毒早、二月蚊蟆生」(巴徼 炎毒早く、二月蚊蟆生ず)とあり、巴地方に早く訪れる暑さを「炎毒」を以て表現する。

張籍には他に 449「寄韓愈」(卷七)に「夏景常昼毒、密林無鳴蟬」(夏景常に昼に毒しく、密林 鳴蟬無し)とあり、夏の昼の暑さを「毒」で表現する例が見える。

〔雨中移秧〕 雨のなか、苗を水田に移し植える。「秧」は苗代で育てて田に植える苗のこと。

陳注に引く陸游「村居初夏五首」其三(『全宋詩』卷二一七五)に「風暖緊催蚕上簇、雨餘閑看稻移秧」(風暖かにして 蚕の簇に上るを緊催し、雨餘 稲の秧を移すを閑かに看る)とあり、初夏に蚕が繭を作り、田では稲を移し植えることを詠む。

張籍より前に「移秧」の用例は見当たらず、張籍のこの詩に始まる語のようである。『齊民要術』卷二「早稻」に「五月中霖雨時、拔而栽之」(五六月中の霖雨の時に、抜きて之を栽う)とあり、稲の苗を水田に移しかえるのは、初夏の五月か六月頃である。この『齊民要術』に見える移植法については、苗代から水田に苗を移す田植えのことを指すかどうかは評価が分かるようであり、大島正昭氏は、唐詩の用例から推して唐代中期には既に広範に田植えが行われていたと指摘する(同氏『唐宋變革期農業社會史研究』、汲古書院、一九九六年。二〇三頁)。

田植えを言う語に「插秧」があり、盛唐の詩に用例が見える。岑參「与鮮于庶子自梓州成都少尹自褒城同行至利州道中作」(『校注』卷四)に「水種新插秧、山田正燒畚」(水種 新たに秧を挿し、山田 正に畚を焼く)とあり、高適「広陵別鄭處士」(『全唐詩』卷二一四)に「溪水堪垂釣、江田耐插秧」(溪水 釣を垂らすに堪え、江田 秧を挿すに耐う)とある。前者は巴蜀周辺の田植えが終わったばかりの風景を詠み、後者は鄭處士が帰隠した土地で過ごすであろう悠々自適の生活を詠む。

また杜甫にも「行宮張望補稻畦水歸」(『詳注』卷一九)に「插秧適云已、引溜加溉灌」(插秧 適に云に已みて、溜を引きて溉灌を加う)とあり、田

植えを終えて田に水を張ることを詠む。  
張籍の「秧」の用例はこの一例のみ。

「顔色鮮」植えたばかりの苗の色が生き生きとしていることを言う。

「顔色」は事物の色彩。詩語としての「顔色」については、埋田重夫氏に「詩語「顔色」の形成とその展開―白居易にみられる口語的用法をめぐって」（『中国文学研究』第八期、一九八二年）がある。埋田氏は、「顔色」の本来の語義である「顔の色」から分化した「色彩」の語義は口語用法であり、それは韻文において積極的に用いられること、そしてこの口語用法を最も早く用いたのが庾信「燕歌行」であり、唐に入って盛唐では杜甫が口語的用法の「顔色」を比較的多く用いこと、更にそれが詩語として本格的に用いられるのが中唐であり、特に白居易・元稹・張籍などのグループによって愛好され開発されたことを指摘する。

「顔色」の語は古くから用例が見える。植物の色を言う例は、北斉・邢邵「思公子」（『樂府詩集』卷七四）に「綺羅日減帶、桃李無顔色」（綺羅日に帯を減じ、桃李 顔色無し）とあり、庾信「燕歌行」（『集注』卷五）に「桃花顔色好如馬、榆策新開巧似錢」（桃花の顔色 好きこと馬の如く、榆策新たに開きて巧みに錢に似る）とある。前者は女性の顔を桃李に喩えてその容貌の衰えを言い、後者は桃花の色が桃花馬のようであると言う。

唐に入って植物の色に用いる例も増える。宋之間「有所思」（『全唐詩』卷五一）に「今年花落顔色改、明年花開復誰在」（今年花落ちて顔色改まり、明年花開くも復た誰か不在）とあり、岑參「優鉢羅花歌」（『校注』卷二）に「其間有花人不識、綠莖碧葉好顔色」（其の間に花有るも人は識らず、緑莖碧葉 顔色好し）とあり、両者ともに花の色を言う。

杜甫には「顔色」の用例が三十例あり、杜甫「秋雨嘆三首」其一（『詳注』卷三）に「雨中百草秋爛死、階下決明顔色鮮」（雨中の百草 秋に爛死し、階下の決明 顔色鮮かなり）とあり、「顔色鮮」の例が見え、長雨のために百草が枯れるなか、ただ決明（エビスグサ）のみが色鮮やかであるさまを詠む。杜甫より前の「顔色鮮」の例に、曹植「飛龍篇」（『樂府詩集』卷六四）に「忽逢二童、顔色鮮好」（忽として二童に逢う、顔色鮮好なり）とあり、これは泰山で出会った二童子の美しい容貌を言う例。

杜甫には他にも「遣興三首」其三（『詳注』卷七）に「春苗九月交、顔色同日老」（春苗 九月の交、顔色 日と共に老いたり）とあり、「顔色」を苗の色に用いる例も見える。また白居易「京兆府新栽蓮」2012に「上有紅塵撲、顔色不得鮮」（上には紅塵の撲たる有りて、顔色 鮮なるを得ず）とあり、町の風塵によって蓮の色がくすんでしまうことを言う。

張籍の「顔色」の例は他に二例。278「惜花」（卷五）は花の色に、351「劉兵曹贈酒」（卷六）は酒の色に用いる。

江南の暑さは過酷で、時に降る雨の中に水田に移し植えられた苗の生き生きとすることを描く。前の二句と合わせて四句一韻でひとまとまり。まず「熱旱」や「毒」といった、それまで詩語としてあまり用いられないこと無かった語を用いながら、江南の過酷な暑さを表現する。江南は暑く日照りが続くので、雨が降った時を狙って苗を移し終える必要がある。このようにここは農夫が苦勞しながら田植えを行うことを言うが、雨の中に移し終えた後の生き生きとした苗の様子には、辛い作業を終えた農夫の達成感や爽快感が同時に感じられ、次の結びの二句の、一年の苦勞とそれが報われたことに感謝する農夫たちの様子を導く。

### 13・14 一年耕種長苦辛、田熟家家將賽神

「耕種」耕作し種を植えて農作物を育てる。

古くから用例が見える語。經書には用例は見出せないが、『莊子』讓王篇に「春耕種、形足以勞動秋收斂、身足以休食」（春は耕種して、形は以て勞動するに足り、秋は收斂して、身は以て休食するに足れり）とある。

唐より前の詩の用例は少なく、陶淵明「癸卯歲始春懷古田舍詩二首」其二（『箋註陶淵明集』卷三）に「耕種有時息、行者無間津」（耕種 時に息有り、行者 津を問う無し）とあり、庾信「幽居值春詩」（『集注』卷四）に「錢刀不相及、耕種且須深」（錢刀 相及ばざれば、耕種 且に 須く深くすべし）とある。前者は春に農耕に勤しむことを楽しみ、時に休みつ農耕を行うことを言い、後者は春になって農作業がはじまり、富貴にはなれそうもないので、農耕に励もうという思いを詠む。

唐に入って、孟浩然「山中逢道士雲公」（『全唐詩』卷一五九）に「春餘草木繁、耕種滿田園」（春餘 草木繁り、耕種 田園に満つ）とあり、韋応物「觀田家」（既出）に「田家幾日間、耕種從此起」（田家 幾日の間、耕種 此より起こる）とある。前者は、春の終わりに草木が茂り、多くの人々が田園で農耕に励む様子を詠み、後者は春二月になって農作業が始まることを言う。

また王建「水運行」（『王建詩集』卷一）に「去年六月無稻苗、已說水鄉人餓死。：辛勤耕種非毒藥、看者不入農夫口」（去年六月 稻苗無く、已に説く水郷人の餓死すと。：耕種に辛勤するは毒藥に非ず、農夫の口に入らざるを看す）とあり、これは水田を作る農民の苦勞を言い、苦勞して得た収穫



を役人に奪われてしまうことを歎く例。

杜甫には熟語としての用例はなく、張籍の用例は二例。9 「野老歌」(巻一)に「老農家貧在山住、耕種山田三四畝」(老農 家貧しくして山に在りて住み、耕種す 山田三四の畝)とあり、老いた農夫が狭い山の細々と耕して種を植えることを詠む。

〔長苦辛〕 いつも苦勞する。

陳注の引く「古詩十九首」其四(『文選』卷二九)に「無為守窮賤、轉軻長苦辛」(為す無かれ 窮賤を守り、轉軻して長く苦辛すること)とあり、貧窮を守り不遇を憂えて苦勞することなく、宴席の歡樂を樂しむべきことを言う。

唐に入つて、高適「送蔡山人」(『全唐詩』卷二二三)に「看書學劍長辛苦、近日方思謁明主」(書を看て劍を學びて長辛苦し、近日 方に明主に謁せんことを思う)とあり、崔顥「江畔老人愁」(『全唐詩』卷一三〇)に「雖然得歸到鄉土、零丁貧賤長辛苦」(然りと雖も歸るを得て郷土に到り、零丁貧賤にして長に辛苦す)とあり、前者はいまだ遇を得ない士の出世を目指す苦勞を詠み、後者は元梁陳の貴族出身で、戦乱で全てを失った老人が再び故郷に帰つての苦勞を詠む。後者はこの後に老人が採樵や農耕を営むさまを描き、生活の困窮を詠むところが張籍に近い。

張籍の用例は二例。31 「賈客樂」(巻一)に「農夫稅多長辛苦、棄業寧為販寶翁」(農夫稅多くして長に辛苦し、業を棄て 寧ろ販寶の翁と為らん)とあり、農民がつねに稅の多いことに苦しむことを言い、同じく農民の苦勞を言う。その【語注】を参照。

〔田熟〕 稲が実る。

経書や史書などに古い用例は無く、唐より前の詩の用例としては、庾信「奉報趙王出師在道賜詩」(『集注』卷三)に「幾月芝田熟、何年金竈成」(幾月か芝田熟し、何年か金竈成らん)とあり、趙王の長寿のために仙薬の芝草を実らせ、金丹を生成できることは何時のことかと歌う。

唐に入つても、詩の用例は杜甫より前には見当たらず、杜甫「赤谷西崦人家」(『詳注』卷七)に「溪回日氣暖、逕轉山田熟」(溪回りて日氣暖かに、逕轉じて山田熟す)とあり、稔りを迎えた山間の田の様子を詠む。

〔家〕 どの家も。

常用の語。張籍にも用例が多い語であり、7 「征婦怨」、12 「築城詞」、22

「永嘉行」、26 「北邙行」、38 「江南曲」(以上、巻一)に既に見える。それだけの【語釈】を参照。

〔賽神〕 田の神を祭る。

『史記』封禪書に「冬塞禱祠」(冬に祠に塞禱す)とあり、索隱に「与賽同。賽、今報神福也」(塞は)賽と同じ。賽は、今の神に福を報ずるなり)とある。『事物紀原』賽神には、「賽神」は十月に一年の農作業が終つた後、村の社で酒食を設けて田の神に感謝する祭で、周の蜡祭を起源とすると言う。

「賽神」の古い用例は見当たらず、唐に入つて盛唐の詩の題名に用例が見える。王維「涼州賽神」(趙注本卷一四)は騎射の神を祀る涼州地方の祭を詠んだもので、李嘉祐「夜聞江南人家賽神因題即事」(『全唐詩』卷二〇六)は神を送迎する江南の古い風俗を詠む。「賽神」は田の神に祀る場合に限らず、民間のさまざま神々を祀る場合に用いられるようである。

田の神に感謝を報告する秋の祭を詠む例としては、王建「賽神曲」(『王建詩集』巻一)に「但願牛羊滿家宅、十月報賽南山神」(但だ願う 牛羊の家宅に満ち、十月 南山の神を報賽せんことを)とあり、十月に一年の収穫に感謝して神を祀ることができるよう願う人々の思いが詠まれている。

また元稹「賽神」(『元稹集』巻三)に「年年十月暮、珠稻欲垂新。家家不斂穫、賽妖無富貧」(年年十月の暮、珠稻 新を垂れんと欲す。家家 穫を斂めずして、妖を賽ること 富貧無し)とあり、これは楚の風俗としての「賽神」を詠むもので、楚の人々は十月に稲が実るころになると収穫もせず、貧富の差無く、どの家も神を祀る祭りを行っていることを詠む。

結びの二句は、農事の一年を通じての苦勞とその苦勞が報われて稲が無事に実ると人々は神に感謝する祭りを言うことを行うことを言う。ここは二句一韻でひとまとまり。「賽神」の語釈に引いた元稹の「賽神」では「妖」と言う語が用いられているように、楚地方の「賽神」が元稹の目には奇異な風俗として映ったようである。これに対して、張籍は農事の一年の苦勞を知れば、「賽神」は江南の人々の自然な思いの発露なのだということを言うようである。

【補】

一 張籍「江村行」の構成

この詩の構成は以下の通りである。

- 1 江村の初春の風景―春の農事の始まり
- 5 江村の耕作―田起こしの苦勞
- 9 江村の農事―養蚕と田植えの苦勞
- 13・14 秋の収穫の喜び

張籍は冒頭の四句では、江村の穏やかな初春の風景から歌いおこすが、五句目からは水田耕作をする農夫たちの苦勞を読み込み、そのような苦勞があるからこそ、秋の収穫を喜び、神に感謝するのだという。

詩全体は初春に水量が増えて農事が始まり、春から夏にかけて田起こしが行われ、初夏には養蚕と田植えの時期を迎え、秋に収穫を迎えることを言う。一年の農事のうちでも、特に春から夏にかけて、田起こしから田植えに至るまでの農事の様子を描いている。

冒頭の四句から次の四句は、初春の江村の田園風景から農事の苦勞へと突然転換するのではなく、四句目の「短衣」の句で泥に浸かって作業する農夫の姿を描くことで、次の四句の水に浸かりながら作業する農夫の苦勞する姿を導いている。また九句目からは視点を水田の農夫から採桑をする女性たちへと転じ、一家総出で農事に従事しなければならぬ農事のありさまを描きだしている。

そして、結びの二句ではそのような一年を通じた苦勞が報われて収穫を迎えた時の、彼らの喜びが神に感謝する祭りとして表されることを言う。この結びの二句も、十二句目の「雨中」の句において、苦勞の末に苗を移し植え終えた時の、苗の生き生きとした姿を描くことによつて導かれており、全体として場面が自然に展開するような巧みな構成となっている。

二 張籍「江村行」の主題について

解題でも述べたように、貧農の苦しみを描き、当時の政治状況を批判することは、中唐期の諷諭詩の重要なテーマの一つであった。いま有名な李紳「憫農二首」(『全唐詩』巻四八三。『全唐詩』は「古風二首」と題す)を挙げておく。

- 李紳「憫農二首」其一
- 1 春種一粒粟 春に種う 一粒の粟
  - 2 秋成万顆子 秋に成る 万顆まんかの子
  - 3 四海無閑田 四海 閑田無きも
  - 4 農夫猶餓死 農夫 猶お餓死す

- 其二
- 1 鋤禾日當午 禾を鋤いて 日に午に当たる
  - 2 汗滴禾下土 汗は滴る 禾下の土
  - 3 誰知盤中餐 誰か知る 盤中の餐
  - 4 粒粒皆辛苦 粒粒 皆辛苦なるを

其一是秋の収穫は農夫の口に入ることはなく、彼らは餓死してしまうことを言い、官の重い課税を暗に批判し、其二是、稲作の苦勞とその苦勞を知らない人々を批判する。このような諷諭を目的とした農夫の苦勞を詠む詩に、白居易「觀刈麥」(既引)がある。これは夏に麦を刈る作業に従事する農夫の苦勞を具体的に描いており、「語釈」でも引いたように、張籍「江村行」と類似した表現もある。いまその前半のみを挙げる。

- 白居易「觀刈麥」(既引)
- 1 田家少閑月 田家 閑月少なく
  - 2 五月人倍忙 五月 人倍まます忙し
  - 3 夜來南風起 夜來 南風起こり
  - 4 小麦覆隴黃 小麦 隴を覆いて黄なり
  - 5 婦姑荷簞食 婦姑は簞たな食を荷かい
  - 6 童稚携壺漿 童稚は壺漿たじょうを携かう
  - 7 相隨餉田去 相隨いて田に餉かりて去り
  - 8 丁壯在南岡 丁壯は南岡なみに在り
  - 9 足蒸暑土氣 足は暑土の氣に蒸して
  - 10 背灼炎天光 背は炎天の光に灼やかる
  - 11 力尽不知熱 力尽きて熱きを知らず
  - 12 但惜夏日長 但だ夏日の長きを惜しむ
- (下略)

この詩は文集で「諷諭」に分類されているように、初夏の暑さに苦しみながら麦を刈る農夫の苦しみを描き、省略した後半では子を抱えながら落ち穂を拾う貧婦人に重税によつて家も田も奪われたことを語らせ、農事に従事することもない自らを恥じることばで結ばれている。この詩は題下注に「時為整屋縣尉」(時に整屋縣の尉たり)とあり、元和元年、白居易三十五歳の時に整屋縣の尉であった時の作であり、張籍の「江村行」よりも制作時期は早いと考えられる。

張籍の「江村行」は、これらの諷諭を目的とした詩とはやや異なり、諷諭の意図は明らかにされておらず、結びの二句では一年の苦勞を経て、江村の人々が苦勞の結果として得られる收穫の喜びに感謝することを詠んで結ばれている。

收穫を喜ぶ農家の様子を詠んだ詩に、王建の「田家行」(『王建詩集』巻二)があり、これは五月に麦の收穫を迎えた農家の人々の喜悅する姿を詠む。

## 王建「田家行」

- 1 男声欣欣女顔悦  
2 人家不怨言語別  
3 五月雖熱麥風清  
4 簷頭索索練車鳴  
5 野蚕作繭人不取  
6 葉間撲撲秋蛾生  
7 麥收上場絹在軸  
8 的知輪得官家足  
9 不望入口復上身  
10 且免向城売黃犢  
11 田家衣食無厚薄  
12 不見農家身即樂

男声欣欣として女顔悦び  
人家 言語の別なるを怨まず  
五月 熱しと雖も 麦風清く  
簷頭 索索として車を練りて鳴る  
野蚕 繭を作るも 人は取らず  
葉間 撲撲として 秋蛾生ず  
麦は収めて場に上り 絹は軸に在り  
的に知る 官家に輪し得て足るを  
望まず 口に入りて復た身に上るを  
且く城に向いて黄犢を売るを免がる  
田家の衣食 厚薄無きも  
農家を見ざれば身は即ち樂し

この詩の大意を示せば、次のようであろう。―農家では男たちは喜々とし喜びの声をあげ、女たちも顔をほころばせており、それぞれが口々にしゃべり立てても咎めることもない。五月は暑いといっても麦風はすがすがしく、家の中では繭を繰る車の音が鳴っている。野生の蚕は繭を作っているけれども、人々はそれを採ることもないので、葉の間には繭から孵った秋蛾が盛んに飛び立つ。麦は收穫して秋場に集められ、絹はすでにできあがつて軸に巻いており、いずれも官に運ぶのに十分であることがはっきりと分かる。麦が口に入ることや絹を自分で着ることなど望みはしない。ひとまず子牛を街に売りに行くことは免れた。農家の衣食は十分ではなくとも、督促の役人を見ることが無ければ、それこそが彼らの楽しみなのである。

この詩は前半においては、五月の暑さも苦にすることも無く、また野生の繭を收穫することもないほど養蚕の成果も十分であることを詠み、十分な收穫を喜ぶ農家の様子を描く。しかし、後半には彼らの喜びが十分な收穫そのものにあるのではなく、官に税として収めるのに十分であることにあり、彼らにとっての楽しみは、税を督促する役人が現れないことにあることが明らか

かにされて結ばれている。この詩の主眼は、農事の苦勞ではなく、收穫を喜ぶ農家の様子を描くことにあるが、その喜びの背後には、重税を課せられ、役人の督促に脅える農家の苦しみがあることを示し、諷諭の意図も込められている。

張籍の「江村行」は直接的に重税を課せられる農家の苦悩は描かれてはいないが、中唐期の農事の苦しみを詠む諷諭詩の系譜を考慮するのであれば、この詩にも或いはそのような諷諭の意図を読みとることも可能かもしれない。しかし、この詩には明確にはそのような諷諭の意図は読み込まれておらず、また詩題の「江村」は張籍以前ではのどかでおだやかな「江村」を詠むものであり、特に諷諭と結びつくものではない。また十二句目の「雨中移秧顔色鮮」に描かれる、雨中に移し植えられた苗の生き生きとした姿からは、その様子を見て喜ぶ農夫の誇らしい笑顔が想像でき、やはり李樹生が言うように、江南の農村生活を描写した詩だと解釈したほうが良いであろう。

増田清秀氏は、張籍と王建の樂府の特色は、庶民の生活の実態を取材した作品にこそ發揮されると言う。そして、両者は庶民層の生活の子細に觀察し、現実批判の立場から制作されたか否かに関係なく、作品そのものに庶民の生活の実態が詠まれているところに、大きな意義があるとして、その一例として、この「江村行」も挙げる(同氏前掲書二九九頁)。

増田氏の指摘するように、この「江村行」の特色は、江村の農民の生活の子細に觀察して、その実態を描くところにある。そして、この詩が従来の「江村」とは異なるところは、「のどかなでおだやか」という「江村」の従来のイメージに対して、冒頭四句ではそのイメージをなぞってみせながら、そのようなイメージの向こう側にある「江村」の実態を詠むことにある。

そして、その「江村」の現実とは、水田耕作や採桑養蚕の苦勞であり、またそのような一年の苦勞を自らの功とはせず、神のおかげと感謝を献げる農民たちの純朴な姿であろう。王建「田家行」も、その背後には作者の官に対する批判がうかがえるものの、そこに描かれる農民たちは官に收穫を収めねばならないことを恨むことなく、無事に税を納めることができることをむしろ喜ぶ姿が描かれている。張籍の「江村行」の結びの句にも、そのような純朴な農民への温かなまなざしを感じられており、それは、「賽神」の語釈に引いた元稹「賽神」が、收穫に感謝して神を祭る江南地方の風俗を「妖」として奇異な目で眺めるのとは対照的である。張籍は、元稹のように江南の風俗を奇異な目で見る読者に対して、江村の農民の苦勞とその純朴な姿を描くことで、その風俗の由つて来たるところを示そうとするのは少々うがちすぎであろうか。

(佐藤)



